

茨城城郭サミット

〔茨城県中世城館跡総合調査成果報告会〕

— 県央・県西編 —

12:35～12:45

趣旨説明 高橋 修

12:45～13:35

記念講演 戦国城館のやきもの 浅野晴樹 1

13:45～14:55

[県央編]

報告① 県央地区の中世城館 関口慶久 10

報告② 戦国期江戸氏の拠点城館とその役割 藤井達也 16

報告③ 中世城郭としての笠間城 額賀大輔 25

15:05～16:15

[県西編]

報告④ 県西地区の中世城館 大谷昌良 33

報告⑤ 県西の城と内宿地名 遠山成一 39

報告⑥ 河川湖沼と中世城館 越田真太郎 47

誌上報告

新規城館遺跡の紹介 五十嵐雄大 55

笠間城跡表採の瓦について 齋藤徳之・比毛君男 58

16:25～16:55

パネルディスカッション コーディネーター：高橋 修

高橋修(たかはしおさむ)

現職：茨城大学評議員／同人文社会科学部副学部長／同教授 笠間城跡調査指導委員会副委員長

元職：茨城県中世城館跡総合調査委員会委員長

出身地：埼玉県熊谷市 出身大学：神戸大学大学院文化科学研究科

主な著書：『中世水軍領主論』（高志書院、2023年）、『戦う茂木一族』（編著、高志書院、2022年）、『戦国合戦図屏風の歴史学』（勉誠出版、2021年）、『熊谷直実 中世武士の生き方』（吉川弘文館、2014年）など。

浅野晴樹(あさのはるき)

元職：埼玉県立嵐山史跡の博物館学芸員

出身地：岐阜県中津川市 出身大学：國學院大學文学部史学科

主な業績：『中世考古やきものガイドブック』（新泉社）、「烏山と城下の景観について」（烏山市教育委員会『烏山城跡確認調査報告書』2022）

関口慶久(せきぐちのりひさ)

現職：水戸市教育委員会（歴史文化財課課長補佐）

出身：千葉県市川市 出身大学：立正大学大学院文学研究科修士課程

主な業績：「水戸城の調査成果と歴史景観整備の現状」（『地方史研究』413号 2021年）、「連載 水戸の城さんぽ」（令和5年4月から『広報みと』の裏表紙で連載中）

藤井達也(ふじいたつや)

現職：水戸市立博物館学芸員

出身：茨城県大子町出身 出身大学：茨城大学大学院人文科学研究科

主な業績：「古河公方足利政氏と佐竹氏・岩城氏 —永正期における下野出兵をめぐる—」（『常総中世史研究』8号、2020年）、「中世都市・水戸の成立—那珂川水系との関わりから—」（地方史研究協議会編『海洋・内海・河川の地域史—茨城の史的空間—』雄山閣、2022年）

額賀大輔(ぬかがだいすけ)

現職：笠間市教育委員会教育部生涯学習課文化振興室

出身：茨城県つくば市 出身大学：茨城大学大学院人文科学研究科

主な業績：「笠間城」（『かさま歴史ブックレット4 戦国の城を読み解く』笠間市教育委員会 2022年）、「内海世界と下道を結ぶ」（高橋修・宇留野主税編『鎌倉街道中道・下道』高志書院 2017年）

大谷昌良(おおやまさよし)

現職：常総古文化研究所 元職：筑西市教育委員会

出身：筑西市 出身大学：立正大学文学部史学科考古学専攻

主な業績：坂詰秀一編『武蔵八坂前窯跡』（雄山閣出版 1984年）、協和町小栗地内遺跡調査会『小栗地内遺跡群発掘調査報告書』（1986年）

遠山成一(とよやませいいち)

現職：千葉市立郷土博物館研究員（会計年度職員） 千葉経済大学非常勤講師

出身地：千葉県東金市 出身大学：早稲田大学法学部

主な業績：「小弓公方足利義明の関宿城攻めに関する考察」（『千葉史学』第83号 2023年11月）、「元亀年間における千葉氏と里見氏の抗争に関する一考察 —「長崎」地名をめぐる—」（『千葉史学』第73号 2018年11月）

越田真太郎(こしだしんたろう)

現職：桜川市役所建設部都市整備課

出身地：東京都豊島区 出身大学：大正大学文学部史学科

主な業績：「常陸国の地域開発-真壁郡の集落の展開-」（『古代文化』59(2)（通号 569）2007）、「小田城と常陸の中世道」（『鎌倉街道中道・下道』2017）、「常陸・北下総の中世石造宝塔」（『大正大学考古学論集』2020）

趣旨説明

2018～22年度「茨城県中世城館跡総合調査」

- ・ 5つの地区部会に分かれ、分布と縄張りの調査
- ・ 中世史、考古学、城郭史
 - 発掘調査→実測図？ 歩測→縄張図？ + 文献史料に見える城郭
- ・ 1135ヶ所の中世城館跡の分布を確認 ※1979年には529ヶ所
 - ☞ 『茨城県中世城館地図』
- ・ 新たに673ヶ所を図化
 - ☞ 全国遺跡報告総覧／奈良文化財研究所
<http://doi.org/10.24484/sitereports.131674>

本日は「茨城県中世城館跡総合調査」の成果報告会

- ・ [県央編] と [県西編] ※ [県北編] [県南編] [鹿行編] は来年度
- ・ 報告①で調査区全体を概観 → 分布
- ・ 報告②③で個々の城館の構造を踏まえた研究成果 → 縄張り
- ・ パネルディスカッション

近年の城郭史研究から

- ・ 年代→編年 ⇔ 縄張り(構造) … 杉山城問題
 - ⇔ 遺物 織豊期の三点セット
 - ・ 惣構えや平地居館、根小屋 … 歴史的景観の中で ☞ 保存・活用
 - ・ 戦国領主の「領」の構造 → 城館の分布、規模
- ⇒ 個別城郭研究だけではなく、地域の政治史の中で、社会史として

成果報告会の前に、記念講演「戦国城館のやきもの」(浅野晴樹)

- ・ 城郭にかかわる基礎知識を
 - 出土するやきものについて ☞ 城郭の編年
- ・ 「やきものまち」笠間での開催を記念して

戦国城館のやきもの

元埼玉県立嵐山史跡の博物館学芸員

浅野 晴樹

はじめに

御高齢の方であれば、1950年代の高度経済成長期が始まる以前の田舎の生活を思い起こしてほしい。厨房や食卓の食器類、味噌部屋の味噌や醤油の貯蔵容器の多くはやきものや桶などの木製品であった。中世の絵巻などの絵画資料をみても、そこに描かれているさまざまな生活用具の大半は木製品であり、そのなかでやきものは食に関わる用具を中心に描かれている。

しかし、中世遺跡から出土する遺物の大半はやきものである。

なぜ遺跡からやきものがたくさん出土するのであろうか。それはやきもの以外の桶などの木製品は不用になれば燃料として使われ、鉄鍋などの金属製品はリサイクルにまわされるからである。リサイクルされない木製品は土のなかで腐り、金属製品も錆びて朽ちてしまう。いっぽう、割れてしまったやきものは堀や穴などに捨てられ、朽ちることもなく地中に残りつづけるのである。

広島県福山市に草戸千軒町とよばれる中世の港町遺跡がある。その遺跡の発掘調査で得られた成果をもとに町屋が復元されている。木造の掘立小屋は板敷、板壁で、食物を入れた壺や甕、折敷に木製椀・皿などが復元されているが、主体は木製品なのである。

発掘されたやきものは、さまざまな生活用具の一端を担うのみであることを認識する必要がある。やきものを調べるばあいには、やきものとともに使われた木製品や鉄製品など発掘されない目に見えない食器全体を常に描くことが、やきものの本来的な役割を認識するために重要なことである。

そして、出土したやきものを調べることは中世考古学にとって大切なことを含んでいるのである。それはやきものが食に関わる道具の中心にあり、そして、食に関わる道具は階層にかかわらず、誰もが使うものであるからだ。

私たちは食器と言え、食卓で使う椀・皿、鉢などを指すであろう。ただ、広義には食物の貯蔵のための甕、調理や煮炊きのための道具なども含めて考えるばあいがある。ここでは食器を広義の意味でとらえた。

以上のことを念頭に戦国城館から出土したやきものを見てゆきたい。

1. 戦国城館出土のやきもの

(1) 白石遺跡と出土遺物

茨城県内でも戦国時代の城館の調査があちこちで行われてきた。ここでは、水戸市の白石遺跡の出土遺物を取りあげてみたい。この白石遺跡は、一町半四方（約165メートル）の規模の方形城館で、15世紀中葉から16世紀中葉にかけて存続していたと推測されている。この遺跡で注目すべき点は、出土したやきものの総破片数3,180点を産地別、器種別に分類して、その割合を出していることである（榎村1993）。

遺跡から出土したやきものを産地別、器種別、用途別などの要素で数量把握することは、その遺跡の性格を明らかにするうえでとても重要な作業と考えられているからだ。また、このような数量的資料は、他の遺跡と比較検討する際にも役立つからである。

(2) 白石遺跡のやきものの産地

それでは、白石遺跡のやきものにはどのような産地のやきものが出土していたのかみてみよう。

出土やきものの産地は、大きく三つに分けられた。

一つ目が、在地産と呼ぶ一群の土器類である。これらの土器は、常陸国内もしくはその周辺で生産されたやきもので、その流通圏は広くて一国、狭ければせいぜい一郡ほどの範囲のものである。瓦質の内耳鍋、「かわらけ」とよばれた土器の皿などが出土した。土製鍋は出土品のなかで最も多く 2,500 点確認され、次いでかわらけが 380 点であった。

二つ目が、東海地方の常滑窯や、瀬戸窯、瀬戸・美濃大窯などの産地のやきものである。常滑窯製品は甕やすり鉢（片口鉢）が出土した。瀬戸窯は 12 世紀末から 15 世紀後半まで瀬戸周辺で生産された日本唯一の施釉陶器の産地で、その製品は古瀬戸とよばれた。白石遺跡では瓶子、盤、椀などが確認された。瀬戸・美濃大窯は、15 世紀末期にあらたに出現した大窯で生産されたやきもので 17 世紀初頭まで生産された。遺跡からは灰釉皿、天目茶碗、すり鉢などが確認された（愛知県 2007）。

そして三つ目が中国陶磁器を中心とする貿易陶磁である。国産陶器に匹敵する量の青磁碗、青磁皿、染付皿、染付碗などが出土した。

これらのやきものの産地は、やきものの用途と密接な関係をなしているのである。

2. やきものの用途別分類

やきものは食に関わる道具の中心にあることを述べた。そして、その食器の用途は広義の意味で貯蔵具、調理具、煮炊具、食膳具などにわけられる。食器の使用の順序にしたがい説明を行いたい。

(1) 貯蔵具

常滑焼に代表されるように、国産陶器の壺・甕が中心であり、それに木製の曲げ物や桶がある。さらに中国陶磁器の酒海壺や古瀬戸の瓶子などの施釉された高級陶磁器が加わる。

陶器の貯蔵具は中世窯業地の主力製品であり、中世前半には各地の武士や寺社などの支配層の庇護のもとに多くのやきものの産地が生まれた。主要な生産地としては、古代の須恵器の流れを汲む須恵器系陶器である東播磨の魚住窯、能登の珠洲窯、それと古代の施釉陶器である灰釉陶器の流れを汲む瓷器系陶器である尾張の常滑窯、渥美窯、瀬戸窯などであった。中世後半には、須恵器系陶器の魚住窯や珠洲窯は衰退してゆき、西日本では備前窯、日本海側では越前窯、太平洋側では常滑窯が、列島の流通圏を三分するやきものの産地となるのである。

博物館の江戸時代の展示では、土間に水甕が置かれている。また、いまでも水源地などを水甕と表現する。そのようなことからやきものの甕は、水の貯蔵としての用途がまず浮かぶのではないだろうか。

その水甕は、甕の用途のひとつでしかない。甕や壺は、酒甕、味噌甕、穀物甕など多くの食料品の貯蔵用であった。そして、貯蔵のみでなく、藍甕、油甕、酒や味噌の醸造など生産用具としての用途も高いものであった。肥甕のように農業用、さらには埋葬用の骨甕として使われることもあり、その用途は実に豊富であった。

古代以来、大甕は酒の醸造用、貯蔵用として使われてきた。その系譜は、中世陶器の大甕の用途としても引きつがれた。しかし、結桶が 15 世紀以降急激に列島各地に広がってゆくことで、中世後期には大甕の酒の醸造用途が減少したことはまちがいない。やきものの大甕が大きなもので三石入りほどであるのに対して、結桶は十石入りとやきものの甕の三倍以上の大きさであり、味噌や醤油などの生産も飛躍的に増えたものと考えられる。

それでは、白石遺跡などの城館で確認される甕は何に使われたのであろうか。基本的には穀物、味噌、酒、漬物などの食物の貯蔵が主体であったろう。しかし、常陸のこの時期の商業の発達にも関わることであるが、外部からの調達がうまくいなく、城館内で甕を使い酒や味噌の醸造が行われた可能性もある。武蔵の八王子城の発掘調査では、常滑の大甕が相当数出土した。これは籠城など視野に城内でも酒や味噌の醸造などを行ったのではないかと思ひ描いたこともあった。

いまひとつ、白石遺跡からは古瀬戸瓶子が出土している。壺や瓶は、中世前期では装飾が豊かなものであった。古瀬戸瓶子は、中国陶磁を模倣した中世唯一の施釉陶器であった。常滑焼や珠洲焼などの無釉のやきものでもさまざまな装飾や文様を施した壺がつくられた。これらは酒器として使用されたもので、格の高い支配層が使う高級なやきものに分類される。やきものとともに漆器の瓶子が酒器として使われたことは文献や絵画資料からわかる。中世前期に使用された青白磁梅瓶などは、東国武士が好んだ容器といわれ、関東の戦国城館から出土する例が多い。

壺と甕の違いであるが、考古学では口のすぼまるものを壺、広がったものを甕とわけのだが、日葡辞書では両者を区別していない。中世の辞書である『節用集』では、甕の字は「酒器」とされている。また、中世の酒税は「壺銭」とよばれた。このように中世では、壺と甕の区別は明確でなかった（小野 1941）。

（2）調理具

すり鉢は、味噌や胡麻、山芋などをすりつぶすための道具で、中世を代表するやきものといわれている。中世全般をとおして列島各地から出土する。

中世にすり鉢が発達した理由のひとつに、仏教の精進料理をあげる人もいる。大豆や山芋をすりつぶし豆腐や高野豆腐などさまざまな食材を作り出す。ただ、それが当時の庶民までゆきわたる食文化とは思えないが、素材を加工して新たな食材を作ることができるすり鉢は、しだいに列島各地に広がって行ったことはまちがいない。そして、その後の日本の食文化に欠くことのできない食器として普及し、いまでも多くの家庭で使われている。

さて、このすり鉢には「すり目のあるもの」と「すり目のないもの」があった。東播磨の魚住焼や常滑焼などで生産されたものはすり目がなかった。常滑の考古学研究者は、すり目のないすり鉢を一般的に片口鉢とよんでいる。私も基本的に片口鉢とよんでいる。

ただ機能のうえでは、両者にちがいはなかった。遺跡から出土する常滑焼のすり鉢は、頻繁に使用されたため内面が平滑となったものが多い。

北関東でも上野、下野、北武蔵などでは、鎌倉時代から南北朝時代の遺跡には常滑焼の片口鉢とともに、この片口鉢をまねたすり目のない在地産の片口鉢が普及する。

室町時代には、古瀬戸製品のなかにすり目をもったすり鉢が生産されるようになり、そして 15 世紀後半からは瀬戸・美濃の大窯ですり鉢が大量に生産されるようになった。この瀬戸・美濃製のすり鉢を模倣した在地産の瓦質のすり鉢が北関東各地で生産されるようになった。そのいっぽうで、常滑焼の片口鉢を模倣する事例は戦国時代にはまったく確認できない。そのころから調理具のすり鉢は、鉄釉を施し、すり目のあるものとの認識が定着し、近世のすり鉢に続くのである。

表 1 をみていただきたい。白石遺跡とともに那須烏山市の烏山城跡や佐野市唐沢山城跡の出土遺物を見るとすり鉢の出土量が少ない。このような傾向は、北関東から東北地方の福島、宮城県などの戦国時代の遺跡にみられるのである。この背景には、すり鉢により新たな食材を生み出すような食文化があまり発達しなかったのだろうか。そのいっぽうで木製の臼や杵、こね鉢などを主に使う食文化が流行っていたと考えられなくもない。

戦国時代には石臼が、列島全域に普及していったことも注意しなければならない。

(3) 煮炊具

食べものを煮炊きするための道具の代表は鉄製の鍋と釜である。鍋の代表的な用途は、煮る、炒める、焼くなどであろうか。釜には湯沸しを基本として蒸す、ゆでる用途がある（鋤柄 1997）。この鍋と釜には金属製以外にも、石製、やきもの製があった。やきもの製のなかでも瓦質の土鍋、土釜が各地の遺跡から出土する。

『一遍聖繪』の信濃国佐久郡の伴野市の場面では、掘立小屋のなかで乞食が簡易な炉に鍋を置いて食事の準備をしているところが描かれている。鍋は黒色で表現されていることから鉄鍋であろう。このような絵画資料や文献資料から中世では、貧富を問わず鉄鍋を使っていたものと考えられる。

白石遺跡の出土やきものなかに大量の土製内耳鍋が出土していた。

西日本では、鎌倉時代から土製鍋・釜はあったのだが、常陸国をはじめとする関東各地で土製の鍋が流行するのは、15世紀以降のことであった。それにはどのような理由があったのだろうか。

戦国時代に入り、鉄が不足したことから土製の鍋がつくられるようになったとする意見もある。鍋・釜はやきもので代用できても、武器類は鍋・釜のようなわけにはいかないからだ。日本の戦時中の金属製品の供出と同じ発想である。そのようなことをしても武器・武具の増産には結びつかない。土器製の鍋の出現には、土器製を使う必要性が生じたと考えるべきである。それには幾つかの可能性がある。

高度経済成長期以前の列島各地の農村の生活を考えてみてほしい。吊手付きの鉄鍋や鉄瓶を囲炉裏のうえに自在鉤でつり下げて使用した。それはおもに汁物の調理や湯沸しのためであった。土鍋の素材を考えると鉄鍋のような汁物の調理には向いていない気がする。

中世の鉄製内耳鍋は、鍋の内側に三つの耳が付くもので、耳に金属や蔓などを付けて自在鉤につるして使用したものであろう。鉄鍋と同じように土製内耳鍋も使われたのだろうか。土製鍋に食材を入れて自在鉤につるして使用することは重量のうえで無理がある。

しかし、五徳の上に乗せて使えば、湯を沸したり、ゆでたりする調理であれば十分可能である。そのように考えたとしても、土製鍋は鉄鍋のように長期使用には耐えられない。そのことから土製鍋は短期の使用を前提とした消費財として鉄鍋とどのような使われ方をした可能性はある。ただ、このような調理法だと土鍋を頻繁に生産しなければならず、ひょっとすると鉄鍋よりも高価なものになってしまうかもしれない。そのように考えると鉄鍋の代替品として庶民が土製鍋を使ったものとは考えづらく、土製の煮炊具は一定階層以上の食の道具として存在したのではないだろうか。

白石遺跡の土製内耳鍋は15世紀中葉から16世紀前半ごろのものと考えられている。

16世紀中葉以降になると土製内耳鍋は、白石遺跡のみならず、列島全域で遺跡から出土しなくなるのである。この土製鍋の生産のいっぽうで、高さを減じた「焙烙」が、戦国時代の遺跡から出土するようになる。土製煮炊具は、「炒る」調理機能に集約されてゆく。この変化は列島全域でみられる変化である。

また、表1にあるように15世紀後半以降のやきものを出土させる烏山城跡では、この土製鍋がまったく確認されていないのである。料理に対する嗜好のちがいのなか、それとも根本的な食文化の違いがそこにはあるのだろうか。

(4) 食膳具

食膳具は、飯茶碗・皿・箸・鉢など食事のときに使う道具で、狭義の意味の食器である。

土器のような在地で生産された皿（かわらけ）から、中国陶磁器のように東アジア全域に流通する

青磁碗などの高級やきもの、列島規模で流通する瀬戸・美濃製の施釉陶器があった。また木・漆器製の椀・皿も多く使用された。食膳具は、他の用途のやきものより素材や器種が豊富であり、その使用においても複雑な内容をもっていた。白石遺跡でもかわらけや中国陶磁器や瀬戸・美濃製の椀・皿が確認された。

かわらけは、饗宴儀礼のための酒杯と考えられている。その起源は古代の土師器であり、京都を発信源として古代から近世初期まで、その機能を継続する。このかわらけは、鎌倉時代後半以降には灯明皿として使用されることも多くなる。

中国陶磁器の椀・皿、瀬戸・美濃製の椀・皿は、広域に流通する食膳具であることを考えるならば、一定の階層以上のための食膳具ととらえることもできる。たとえば小田原のような城下町、品川などの流通の拠点となる都市や港では、高級なやきものでも比較的手に入りやすいことから、商工民などの庶民でも利用していたものと考えられる。

一定量のやきものが出土する戦国城館をみたとき、食膳具のなかでかわらけの割合が高い遺跡ほど格の高い遺跡と考えられている。表1の烏山城跡、唐沢山城跡、金山城跡では、かわらけの出土割合が80パーセントを越えている。しかし、白石遺跡では10パーセントにもみえない。

数郡を支配する烏山城跡、唐沢山城跡、金山城跡等は大名格の遺跡であり、そこから出土したかわらけは、割合のみでなく、数量のうえでも白石遺跡をはるかに超えている。このことから白石遺跡の居住者は烏山城跡などと比較すると格下であったといえる。

茨城でも真壁城跡では、全出土品の8、9割がかわらけであるという(宇留野2007)。この傾向は、真壁城跡が烏山城跡などと同格の遺跡といえる。このようなことは文献資料などからでもわかることであるが、文献がない城館のばあいには、出土遺物からその城館の性格などを解明することができる。

中国陶磁器や瀬戸・美濃製の椀・皿は、ある階層以上の日常の食膳具として使用された可能性がある。ただ、瀬戸・美濃製品は中国陶磁器の模倣品であり、補完品としての位置付けもある。そのように考えると両者の使用には一定の区分けがあったとも思われる。

木・漆器も確実に食器のなかに組込まれていた。『長楽寺永禄日記』(群馬県1978)には、「土器杯」「ヌリモノ杯」「当蓋」「天目」「小染付」などの食器が出てくる。最も格式の高いものは「土器杯」、つまり「かわらけ」である。「ヌリモノ杯」は、漆の杯である。当時の格上の人びとは「かわらけ」に中国陶磁器や漆器を状況に応じて使っていたことが、この『長楽寺永禄日記』から読み取れるのである(小野2001)。

木・漆器は、塗のない木地椀のような安価なものから装飾をあしらった高級漆器まであった。なかでも生漆のかわりに柿渋汁を使った渋下地椀のような廉価品が大量に生産されるようになり、漆器の椀・皿は、庶民にまで広く使われるようになったといわれている。

3. 食文化とやきもの

前章でとりあげた『長楽寺永禄日記』には、食事の記録も多くみられた。餅、粥、麦飯、小豆飯など米飯を主体とする記録が多い。これは、長楽寺の住持義哲の食事であることから、当時の支配層のものである。その調理は、炊く(煮る)、蒸す、焼くなど変化に富んでいる。

各地の遺跡で出土した穀類、豆類、種実などの分析が行われている。

八王子城跡では、225キログラムほどの炭化穀物類が出土し、その種類は大麦、小麦、粟などで、重量比率では大麦がおおよそ7割で、小麦が1割、米は0.2割と少ない。静岡県元島遺跡では米、粟、稗などの雑穀が確認されている。戦国時代末期の八王子城、戦国時代前半の港町である元島遺跡と性

格は異なるが、米は確認されるが、主体は大麦、小麦、稗・粟の雑穀類である点は共通する。さらにさかのぼる室町時代の草戸千軒町遺跡では、米、大麦、稗・粟・蕎麦など雑穀類が確認されている。このような分析結果をみると米や大麦、雑穀類が主食であったことが推測できる。ただし、耕地利用のちがいによって地域ごとに収穫される穀類にちがいがあるだろう。さらに村落や都市のように消費の場のちがい、階層のちがいによって実際の食事では、穀類の中身に変化があったのであろう。

鎌倉時代の飯は「強飯」が主体であったが、時代が下がるとともに炊き飯に移って行ったといわれている。そのようなことを考えると義哲の食事の調理も鉄鍋を中心としながら釜のような調理具も使用されたと推測できる。

庶民の食事は雑穀を主体とする汁ものが主体であったろう。そのような食事の調理には鉄鍋があれば十分であったろう。

おわりに

戦国時代のやきものを用途別にみてきたが、それをまとめると以下のようになる。

貯蔵用のやきものは、単に食材や食品を貯蔵するのみでなく、生産用具としての役割がとても重要であった。その象徴的機能が酒の醸造であった。さらに貯蔵用のやきものはコンテナとしての役割も重要であった。しかし、15世紀後半以降の結桶の発達の中なかで、甕や壺の役割は確実に変化していった。

中世前期では、常滑焼、渥美焼、珠洲焼などの壺類、古瀬戸瓶子、中国陶磁の瓶子などが酒器として重きをなしていた。中世後期では、骨董的な中国陶磁の瓶子や盤類、古瀬戸瓶子、さらには漆器瓶子などが酒器や座敷飾りとして重きをなした。これら骨董的なやきものを出土する遺跡は、格の高い支配層の遺跡であったといえる。

用途別の説明のところでも述べたように、貯蔵具の流通は、中世後期には常滑焼、備前焼、越前焼が、三大広域流通窯となるのである。

調理具のすり鉢をみると備前焼、越前焼は甕とともに同一の流通圏を形成していたのだが、東日本太平洋側では、瀬戸・美濃製のすり鉢が広域流通圏を形成した。瀬戸・美濃製のすり鉢は鉄釉を施しており、近世のすり鉢を先取りしたものといえる。

東日本の煮炊具は、古代末以来鉄製内耳鍋が基層をなしており、中世前期には土製の煮炊具はなかったのだが、中世後期になると南東北から北関東において土製内耳鍋が出現するのである。土製内耳鍋と同じころに、瀬戸・美濃製のすり鉢を模倣した在地産のすり鉢が、南東北から北関東に出現する。すり鉢のばあいは、補完的な意味合いが想定できるのだ。

しかし土製鍋のばあいは、すでに述べたように鉄製鍋の補完とするには問題が残り、釜的な湯沸しを基本として蒸す、ゆでるなどの機能があった。いずれにしても私は多用する点で土製鍋は贅沢品ではないかと考えた。また土製煮炊具にある種の儀礼に使用したものとする考えもある（宇野 1997）。

食膳具の中なかで、かわらけの出土割合が高い遺跡ほど格上の遺跡であることを指摘した。饗宴儀礼でのかわらけの機能も近世に入るとしだいに形骸化してゆき、そしていまは神社の儀礼の中なかなどに残っている。

中国陶磁、朝鮮陶磁、瀬戸・美濃製のやきものは、茶器として使用されたものも多い。これも戦国城館のやきものの重要な要素のひとつであった。

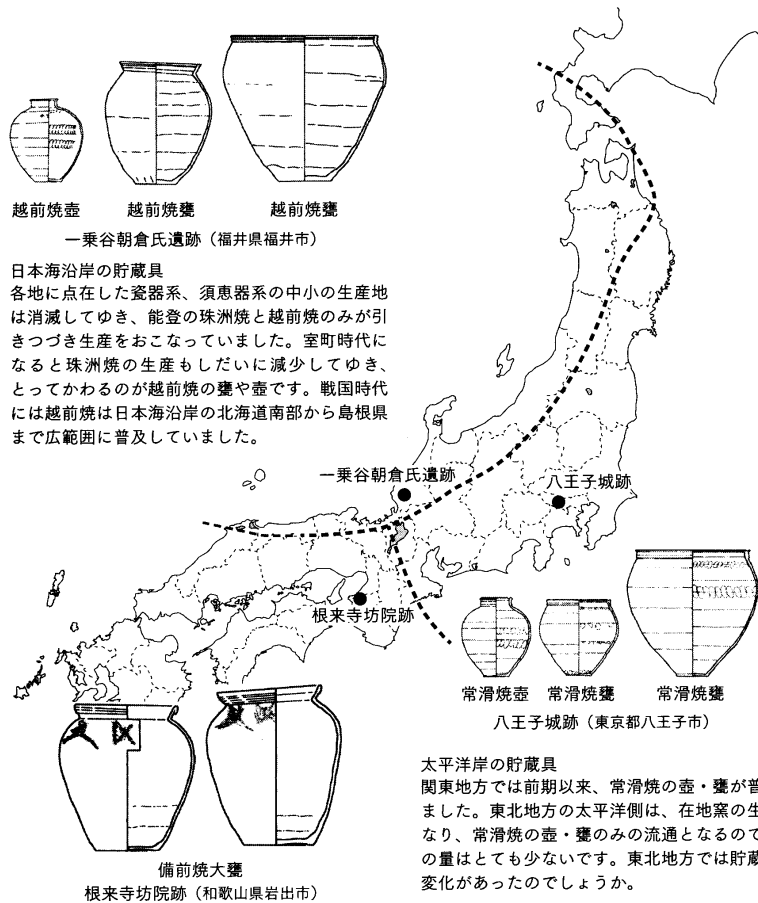
主要引用・参考文献

- ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2』 2007年
- ・浅野晴樹『中世考古やきものガイドブック』新泉社 2020年
- ・宇野隆夫「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告71』 1997年
- ・宇留野主悦「戦国期における真壁城と周辺の景観」茨城県立歴史館『中世東国の内海世界』 2007年
- ・小野晃嗣『日本産業発達史の研究』 1941年
- ・小野正敏「金山城出土の陶磁器と「長楽寺永禄日記」」太田市教育委員会『史跡金山城跡環境整備報告書 整備編』 2001年
- ・樫村宣行「白石遺跡」『茨城県教育財団調査報告第82集』 1993年
- ・群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編5 中世1』 1978年
- ・鋤柄俊夫「土製煮炊具にみる中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告71』 1997年

表1 北関東の主要城館とその出土陶磁器

遺跡名	烏山城 (西城)		唐沢山城 (隼人屋敷)		金山城 (日ノ池)		白石遺跡	
	破片数	割合	破片数	割合	破片数	割合	破片数	割合
面積 (㎡)	250		962		1,200			
かわらけ	563	82.9	9,053	96.4	3,205	81.0	382	12.0
瓦質鉢					73			
瓦質鍋・土師質鍋			158	1.7	370	12.2	2,558	80.4
瓦質その他					38			
瀬戸美濃椀類	9		3		31		23	
瀬戸美濃皿類	8		23		28		16	
瀬戸美濃播鉢	9		10		9			
瀬戸美濃盤類	0	4.1	0	0.4	1	1.9	29	2.9
瀬戸美濃壺・瓶類	1		1		3		20	
瀬戸美濃その他	1		4		4		4	
瀬戸美濃不明								
常滑壺・甕類	9		48		125		102	
常滑鉢類		1.3	0	0.5	1	3.2	3	3.3
常滑その他					1		1	
青磁碗類			3		2		2	
青磁皿類	1		1		4		4	
青磁盤類	1				2		2	
青磁壺・瓶類	1							
青磁その他	1				2		2	
白磁碗類	3							
白磁皿類	1	11.6	7	0.9	13	1.6		1.3
白磁杯			1					
白磁他			1					
染付碗類	9		11		11			
染付皿類	62		42		25		6	
染付その他			4		3			
染付不明			1		1			
その他			16		1			
1㎡あたりの出土量 (貿易陶磁)	0.316		0.099		0.064			
計	679	99.9	9,387	99.9	3,953	99.9	3,180	99.9

※白石遺跡の貿易陶磁は、全部を分類できなかった。ただ、貿易陶磁の総数は26点。



越前焼壺 越前焼甕 越前焼甕
一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市）

日本海沿岸の貯蔵具
各地に点在した瓷器系、須恵器系の中小の生産地は消滅してゆき、能登の珠洲焼と越前焼のみが引きつづき生産をおこなっていました。室町時代になると珠洲焼の生産もしだいに減少してゆき、とってかわるのが越前焼の甕や壺です。戦国時代には越前焼は日本海沿岸の北海道南部から島根県まで広範囲に普及していました。

太平洋岸の貯蔵具
関東地方では前期以来、常滑焼の壺・甕が普及していました。東北地方の太平洋側は、在地窯の生産もなくなり、常滑焼の壺・甕のみの流通となるのですが、その量はとても少ないです。東北地方では貯蔵具に何か変化があったのでしょうか。

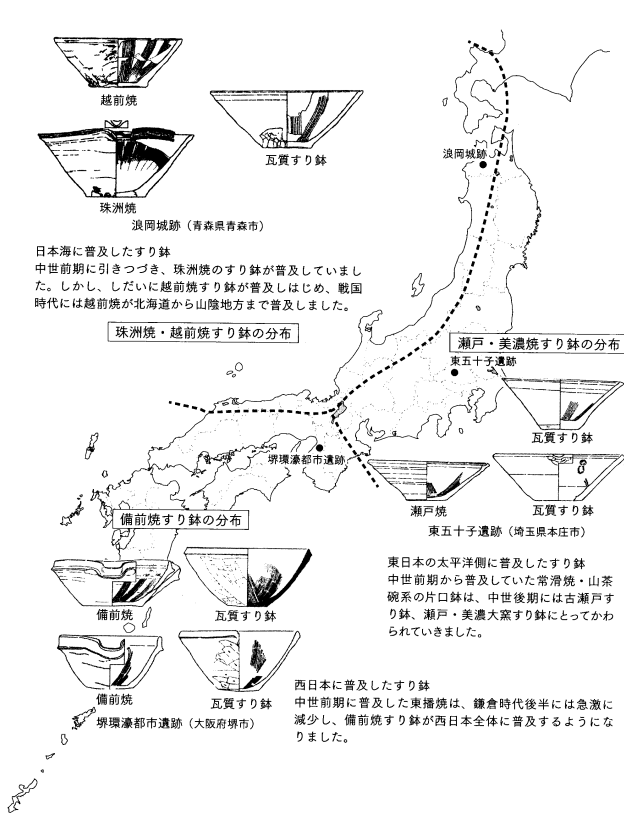
西日本の貯蔵具
室町時代以降、備前焼の壺・甕の普及が増大してゆきます。戦国時代になると各地の城館、堺や博多などの都市遺跡、根来寺のような宗教都市などに大形の備前焼の甕が供給されるようになります。備前焼の甕は藍染、油生産などの手工業生産の道具として多用されたようです。

第1図 中世後期の貯蔵具



当時の上級武士の居館と思われる今小路西遺跡から出土したさまざまな酒器と考えられるやきものです。中国陶磁器、古瀬戸の瓶子、常滑焼の壺などがあります。なかでも今小路西遺跡の北側の屋敷からは高級な中国陶磁器の酒海壺や青白磁梅瓶がたくさん出土しました。階層のちがいにより使用する酒器にも変化がみられます。

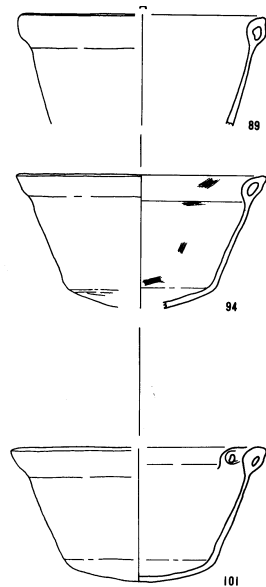
第2図 都市鎌倉で使われた酒器



第3図 中世後期のすり鉢



第4図 中世後期の土鍋



第5図 白石遺跡の土製内耳鍋

県央地区の中世城館—中小領主と佐竹氏—

水戸市教育委員会
関口 慶久

はじめに

本発表は、「茨城県中世城館跡総合調査」(以下「総合調査」という。)によって得られた成果のうち、県央地区(城里町・笠間市・水戸市・茨城町・大洗町)の2市3町の城館について概観するものである。

県央地区における総合調査の結果、城里町26城(城館20/関連遺跡3/伝承地1/所在不明2 以下同じ。)、笠間市50城(33/6/3/8)、水戸市61城(49/4/0/8)、茨城町47城(33/6/8/0)、大洗町9城(7/2/0/0)の計193城(142/21/12/18)を確認・抽出できた。

これらの城館の多くは、現存している堀や土塁等を総合的に勘察して城館と比定したものであるが、実はそれが近世以降の遺構(例えば屋敷囲、村境や根切り溝)の可能性もあり、中世城館と確定するには発掘調査による検証が必要であることは留意が必要である。

一方で、総合調査によって抽出された城館の多くが中世城館で占められていることは『茨城県の中世城館』(以下「報告書」という。茨城県教育委員会2023)に図示された縄張図をみればほぼ疑いなく、確認された193城は、県央地区の中世、とりわけ縄張の最終段階である戦国期の様相を概観するうえで格好の資料と捉えて良いだろう。すなわち総合調査の成果は、大局的な分析に非常に相性が良いのである。

以上のことから、本発表では分布論をテーマに据えることとする。総合調査によって抽出された城館を地図上にプロットし、その城館の「想定される領主」をマーキングした(図1)。無論、城館は領主の交代や変動が常にあることから、ここでは16世紀後半(佐竹氏が領国統一に乗り出す天正18(1590)年以前)を概ねの定点とした。なお筆者は193城全てを踏査しておらず、また「想定される領主」についても、個別の城館について検証する力量を持ち合わせてはいない。よって、今回の作業はあくまでも報告書に掲載された縄張図と記載を根拠にしていることから、相応の精度に止まることを付記しておきたい。なお報告書における県央地区の本文執筆は水戸市を筆者及び五十嵐雄大が、大洗町を筆者が、笠間市・城里町を額賀大輔が、茨城町を五十嵐がとりまとめた(茨城町小鶴館跡のみ田村雅樹)。

1. 佐竹領の城館

県央地区の佐竹領は城里町内の城館が主である。那珂川とその支流である藤井川・前沢川流域の城館群を中心とする。大山城・石塚城(城里町)、小場城(常陸大宮市)、戸村城(那珂市)はそれぞれ佐竹氏一族である大山氏・石塚氏・小場氏・戸村氏の本拠であり、佐竹領の南西部を形成した。南部の那珂西城・龍崖城(城里町)、御局屋敷・安川城・白石館(水戸市)は江戸領に対峙する佐竹側の境目の城である。

なお図1では参考として日立市・常陸太田市・常陸大宮市南部の主要城館と東海村・那珂市・ひたちなか市の主要城館もプロットしている。佐竹領東側は小野崎・江戸領④があり、その多くは佐竹の

乱に乗じた、1500年前後の小野崎・江戸氏の佐竹領の大規模な所領侵犯によるものと考えられる。

2. 江戸領の城館

16世紀前半、水戸市、大洗町、茨城町のほぼ全域は江戸領に属していた。江戸領はさらにひたちなか市全域、那珂市・笠間市の一部にまで及び、県央地区の大部分を占めている。

筆者は江戸領をその性格に応じて6区域に整理している(関口 2023)。以下にその概要を再掲する。

江戸領①：江戸領東部域。江戸領の中心である。北は那珂川、南は涸沼川・涸沼・渋井川、東は那珂川と涸沼川の合流地点(水戸市川又)、西は中妻三十三郷である。江戸氏の本拠である水戸城(水戸市)を中心に、枝川城(ひたちなか市)、武熊城・吉田城・大鋸町遺跡・見川城(水戸市)等が水戸城の支城として周囲に配される。江戸氏の中核となる城郭群である。

さらに北方には長者山城、南方には伊豆屋敷・平戸館・森戸館・平須館(水戸市)があった。長者山城は重臣の春秋駿河守が配され、那珂川対岸の佐竹領に備える境目の城としての役割があったと考えられる。南方の諸館には立原氏・平戸・谷田部氏などの有力家臣団が配された。那珂川・涸沼川水系の要衝を支配していたものと思われる。

江戸領②：江戸領西部域。江戸氏の勢力基盤となった地域で、俗に「中妻三十三郷」と呼ばれる。

中妻三十三郷は、江戸通景が水戸地方に進出した14世紀末～15世紀初頭から江戸氏の支配域となったとされる。江戸氏は中妻三十三郷を押さえていたことにより、常陸有数の在地領主になり得たと言っても過言ではない。

江戸領③：江戸郷周辺域。江戸郷(那珂市下江戸)は江戸姓を名乗る由来となった本貫地である。貞和6(1350)年に江戸氏の祖・通泰がここを領し、江戸城(那珂市)を本拠としたという。半世紀後の14世紀末に通景が河和田城に本拠を移した。

江戸領④：江戸領北部域。那珂台地の南半分に該当する。本領域はさらに南部と北部に細分が可能である。南部は①の領域の北側、那珂川北岸で、北部は新川南岸の河口(東海村)から菅谷(那珂市)にかけてである。

南部は天神山館、勝倉城、尼ヶ柵館、館山館(ひたちなか市)など江戸氏関連の城館が点在しており、北方の佐竹氏に備える防衛線という性格が付加されていたと考えられる。そうした意味では江戸領①の一部という見方もできよう。

一方の北部はいわゆる境目域であり、佐竹・小野崎・江戸氏関連城館が混在している。江戸氏関連の城館としては多良崎城(ひたちなか市)、平野館・掛札館(那珂市)等が挙げられる。当初本領域は佐竹領であったが、次第に江戸氏によって切り取られていった。

当地域の城館は江戸氏の被官伝承が多く、1500年前後に江戸氏が佐竹の乱に乗じて押領・知行した地域と考えるのが自然である。しかしその支配力は強いとはいえない不安定なものであった。泉田邦彦は天正年間の菅谷村(那珂市)の史料を分析し、「当該地域は江戸領にありながらも、居住者(筆者註：菅谷村の土豪)の所属までもが江戸氏の被官に限定されていたわけではなかったようである。もちろん菅谷村に対しては江戸氏が年貢を賦課し、谷田部越後守を政所に任じていたわけだが、居住者の仕官先は個々の判断であり、両属もありえただろう」としている(泉田 2019)。こうした緩やかな(不安定な)主従関係による在地支配のあり方が、境目地域の特色といえよう。

江戸領⑤：江戸領南部域A。江戸領南部域はA Bに二分し、北側をA、南側をBとする。涸沼川・涸沼より南側の地域に該当する。A Bの境界は現時点では明確にしえなかったため、直線としている。

本領域は『江戸軍記』に記された15世紀後半の江戸氏の南下政策の舞台となった、小幡氏の小幡城

のほか、重臣谷田部氏の居城である谷田部城、小幡氏とともに南下政策によって江戸氏麾下となった海老沢氏居城の天古崎城、鳥羽田氏居城の鳥羽田城などが点在する（いずれも茨城町）。小幡・海老沢氏は江戸氏に帰属した後も離反するなど、必ずしも本領域は安定的支配が行われたわけではないが、とはいえ涸沼という水運の要衝を手中にした意義は大きく、且つ南下政策の拠点でもあり、江戸氏の領国支配にとって重要な役割を果たした領域として評価できる。

なお涸沼南東に南北に流れる大谷川の東方、現在の大洗町に所在する中小の城館群については、伝承が残らず不明な点が多い。しかし天正5(1577)年、江戸重通が大洗磯前神社に小幡知貞・海老沢弾正を呼び出し謀叛の疑いで殺害するなどの舞台にもなっており、当該地域が江戸領であったことは間違いない。これまであまり注目されていない領域ではあるが、水運という観点のみならず、行方・鹿島郡への進出という観点からも重要な地域であり、今後注視し評価をしていく必要がある。

江戸領⑥：江戸領南部域B。本領域は設定が最も難しく、東西南北ともに根拠が少ない。そもそも線による領域設定が適切でない地域と言っても差し支えない。それでも江戸領の把握のうえでは重要な地域であり、理解を容易にするという目的で領域を線で引くことを試みた。

さて本領域は江戸通雅による文明18(1486)年の畑田・徳宿合戦と、16世紀後半の府中合戦をはじめとする重通の南進政策の舞台となった地域である。果たしてこの地域のどこまでを江戸領とできたかどうかは疑わしい。これについては今後の課題としたいが、いずれにせよ江戸氏はこの地域の支配を目論み、室町・戦国期を通じて度重なる南下政策を行った最前線であったことは疑いない。

3. 笠間領の城館

13世紀初頭、宇都宮頼綱は甥の笠間時朝を立てて笠間に侵攻、麓城（笠間市）を本拠とし常陸に所領を得た。以後笠間氏は笠間十二郷を領したとされる。現在北は徳倉地区（現城里町）、西は鷄足山塊、東は中妻三十三郷（江戸領②）、南は吾国山の範囲に収まる。

のちに笠間氏の居城となった笠間城を中心に、北は戸倉館、南は本戸城・福原城に笠間氏一族が城主として配された。寺崎館は笠間氏家臣の館に比定される。

笠間氏は宇都宮氏の一族として主家の要請に応じて出陣を繰り返した。天正4(1576)～13(1585)年、笠間幹綱は同じく宇都宮氏に從属する益子重綱との間で争いが生じる中で、結城氏・佐竹氏との関係も不和となり孤立していく。そして天正18年、小田原参陣の命に反したことで主家の宇都宮国綱によって幽閉、笠間氏は滅亡したとされる。

4. 宍戸領の城館

宍戸氏は八田知家4男の家政を初代とし、鎌倉御家人として次第に頭角を現した。宝治合戦（1247年）によって小田氏が失脚したのちは一時的にはあるが常陸守護職を務めるまでになる。

宍戸氏は小鶴荘（茨城町）を本貫地としていたが、15世紀後半には江戸氏の南下政策によって小鶴荘域は江戸領に組み込まれる。16世紀代の宍戸領は不明な点も多いが、北は笠間領、東は江戸領、西は難台山麓、真家～巴川を領域として設定した。

戦国期の宍戸氏は小田氏に与しつつ江戸氏とも婚姻関係を結ぶなど領国の維持に腐心し、やがて佐竹氏家臣となって小田原参陣を果たした。命脈を保った宍戸氏は文禄3(1598)年に佐竹氏の知行割に伴い宍戸領を没収され海老ヶ島（筑西市）に移封となった。

おわりに

県央地区は江戸領を中心とし、北に戦国大名の佐竹領が、西に笠間・宍戸領が存する。江戸・笠間・宍戸氏ら中小領主は、それぞれ佐竹氏や宇都宮氏に従属し、領国の維持拡大を図っていったことは周知のことであったが、彼らの領国や、その経営に欠かせない城館の分布は曖昧としていて、これまで明確なイメージを持てていなかったと認識している。

こうした中、今回少なからぬ城館のプロットをもととした領域設定を試み図示できたことは、総合調査の成果の一つにとらえて良いと考えられる。今後は分布図を叩き台としてより精度の高いレベルに引き上げる作業が必要であるとともに、県央地区はもとより他地区においても同様の図示を行うことで、茨城の中世城館と武士団の様相がより具体的なイメージを持って語られることを期待したい。

【引用・参考文献】

- ・ 泉田邦彦 2019 「戦国規常陸江戸氏の領域支配とその構造」『常陸中世史研究』第7号 茨城大学中世史研究会
- ・ 茨城県教育委員会『茨城県の中世城館 茨城県中世城館跡総合調査報告書』2023年
- ・ 関口慶久「常陸江戸氏の城館」『第39回全国城郭研究者セミナー』同セミナー実行委委員会・中世城郭研究会 2023年

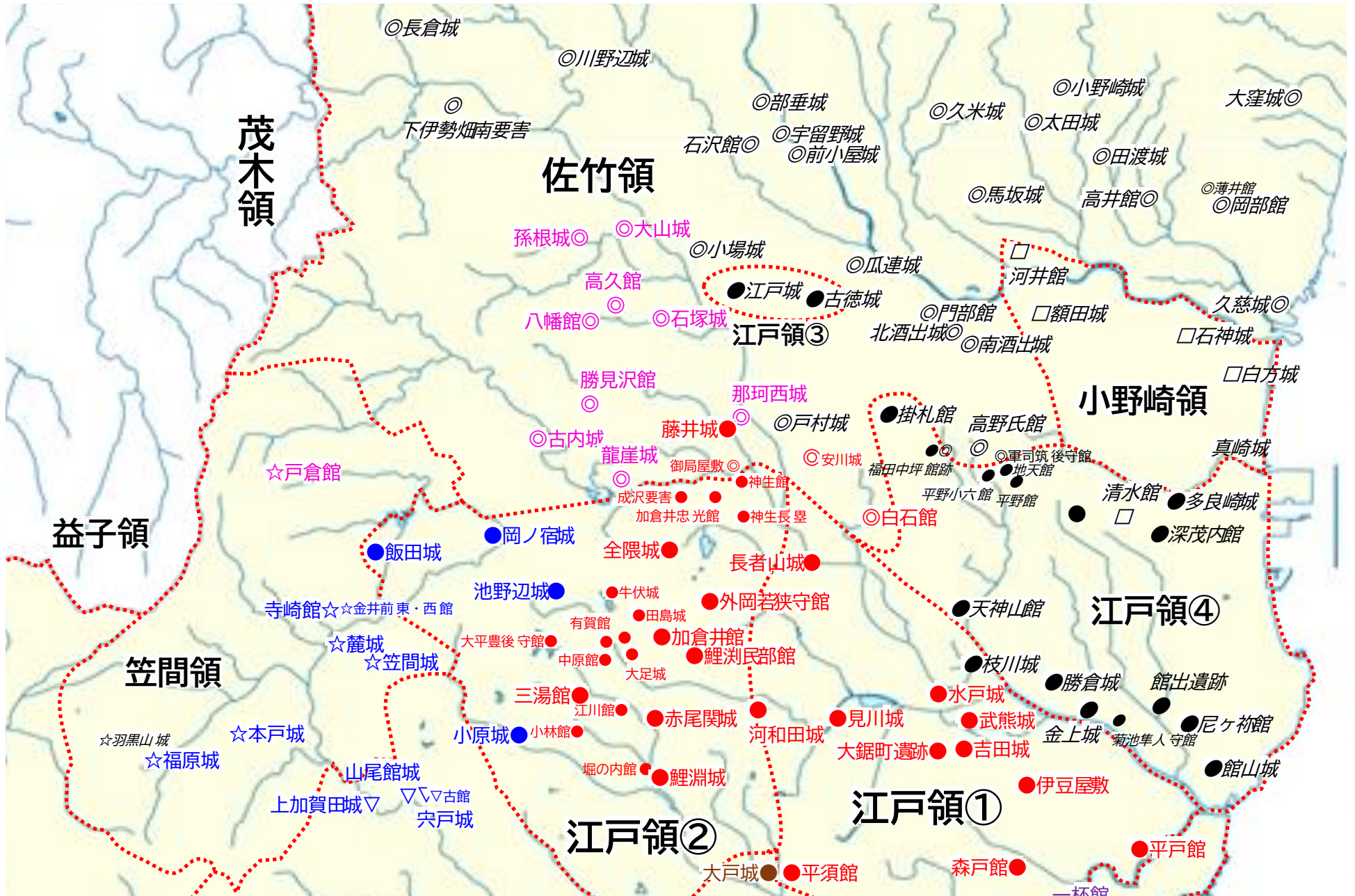




図1 県央地区の主要城館（茨城県教育委員会 2023 を元に作図）

凡例

◎：佐竹氏関連城館 ●：江戸氏関連城館 ☆：笠間氏関連城館 ▽：宍戸氏関連城館

□：小野崎氏関連城館 ○：小田氏関連城館 △：大掾氏、鹿島・行方郡諸氏関連城館

斜体：県央地区（城里町・笠間市・水戸市・茨城町・大洗町）以外の城館

戦国期江戸氏の拠点城館とその役割

—水戸城・小幡城を事例に—

水戸市立博物館
藤井 達也

0. はじめに

○戦国領主としての江戸氏

- ・江戸氏は藤原秀郷流の那珂氏の系譜を引く武士で、1430年前後に水戸を本拠とし、天正18年(1590)に佐竹氏によって滅ぼされるまでの間、約160年間も水戸の地を本拠とした。
- ・江戸氏は水戸を中心に、那珂川流域や中妻三十三郷、涸沼沿岸及びその南部など、広大な地域を含み込む「領」を形成し、独自の領域支配を行っていた。

○江戸氏の拠点城館

- ・拠点城館：戦国領主の領域支配の中で政治的・経済的拠点として機能した城館
本拠城／支城
→拠点城館は戦国領主と地域社会との接点と成りうる場で、領域支配の拠点としても重要であったと考えられる。
- ・江戸氏の場合、水戸城を本拠城とするとともに、領内に支城として機能したと考えられる河和田城、小幡城、片倉城、鯉淵城、長者山城、枝川城などが確認される。

○本日のお話し

水戸に拠点を置いた戦国領主江戸氏を対象に、その領域支配の場となった拠点城館に注目し、その機能を具体的に追及する。

1. 拠点城館を取り巻く交通路との関係に注目し、その特徴を明らかにする。
2. 江戸氏がどのように拠点城館を管理したのかを明らかにする。

1. 江戸氏の拠点城館と交通路

(1) 江戸氏の本拠城・水戸城

○水戸城の概要

- ・応永末年(1430年前後)頃、江戸氏は水戸の地に進出。
→水戸の台地上の支谷を埋めて平坦地を作るなどの工事を施し、水戸城を整備 [関口 2019]
- ・明応5年(1497)、水戸城下に大坂宿を立て、水戸の都市化を図る。
→16世紀にかけて、次第に都市としての形を表すようになっていく。

○水戸城を取り巻く交通路 [藤井 2022]

- ・水戸は、常陸国を縦断する幹線道(鎌倉街道下道、江戸時代の水戸街道の前身にあたる道)の那珂

川渡河点に位置し、常陸国における水陸交通の要衝となっている（「水戸」＝「水渡」）。

→水戸城内を鎌倉街道下道が通過しているとともに、那珂川渡河点を監視できる位置に水戸城が立地する。

⇒街道と渡し場を取り込む形で城域を設定し、流通・交通の拠点として整備しようとする江戸氏の意図が感じられる配置。

・北は青柳・枝川から太田へ、西は大部（飯富）方面、南西は河和田・鯉渕から宍戸へ、南は見川から小幡、府中へ、東は涸沼周辺や太平洋沿岸へと水戸から各所につながる陸路が存在し、それらの陸路が水戸で合流していた。

⇒交通・流通の拠点として本拠城・水戸城が機能していた。

（2）江戸氏の支城・河和田城

○河和田城の概要

・嘉慶2年（1388）の難台山城合戦（現笠間市上郷）の恩賞として、江戸通実が河和田の地を与えられ、江戸氏が河和田に進出。

・15世紀後半段階では、江戸氏家臣の春秋氏が城主であったと考えられる。

○河和田城の立地

・水戸と宍戸を結ぶ街道沿いに位置し、街道を城域に含み込むような形をとっている。

→城内に街道管理の関所が置かれた可能性が指摘されている。[株式会社地域文化財研究所 2016]

・河和田城西部に西宿という地名が見られるとともに、その周辺や北の桜川を挟んだ地域にも中世村落があったことが、発掘調査から確認されている。

・河和田城西側を古道が通っており（「川和田故城往古之図」）、西部には「塩の道」の伝承も残る。

→河和田城は各方面からの街道が集まる交通の要衝であり、そこに宿や村落が形成されるとともに、城域に道を含み込んでいた。

（3）江戸氏の支城・小幡城

○小幡城の概要

・もともとは小幡氏の居城であったと考えられるが、天文元年（1532）頃に江戸氏が確保し、拠点城館として使用するようになる。

→それ以降、たびたび史料に名前を見せていることから、恒常的に管理された城であったと考えられる。

○小幡城と交通路

・水戸を通る鎌倉街道下道が小幡方面へ向かって伸びていた。

→小幡は交通の拠点として意識される地であった。

・東は涸沼方面からの道、北は水戸方面からの道（途中宍戸方面に分岐）、西南方面は府中へとつながる道が集まる交通の要衝。

・小幡城東部に「古宿」の地名が残り、そこが城下集落であったと考えられる。

→近隣に宿を伴うとともに、幹線道が近隣を通っていた。

○小幡城を通じた交通管理

・16世紀中頃、江戸氏の「役所」を避けて、山崎を通そうとした宍戸行き塩荷を江戸氏方が押さえた所、宍戸氏家臣の中田清衛門がそれを阻止しようと50名ほどの人数を率いて押し寄せる事件が発生。**【史料6】**

→本史料は、小幡城在番を差配した平戸氏（後述）が出したものであり、小幡城の東側には山崎の地名が存在。

→小幡城周辺に置かれた「役所」を回避しようとして発生したトラブル。

⇒江戸氏の拠点城館には、交通・流通管理のための「役所」が存在。

【1章のまとめ】

・戦国領主江戸氏は、交通の要衝となる地に本拠城（水戸城）を置き、主要交通路（鎌倉街道下道）を城内に含み込む形でそこを整備した。

・江戸氏が拠点城館として維持した城も、交通の要衝に置かれることが多く、街道を城域に含み込む形をとっていた。 ※城内には交通・流通管理の「役所」を設けた。

2. 江戸氏の支城管理体制

（1）小幡城に見る江戸氏の支城管理

○小幡城在番

・「石川氏文書」に江戸氏家臣平戸氏の小幡城在番関係史料が8点含まれる。

※史料年代には幅があり、特定の時期の在番関係史料がまとまって残ったものではない。

・最古のものは「江戸忠通書状写」**【史料1】**

「當番被相調、以日記承候」

→平戸氏が在番衆の管理を行い、日記という形で江戸氏当主に報告。

「小幡口之人衆足軽少々参候、今日も申付候、定而可参候」

→小幡口の在番衆が水戸に集まり、江戸忠通の指示で派遣されている。

「片野・柿岡之様躰心得申候」

→平戸氏は在番衆の着到の報告とともに、小幡城周辺の情勢を報告している。

⇒江戸氏家臣平戸氏は、小幡城に入り、そこに派遣されてくる在番衆の管理を担うとともに、その実施状況や周辺地区の情勢を江戸氏に報告していた。

○江戸氏による在番管理

・在番衆の動員と江戸氏 **【史料2】**

「未進之者則申付候、定而可参候」

→「未進之者」（在番の軍役に応じない者）への対応は江戸氏側で行っていた。

→江戸氏が在番衆の集約・派遣を担い、平戸氏が小幡城でそれを管理し、「日記」で江戸氏に報告していた（江戸氏とその家臣との共同による在番管理）。

・在番管理者の位置付け

「為當番其地江御越簡要候」**【史料5】**

→拠点城館を管理する平戸氏も「當番」として小幡城に派遣されていた。

→江戸氏の中核的な家臣を交代で拠点城館に詰めさせて在番管理を担わせ、在番衆は江戸氏の

指示で派遣される体制。

(2) 江戸氏による在番衆の運用

○江戸氏の拠点城館管理体制

・天正 17 年（1589）の「江戸重通書状写」【史料 7】

天正 16 年 12 月に江戸氏一族の神生氏による対佐竹氏・江戸氏の反乱が発生し、それが江戸氏と額田氏との抗争につながる。

神生氏には鯉渕城の鯉渕氏が与同し、江戸領西側の河和田城周辺も不安定化。

「其口之人数、足軽・鉄放・歩弓・歩鎗、人別足軽・鍬取・鎌持・まさ切、それ／＼ニ一兩人つゝ被定奉行、無油断催促可然候」

→「其口」（小幡城）には在番衆として足軽、鉄砲隊、歩兵、鍬・鎌・まさ切所持の武装した百姓のような人々が詰めており、それぞれの隊ごとに奉行をつけることで派遣する軍勢として運用ができた。

「其口々人数、鉄放、自今晚之ニ番河和田へ可被相越候、初番ニ天神林京兆催促申候上野・長岡・大戸口々人数、只今有催促、可被相越候」

→「其口々」（小幡城とその周辺の別の拠点城館）の軍勢を河和田城に派遣することを命ずるとともに、江戸氏家臣天神林京兆が動員した軍勢と交代で河和田城の番をすることになった。

→拠点城館に詰める番衆を管理する江戸氏家臣が複数名おり、それぞれが番衆を管理していた。また、必要に応じて番衆を別の拠点城館に派遣して運用することも行われていた。

【2章のまとめ】

・江戸領では、拠点城館に番衆を派遣し、そこに番衆管理の役割を担う平戸氏のような中核家臣を置き、恒常的に城館を維持していた。

・江戸氏領内の拠点城館の番衆は、衆ごとの編成が行われており、奉行をつけることで、他地域や他の拠点城館への運用が可能な状態であった。

3. おわりに

○戦国領主江戸氏の拠点城館

・江戸領内の拠点城館は、主要交通路沿いに設けられることが多く、交通路を城域に含み込んでいた。→拠点城館は軍事的な役割を担うのみならず、領内の交通・流通管理の場として機能していた。

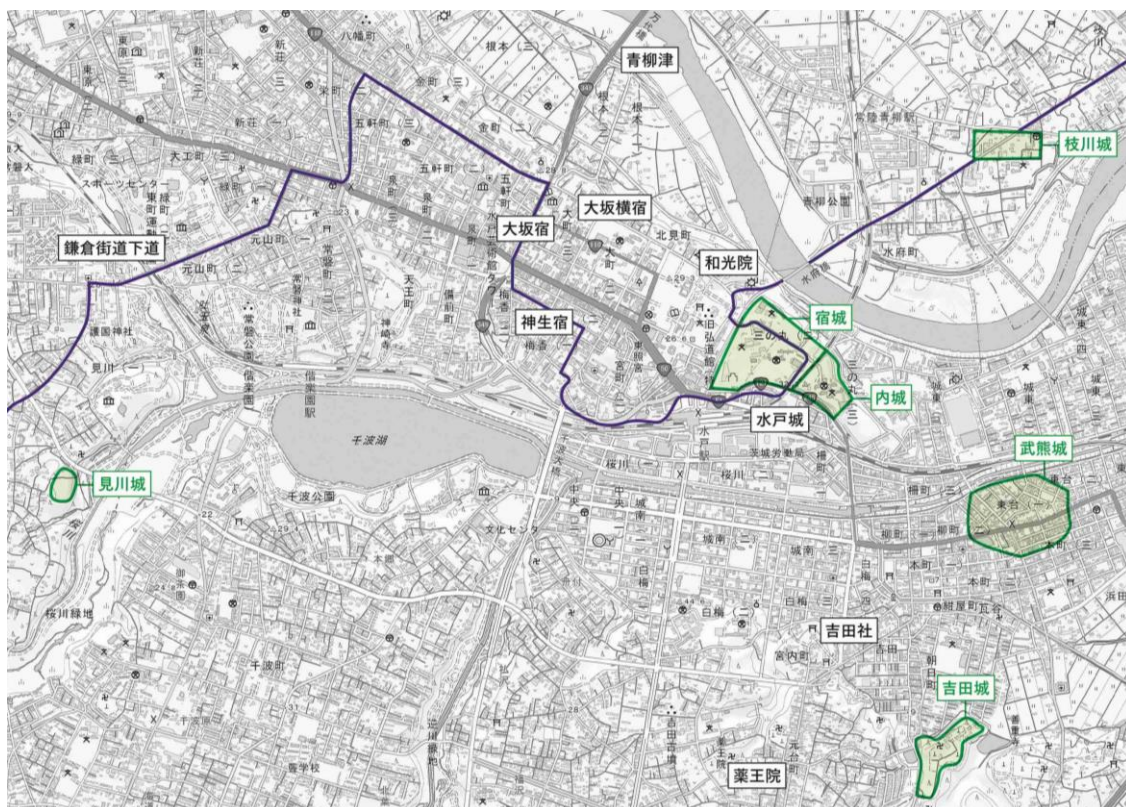
・拠点城館には、江戸氏が動員した在番衆（村々に拠点を置く武士や武装した百姓）が詰めており、平戸氏など特定の江戸氏家臣が在番衆の差配を行っていた。

→江戸氏の拠点城館は、在番衆を入れて恒常的に維持される場であり、戦時にはそのまま部隊として運用することができた

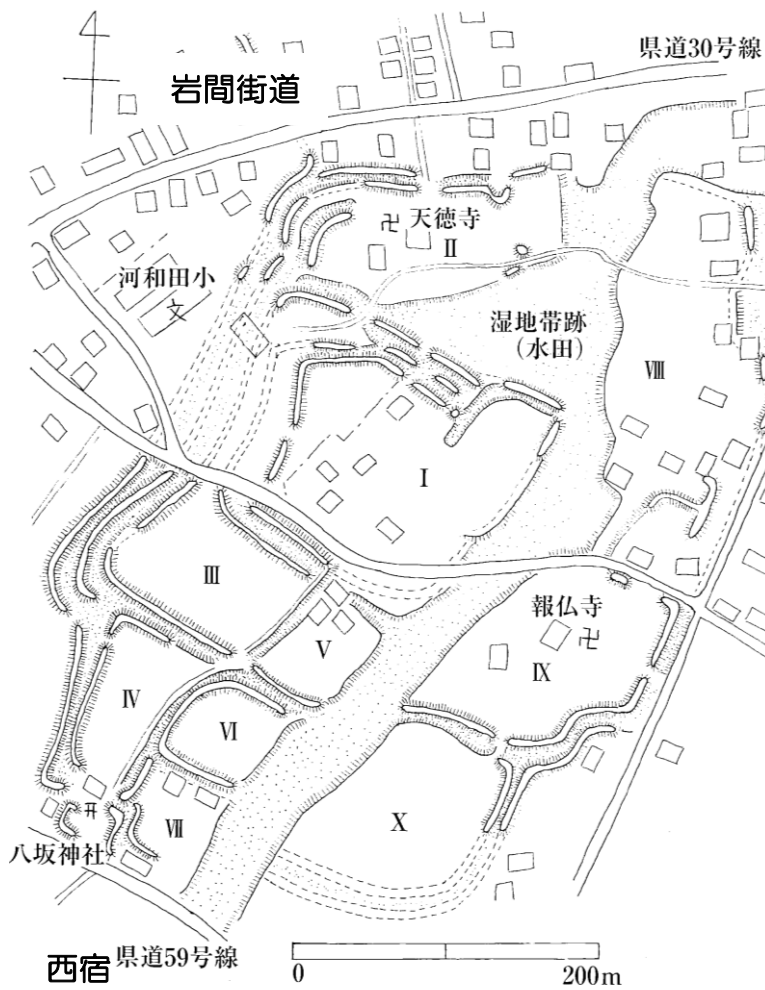
主要参考文献

- ・泉田邦彦「戦国期常陸江戸氏の領域支配とその構造」（『常総中世史研究』第7号、2019年）
- ・茨城県教育委員会『茨城県の中世城館—茨城県中世城館跡総合調査報告書—』（2023年）
- ・茨城城郭研究会『図説茨城の城郭』（国書刊行会、2006年）
- ・茨城城郭研究会『続図説茨城の城郭』（国書刊行会、2017年）

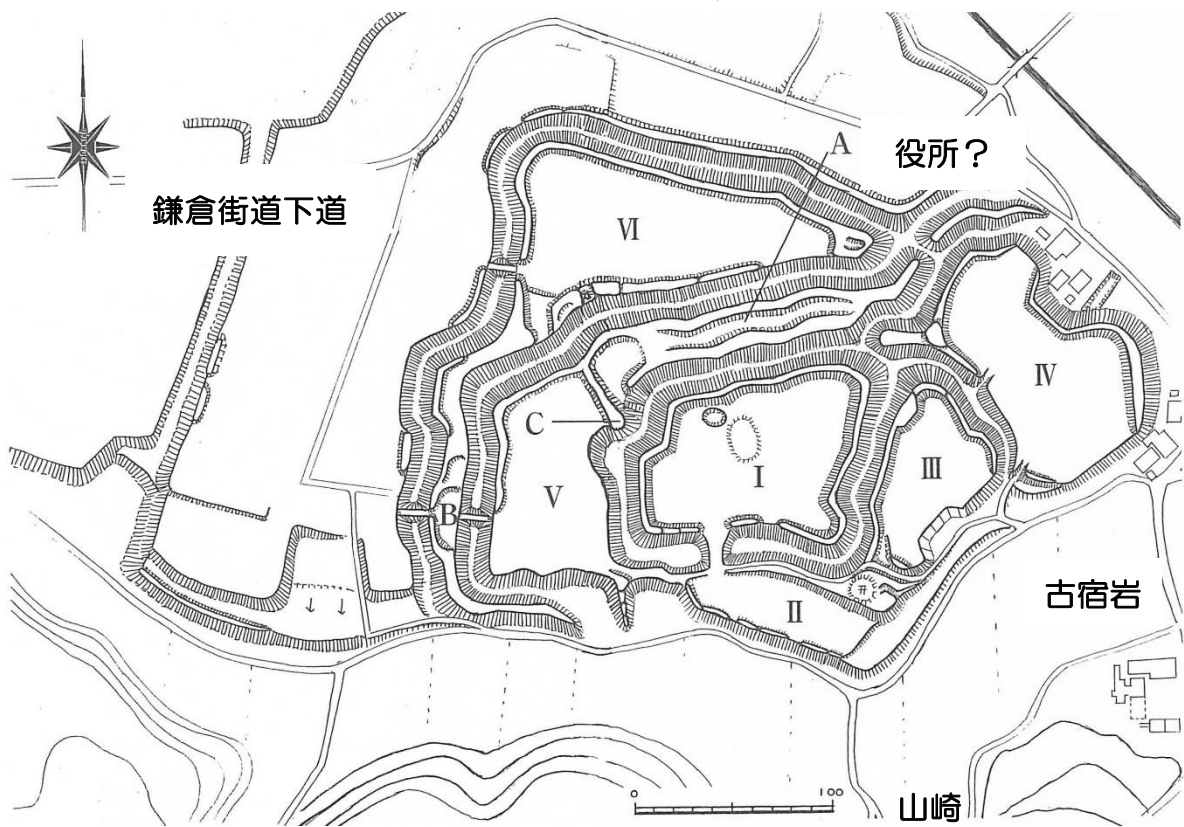
- ・江田郁夫「戦国大名字都宮氏の支城管理体制」（株式会社地域文化財研究所『河和田城跡（第26・28地点） 共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会、2016年）
- ・久保健一郎「支城制と領国支配体制」（『中近世移行期の公儀と武家権力』同成社、2017年（初出2004年））
- ・茨城県教育財団『小幡城跡 前新堀遺跡 前新堀B遺跡 諏訪山塚群 藤山塚 東関東自動車道水戸線（茨城南IC～茨城JCT）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（2009年）
- ・齋藤慎一「後北条領国の境目と「番」（『中世東国の領域と城館』吉川弘文館、2002年）
- ・佐脇敬一郎「後北条氏における城郭運用体制の発達」（『国史学』第168号、1999年）
- ・関口慶久「中世の水戸城と城下町」（『常総中世史研究』第7号、2019年）
- ・馬部隆弘「城郭支配構造からみた戦国期毛利氏の権力構造」（村井良介編『論集戦国大名と国衆 17 安芸毛利氏』岩田書院、2015年、初出2002年）
- ・馬部隆弘「大名領国における公的城郭の形成と展開―「城督」を手がかりに―」（齋藤慎一編『城館と中世史料―機能論の探求―』高志書院、2015年）
- ・藤井達也「中世都市・水戸の成立―那珂川水系との関わりから―」（地方史研究協議会編『海洋・内海・河川の地域史―茨城の史的空間―』雄山閣、2022年）
- ・藤木久志「第八章 江戸氏の水戸地方支配」「第十一章 佐竹氏の領国統一」（水戸市史編さん委員会編『水戸市史』上巻、1963年）
- ・水戸市教育委員会編『水戸城跡発掘調査報告1 二の丸曲輪彰考館の調査（1）上巻・下巻』（水戸市教育委員会、2014年）
- ・水戸市立博物館編『特別展 江戸氏 ―知られざる水戸の戦国時代―』（2024年）
- ・村井良介「戦国期の地域秩序と城館」（『ヒストリア』296号、2023年）



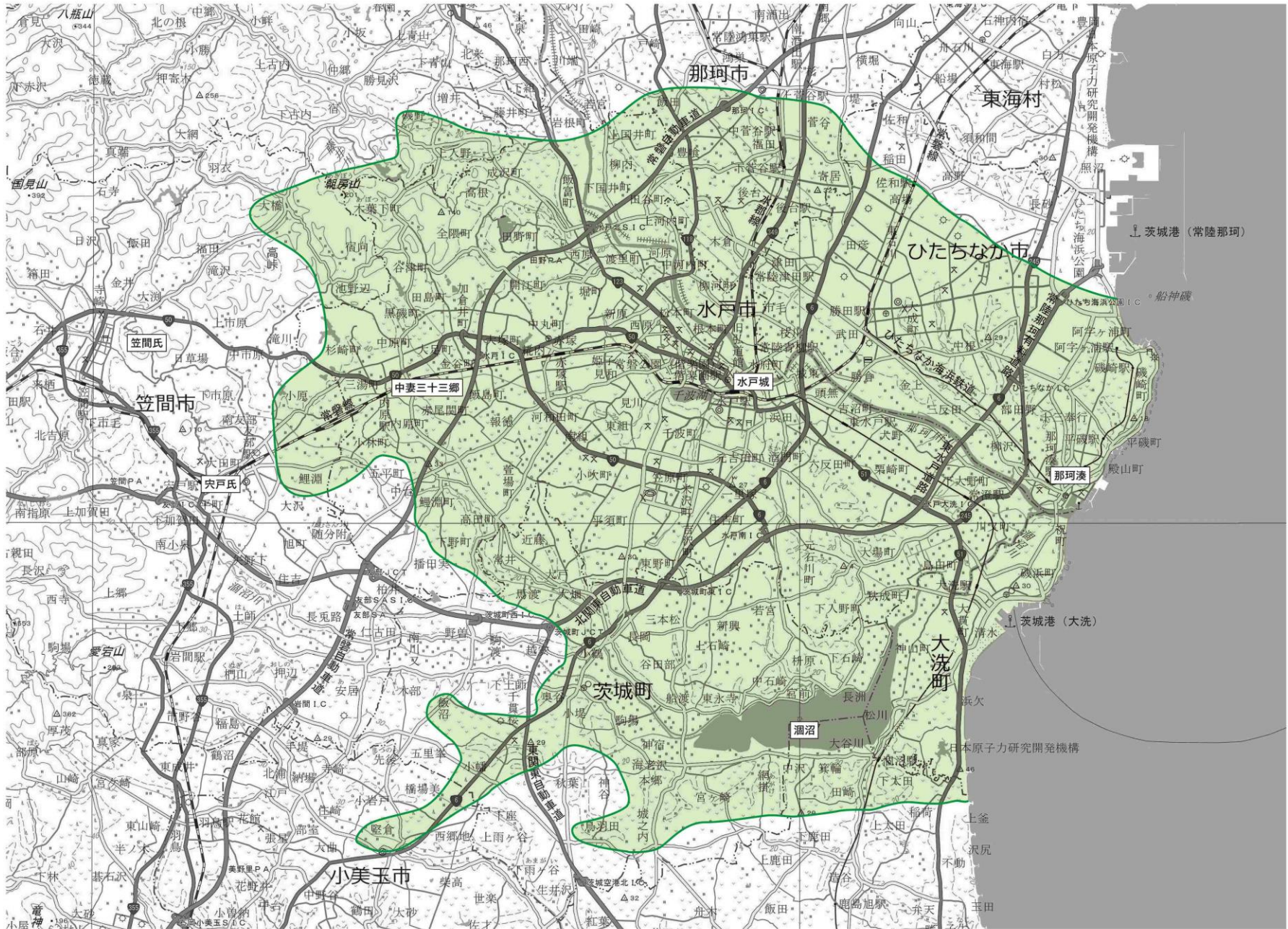
水戸城跡周辺図



河和田城縄張り図
 (作成：青木義一氏)
 ※一部報告者加筆



小幡城縄張り図 (作成：余湖浩一氏) ※一部報告者加筆



江戸領の範囲 国土地理院1/200000地図をもとに作成した江戸領の範囲は、おおよその目安となる部分を囲んだ

茨城城郭サミット

「戦国期江戸氏の拠点城館とその役割

―水戸城・小幡城を事例に―

史料編

六月十六日

平戸神五郎殿

忠通(江戸)
(花押影)

【史料三】江戸忠通書状写「石川氏文書」

七月十八日

【史料一】江戸忠通書状写「石川氏文書」(『茨城県史料』中世編口、

茨城県史編さん中世史部会、一九七四、以下出典は同じ)

(享祿四年(一五三一)頃) 十月七日

昨日十七一札今朝辰刻到着、仍而水谷伊勢守方、一昨十六松田之地江被打越、其地江動之支度必定之由、其間候歟、注進令得其意候、人衆・足輕申付候間、早々可指越候、又未進者于今不罷入候哉、案外二候、是又猶以申付候、西口之節重而注進尤候、万吉重々、恐々謹言、

但馬守

初秋十八日

平戸甚五郎殿

忠通(江戸)
(花押影)

當番被相調、以日記承候、令得其意候、小幡口之人衆・足輕少々参候、今日も申付候、定而可参候、又片野・柿岡之様躰心得申候、見来義候者、注進可然候、恐々謹言、

但馬守

拾月七日

平戸左馬助殿

忠通(江戸)
(花押影)

【史料四】江戸忠通書状写「石川氏文書」

一月十九日

當番被相調、以日記承候、令得其意候、未進之者則申付候、定而各可参候、其口無何事候哉、用心以下不可有油断候、万吉猶重々可承候、恐々謹言、

御報

【史料二】江戸忠通書状写「石川氏文書」

六月十六日

當番被相調、以日記承候、令得其意候、未進之者則申付候、定而可参候、用心以下不可有油断事專一候、恐々謹言、

但馬守

正月十九日

平戸甚五郎殿

忠通(江戸)
(花押影)

高須刑部少輔殿

【史料五】江戸忠通書状写「石川氏文書」

(弘治二年(一五五六)カ) 三月二十九日

為當番其地江御越簡要候、然者未進之者被相調、谷田部・篠原所江被相届候、無油断申付候、定而各可參候、彦四郎・又七郎可差越分候処、無據用所候而、彦四郎者令延引候、又七郎可罷越、小田動無見来義無之候哉、令得其意候、餘者急度之間令略候、恐々謹言、

但馬守

三月廿九日 忠通(江戶)(花押影)

平戸安芸守殿

御報

【史料六】江戸忠通書状写「石川氏文書」

三月二日

如來翰之、其口無何事静之由簡要候、仍而當地之役所をぬすミ、山崎を透候塩荷相押候処、完戸之家風中田清衛門と申者為始、五十人斗罷出相留候哉、案外之至候、如承急度山尾江相届一途可取刷候、委細重而可申届候間、不能具候、恐々謹言

但馬守

三月二日 忠通(江戶)(花押影)

平戸安芸守殿

御報

【史料七】江戸重通書状写「石川氏文書」

(天正十七年(一五八九)) 四月十八日

急度申届候、仍額田へ五三日中可及調儀候、再三如申届、其口之人數、足輕・鉄放・歩弓・歩鎗、人別足輕・鍬取・鎌持・まさ切、それ〱二一人つゝ被定奉行、無油断催促可然候、將亦中妻境目菟角之躰二候間、其口々人数・鉄放、自今晚之二番河和田へ可被相越候、初番二天神林京兆催促申候上野・長岡・大戸口々人数、只今有催促、可被相越候、恐々謹言、

四月十八日 重通(江戶)(花押影)

平戸弾正忠殿

嶋田中務少輔殿

【史料八】江戸重通書状写「石川氏文書」

八月二十二日

一兩日以前も如申届、先番之衆被相返、當番者從今日廿日可被相勤候、一人も於被返者、其方可為越度候、只今肝要之時分二候間、少も有油断者、可為案外候、此条番相手之衆へも可被相触候、恐々謹言、

八月廿二日 重通(江戶)(花押影)

平戸弾正忠殿

中世城郭としての笠間城—近年の調査成果から—

笠間市教育委員会教育部生涯学習課
額賀 大輔

はじめに

笠間城跡は笠間市の北部、笠間盆地を東側から見下ろす佐白山上に立地し、独立丘陵の西端部の複雑に入り込む侵食谷により形成される尾根を巧みに利用する山城である。近世城郭として知られる笠間城であるが、その周辺には城郭遺構が残されており、岡田武志氏と三島正之氏はそれらの縄張図を作成して紹介をしている〔岡田 2006〕〔三島 2008〕。近世の城絵図ではこの部分は城郭として描かれている形跡はないことから、これらの遺構は中世城郭の名残ではないかと考えられる。中世から存在した笠間城の証拠をこの部分に求めることは可能なのではないかと。

本報告では、中世城郭としての笠間城について、近年の調査成果をふまえて考えていきたい。

※笠間城跡保存調査事業について(平成 25 年度から)

- ・平成 25 年度：笠間城跡調査指導委員会設置
- ・平成 26 年度：天守曲輪石垣応急処置調査の実施
- ・平成 27 年度：航空測量と図化業務、天守曲輪石垣樹木伐採
- ・平成 28 年度：航空測量、石垣 3 次元測量
- ・平成 29 年度：航空測量図化業務、絵図撮影業務、本丸跡地中レーダー探査・確認調査
- ・平成 30 年度：航空測量図化業務
- ・令和元年度：航空測量図化業務、樹木剪定
- ・令和 2 年度：航空測量図化業務、微地形測量(正福寺跡)
- ・令和 3 年度：微地形測量(笠間城跡北西の遺構)
- ・令和 4 年度：航空測量図化業務、微地形測量(正福寺跡東側の遺構)、発掘調査(正福寺跡)

1. 笠間城の歴史

- ・笠間城は承久元年(1219)、塩谷朝業の子笠間時朝によって築城が開始されたとされる。
- ・南北朝期の史料に「笠間城」の記載がみられるものがあり、その存在が確認できる。しかし南北朝期から戦国時代にかけての笠間氏の動向は、不明な点も多い。天正 18 年(1590)、豊臣秀吉の小田原征伐まで没落せずに存続していることから、笠間城は長期間にわたって整備・拡張された。
- ・笠間氏は小田原征伐の際に、宇都宮氏の命に背いたことにより没落。以後は宇都宮氏の支配。
- ・慶長 3 年(1598)、蒲生秀行の宇都宮移封に伴い、蒲生郷成が笠間城主となる。郷成の時代に、天守曲輪の整備を行い、城下町の整備もこの頃に開始されたと考えられる。
- ・関ヶ原の合戦後、徳川氏譜代の松平康重が入城後、藩主が幾度と入れ替わるが、延享 4 年(1747)に牧野氏が封ぜられると、牧野氏の下で明治維新を迎えることになる。
- ・浅野氏の時代に、藩政が執り行われる下屋敷が整備されるも、山城部分も存続する。
- ・井上氏・牧野氏の時代に笠間城の修復がされている。修復願が幕府に提出されるとともに、修復に関わる絵図が伝来する。

※近世の笠間城(図1)

・笠間城は鎌倉時代築城の伝承をもち、近世を通じて、笠間藩の居城として使用された。現在把握されている佐白山頂側にある笠間城跡は、笠間藩時代の城跡のことを指す。

①天守曲輪 ②本丸 ③二の曲輪 ④帯曲輪 ⑤大手門 ⑥的場丸 ⑦石垣

※建造物など：江戸時代の絵図から、御殿・櫓・櫓門・城門・城壁が見られる。本丸八幡台にあった八幡台櫓は市内真浄寺に移築(県指定文化財)され、城門についても、市内の個人宅に伝わっている(市指定文化財)。

※中世の笠間城(図2・3)

・笠間城には、笠間時朝の築城伝承があるものの、その時代に山城を構えるのは不自然。拠点として平地居館が存在していたのでは→「麓城」がその候補ではないのか([高橋 2011])。江戸時代の絵図にもその名残がみられる[額賀 2022]。

⇒中世の笠間城：平地居館から出発し、南北朝期を含む室町時代に、軍事的要請から佐白山周辺に城を移しその原型がつくられたと推測する。そして戦国期にかけて整備されていたのでは。

※近世笠間城の外側に城郭遺構と思われる痕跡がみられ、「正保の城絵図」などの絵図には城郭関連施設として描かれていない→中世笠間城の痕跡ではなかろうか？

2. 笠間城跡北西の遺構(図4・5)

- ・現況図を確認すると、中世城館の遺構らしきものがよく残存していることがわかり、侍屋敷の配置などは図4のように推定できる。微地形測量を実施したことで、遺構がより顕著となった。
- ・現在、当該地において発掘調査を実施中。詳細については次年度以降改めて報告。

○微地形測量成果

【範囲】千人溜駐車場北西側、18,500 m²

【確認された遺構】有限会社三井考測の考察を参考にした

- ・**曲輪**：測量を実施した範囲のうち、平坦地や微傾斜地となっている部分が多い。曲輪の中で最大なのはD区の約3,500 m²。おそらくこの部分に侍屋敷がおかれていたと推測される。C区は628 m²であり、2番目の大きさである。
- ・**堀(堀切)**：D区先端をコの字型に囲む堀とそこから北西に伸びる尾根筋を分断するように作られた堀切が存在する。東側の土塁上の深さはそれぞれ約7 mと4 mの深さとなる。堀切①から延長する堀は、途中から帯曲輪状になる。
- ・**土塁**：D区先端部分にコの字にみられるものと、北西尾根にみられる堀切に付随するような土塁跡が確認できる。
- ・**井戸跡?**：円形のくぼみがそのようにも考えられなくはないが、確証はない。
- ・**通路**：D区の南東側から進入する通路は、「正保の城絵図」にもみられる通路であり、侍屋敷へ通じるものである。また、D区西側には、D区へ入るためと思われる登坂路の痕跡がみられる。
- ・**虎口**：登坂路の屈曲する部分の平坦地を通過して、D区に侵入できる通路がある。人1人が通行できる幅くらいであり、この部分を虎口であると推測した。D区に入ると、その延長上に折れ曲がる微段差を確認することができ、関連する施設である可能性がある。
- ・**横穴**：D区北西端山裾にある。構築年代や使用方法については不明であるが、近代の防空壕や古墳の横穴のようなものとも違う。地下水が溜まっている。
- ・**中世の痕跡**：「正保城絵図」はじめとした近世絵図には遺構の存在が描かれていないことや、遺構

の残存状況を見ると、これらの遺構の大半は中世由来のものと考えられる。

※一番面積の広い曲輪については、近世の侍屋敷がおかれた場所として考えられ、それより上部にある小段状の曲輪は中世由来のものであると考えられる。「正保城絵図」で「侍屋敷」と記載された部分において、明確な城郭遺構が確認されたことは、前時代の存在を明確に表している。

※ただし、今年度の調査の様子から、江戸時代の土地利用においても相応な整備を行っている可能性が出てきた。中世と近世の関係性を整理しなければならない。

3. 正福寺跡東側の遺構(図6・7)

- ・現況図を確認すると、中世城館の遺構らしきものがよく残存していることがわかり、侍屋敷の配置などは図6のように推定できる。微地形測量を実施したことで、遺構がより顕著となった。
- ・当該地は次年度に発掘調査を実施予定。

○微地形測量

【範囲】 正福寺跡東側の遺構が展開するピークを中心とした 15,700 m²

【確認された遺構】

- ・曲輪：一番顕著なのはピークの平坦地であり約 4,200 m²。内部には区画と考えられるくぼみが見られる。それ以外に虎口、土塁、櫓台などもみられる。曲輪状の平坦地は、測量地内の7割。29か所が該当する。
- ・虎口：ピークの曲輪3か所にみられる。特に北西に見られる虎口はほかに比べてしっかりとしている印象がある。
- ・土塁：ピークの曲輪や堀に付随するような形で存在する。特に曲輪の西側と南側には、櫓台と思われるような部分が見られる。
- ・堀：測量地内の3か所に見られる。東側の堀と鍵型の堀は、連続する地形を分断するように配置されている。北西の虎口付近にあるくぼみも堀と考えられるか。
- ・通路：ピークの曲輪に入るものと、小曲輪群の間を移動するための通路が確認されている。
- ・窯跡？：3か所で確認された。形状から窯跡の可能性はある。
- ・ピット状の窪地：柵列や建物跡の名残か？

※絵図上で近世侍屋敷地として記載されている部分は、今回の測量箇所のすぐ西側の平坦地がそれにあたる考えられる。「正保城絵図」では、この部分は山林として描かれていることから、中世以前の土地利用の痕跡が残されていると考えたほうが自然である。

4. 正福寺跡

- ・現況図を確認すると、遺構の残存状況を把握でき、微地形測量を実施したことでより詳細な状況を確認することができた。
- ・令和4年度には発掘調査実施して、当該地の状況を確認した。発掘調査成果については、別の機会で行う。
- ・微地形測量成果として、本堂跡、塔跡、曲輪、堀、土塁、井戸跡？、塚？、通路、出入口？、中世の痕跡(本堂整備時に削平されなかった部分)が確認できた。

※土木工事量も多く、幾重にも帯曲輪がめぐらされていること等を併せて考えると、単純に寺院を整備するだけのために作られたものではない。正福寺整備以外にも、中世城郭(もしくは近世城郭化する過程か)としても整備された部分であったということも十分に想定できる。

※発掘調査により、近世寺院跡の痕跡が確認され、近世の土地利用については確実に確かむことができた。発掘調査エリアでは、近世の改変が大きいと考えられ、中世の痕跡は見つけられていない。

おわりに

- ・航空測量図化と微地形測量により、笠間城周辺の遺構群について考察ができるようになってきた。
- ・侍屋敷としても利用された笠間城跡北西の遺構は、北西側のコの字型の土塁と堀、西側にのびる尾根を断ち切るような堀切、AからCにかけてみられる曲輪群等はまさしく中世城館の名残といえる。近世侍屋敷への出入り口とは別に通路と虎口がみられるが、それも前代のものと考えられないか。
- ・絵図に山林として描かれている正福寺跡東側の遺構は、ピークの曲輪は内部が区画されて、複数の虎口が見られたこと、堅堀・堀切などの遺構が残存していること、南側に幾重の曲輪を配しており、堅固な備えとなっていることなどから、まさしく中世城館の名残としてとらえることができようか。→近世絵図にみられる侍屋敷がこの部分であったとすれば、ここまで遺構を作ることはするのか？
- ・正福寺跡は、近世寺院の痕跡を確実にすることができたことが大きな成果とも言えるが、土地利用の痕跡を見てみると、寺院だけでは必要ないと思われるものがあるので、中世城郭の名残として考えたほうがよいのではないか。

→3か所とも、それぞれが一つの城館として完結できるぐらいの遺構をもっている。

- ・明確な城郭遺構でありながら、「正保城絵図」をはじめとした近世の絵図には取り上げられていないことから、中世で断絶したものと考えられる。

→ただし、近世武家屋敷地において、中世城館を彷彿させるような構造物が使われていたのか。その部分については、他の近世城郭と比較検討を行う必要がある。

- ・あらためて、中世の笠間城は、平地居館から出発し、南北朝期を含む室町時代に軍事的要請から佐白山周辺に城を移しその原型がつくられ、周辺にあった六坊をも含め、戦国期にかけて整備されていったのでは⇒その痕跡が今回の報告で取り扱った遺構群ではなかろうか。

◎国史跡化にむけて重要なのは、①現地にどのような痕跡が残れているのか②それらの来歴はどのような経歴をたどってきたのか③残された痕跡は、考古学的調査によって年代や性格が判明できているか④それらすべてを総合的に踏まえて、笠間城とは地域の歴史を考える上で、どのような歴史的価値が見いだせる遺跡なのか、こうしたものを解明して打ち出すことである。

◎笠間城の国史跡化に向けて、カギとなるのが中世に起源をもつという「中世」部分をどのように証明するのか。顕現している遺構から少なくとも戦国時代にはこうしたものが現地にあった可能性が高い。具体的な年代等については、発掘調査の成果によって判明することを願いたい。

主要参考文献

- ・笠間市史編纂委員会『笠間市史 上巻』笠間市 1993年
- ・笠間市教育委員会『笠間城跡保存整備基礎調査報告書』2014年
- ・岡田武志「笠間城跡」（茨城城郭研究会編『図説 茨城の城郭』国書刊行会 2006年）
- ・高橋修「笠間城」（峰岸純夫・齋藤慎一編『関東の名城を歩く 北関東編』吉川弘文館 2011年）
- ・三島正之「笠間城をめぐって—茨城県笠間市の中世城郭(一)—」（『中世城郭研究』第22号 2008年）
- ・額賀大輔「笠間城」（『かさま歴史ブックレット4 戦国の城を読み解く』笠間市教育委員会 2022年）

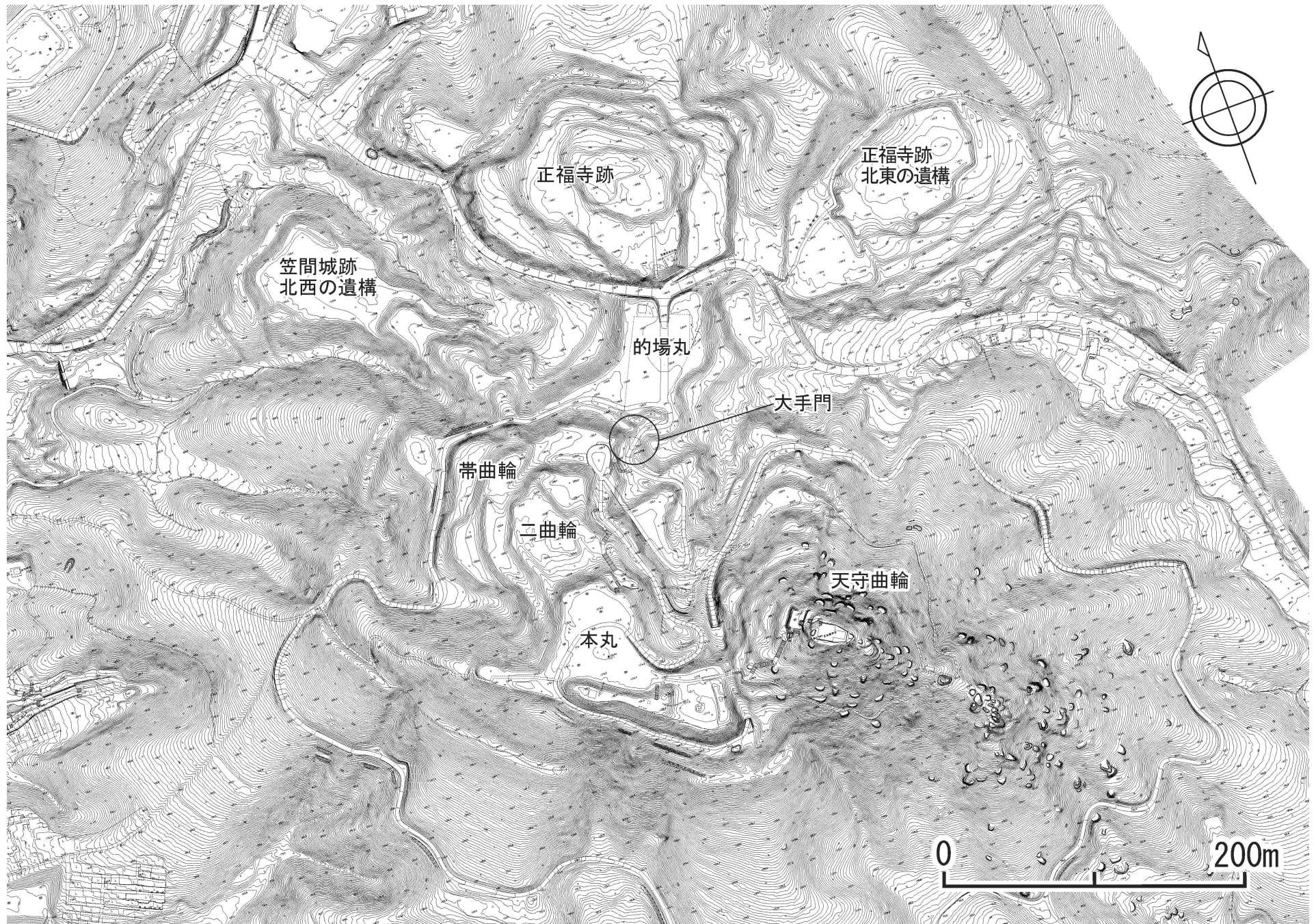


図1 笠間城跡縄張り

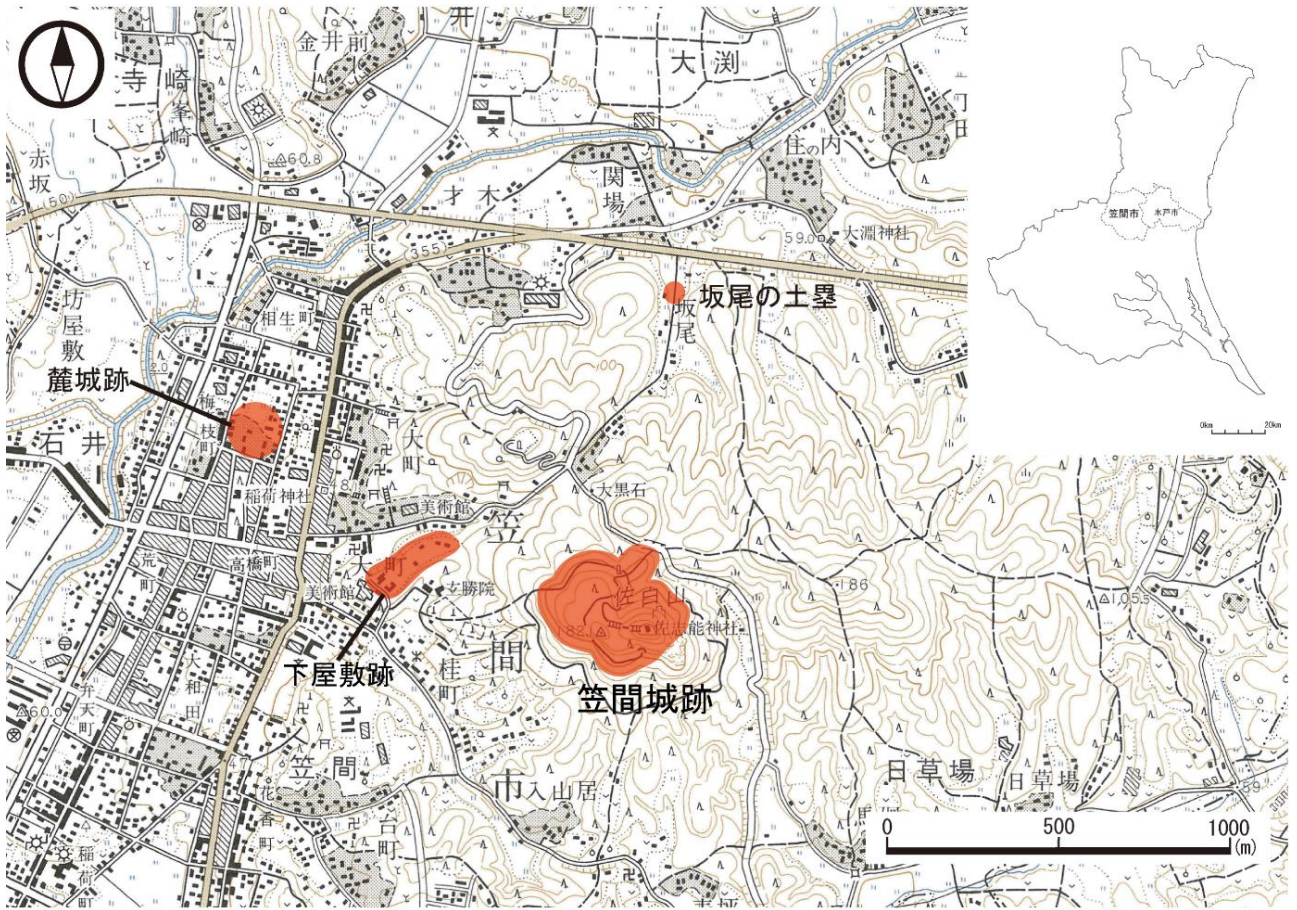


図2 笠間城跡周辺図

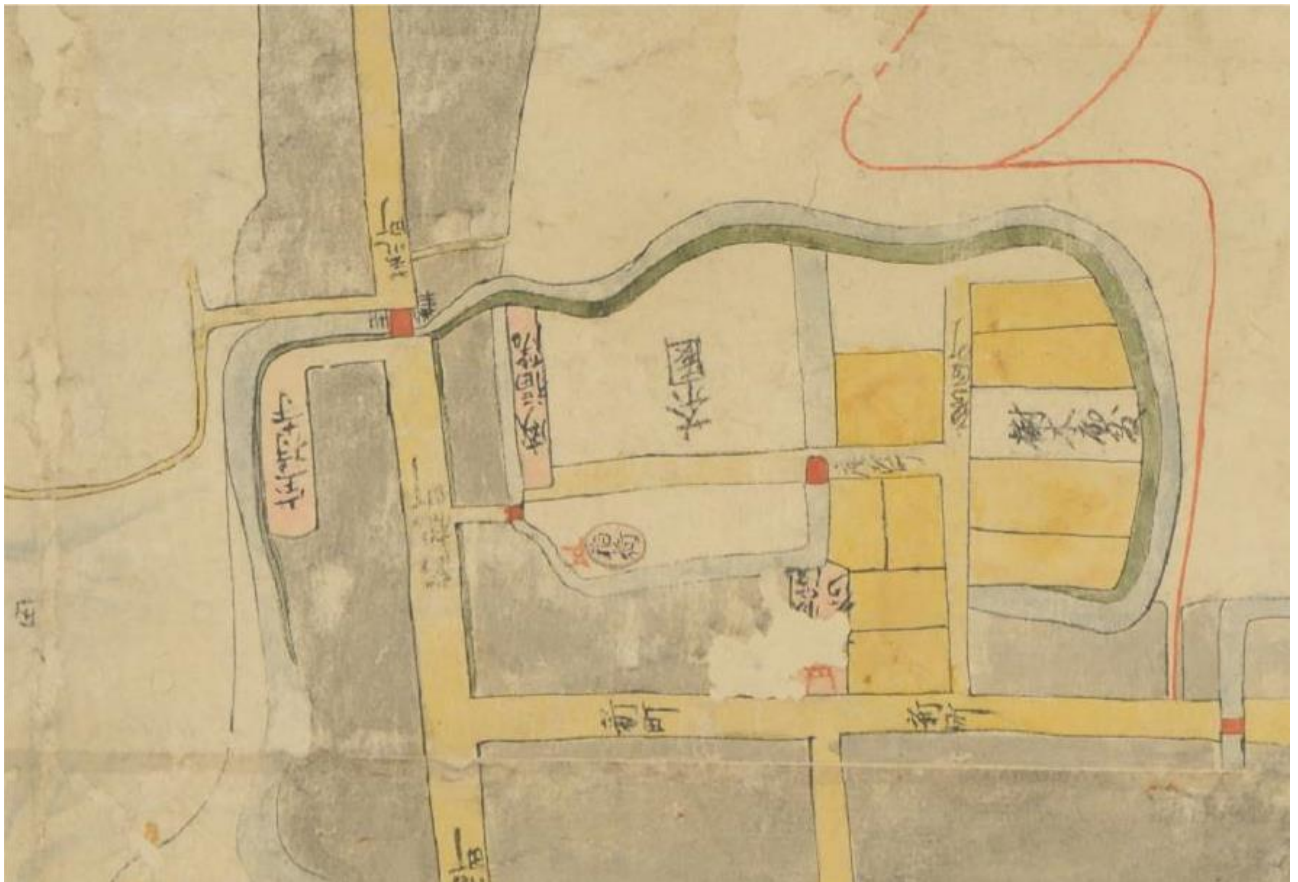


図3 絵図に見える麓城跡(部分「笠間城と城下絵図」笠間市教育委員会蔵)

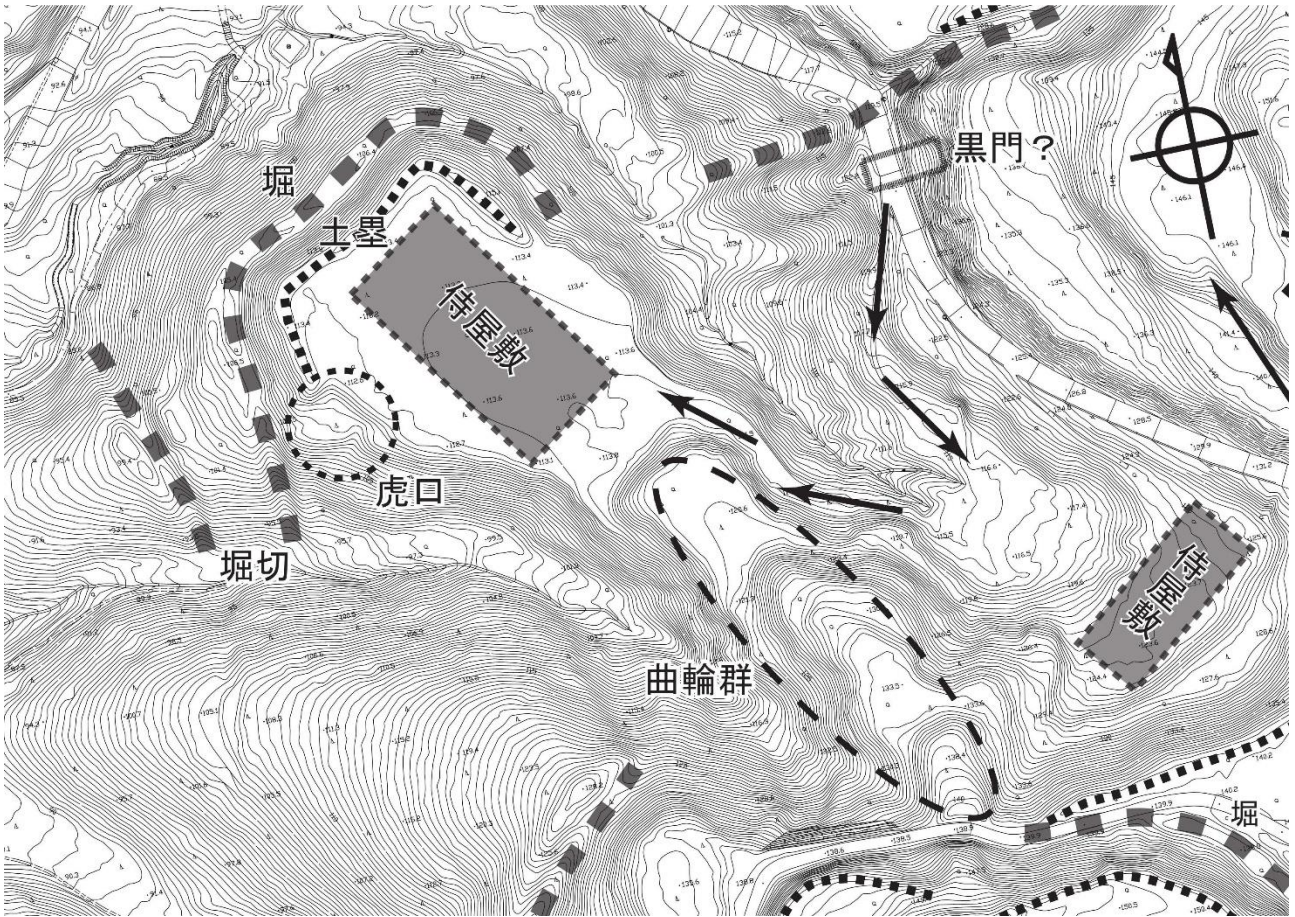


図4 北西の遺構周辺図

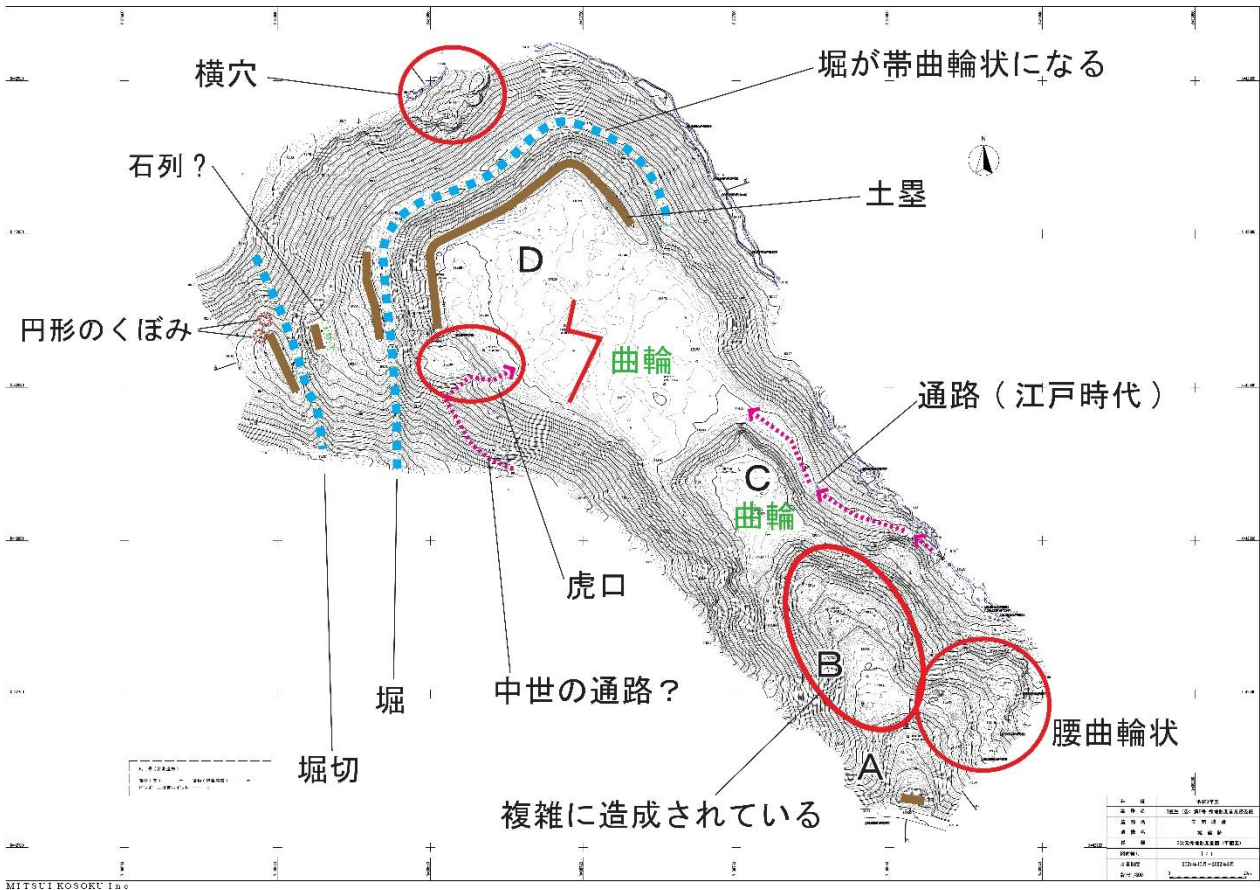


図5 北西の遺構詳細図

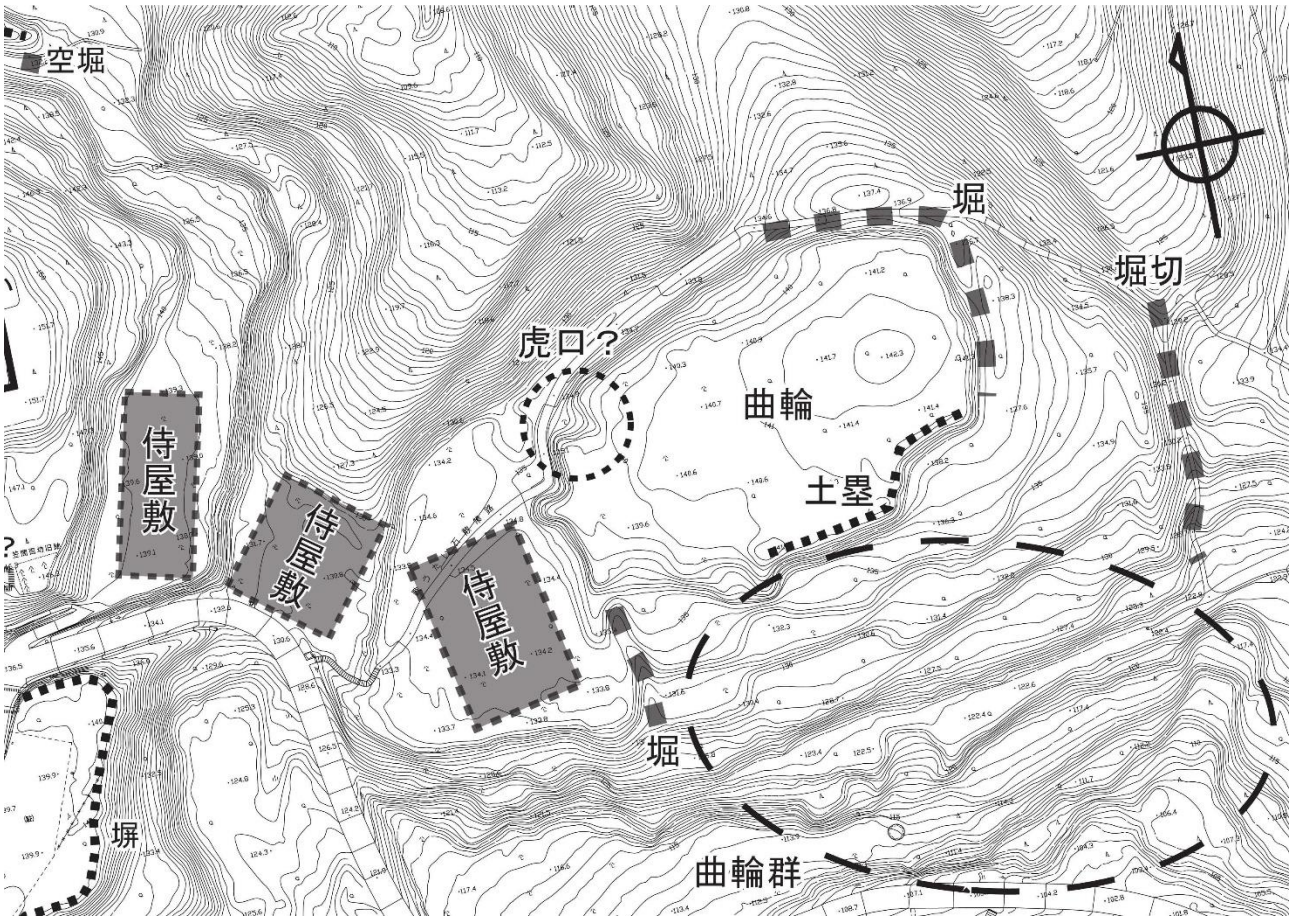


図6 正福寺跡東側の遺構周辺図

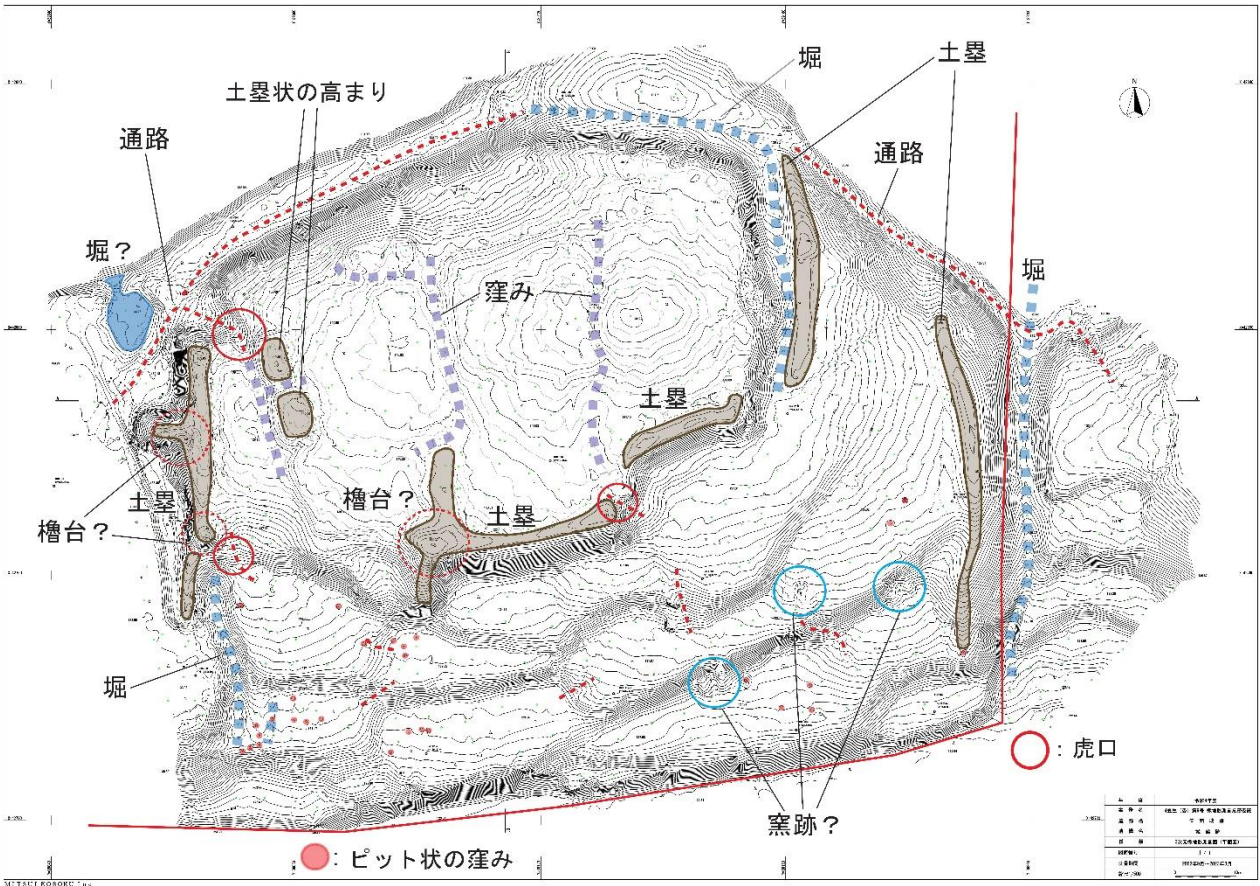


図7 正福寺跡東側の遺構詳細図

県西地区の中世城館 —主要城郭の光と影—

大谷 昌良

茨城県西地域は、現在の行政区分では 10 市町で構成され、このたびの中世城館跡総合調査において対象とした遺跡の総数は 102 地点（城館跡）に及び、各市町別の状況（報告書掲載）は以下のとおりである。

古河市	結城市	八千代町	下妻市	筑西市	桜川市	五霞町	境町	坂東市	常総市
8	5	9	16	15	21	2	4	4	18

（各市町別調査・掲載城館跡数）

報告書に掲載された城館跡については、凡例に示されたように市町村から提出された調査カードを基本とし、地区担当調査員による現地踏査と情報の照合に依ったところである。ついでには、堀や土塁によって区画された曲輪を有する**城館跡**、城館に関連するとみられる遺構を有する**関連遺跡**、明らかな遺構は確認できないが現地に言い伝えなどを残す**伝承地**、そして所在不明城館跡に大別区分して一覧表を作成したところである。

各市町を代表する主要な城館跡については、文献史料の記録とともに交通・交易や戦略上の要衝地に築かれるなど、歴史の舞台に登場する著名な城館跡ばかりではなく地域にとってはシンボリックな城館跡についてもリストアップして記述するに及んだ。その代表的な城館跡については、

古河市：古河城跡、古河公方足利成氏館跡
結城市：結城城跡、山川綾戸城跡

八千代町：太田城跡

下妻市：下妻城跡、大宝城跡

筑西市：久下田城跡、小栗城跡、関城跡

桜川市：真壁城跡、橋本城跡、坂戸城跡、羽黒山城跡

坂東市：逆井城跡

常総市：菅生城跡

などで、その城館跡の立地については多くが**平山城タイプ**として丘陵や台地、河岸段丘の先端部もしくは縁辺部に堀を切り土塁を築くなどしてさらには自然地形を活かして天然の要害とされるものである。また、**山城タイプ**は山腹もしくは山頂にその地形を活かし堀切と土塁によって築かれるものを見ることが出来た。この山城タイプは、桜川市（旧真壁町、旧岩瀬町）において見られる山間部で標高 100～200m 超えの地形的特徴を活かした築城形態である。

城館跡の調査に関しては、城跡に限ることなくいわゆる平地での居館跡の調査にも及んだところである。古河公方足利成氏館跡、磯部館跡、山川館跡、城内館跡、塩本本田遺跡、法戸氏館跡、館沢館跡、笹目館跡、江村館跡、村岡館跡、袋弾正居館跡、布川館跡、堀ノ内遺跡（東叡山承和寺跡）、御殿内遺跡、関本館跡、村田館跡、平良兼館跡などその多くが地元で伝承されるもので、その実態を明らかとする遺跡（館跡）は少ない。そうした中において、県内でも文献史料から初見とされる「館」が八田館（御殿内遺跡か？）である。同遺跡の周囲には、今も中世的な小字名を残し、遺跡に至る東に延びる直線道路は鎌倉（街道）の名を残している。史料としては『吾妻鑑』治承四年（1180）の記事で、頼朝が金砂

合戦で金砂城の佐竹氏を討伐し鎌倉への帰途に小栗十郎重成経営下の小栗御厨の八田館に立ち寄ったという記事に見ることが出来る。「城」ではなく「館」という日常生活の拠点となる場がこの当時住み分けられていたことを知る資料であるといえる。なお、遺跡は残念ながら圃場整備事業により湮滅している。

【地域に生きる城跡】

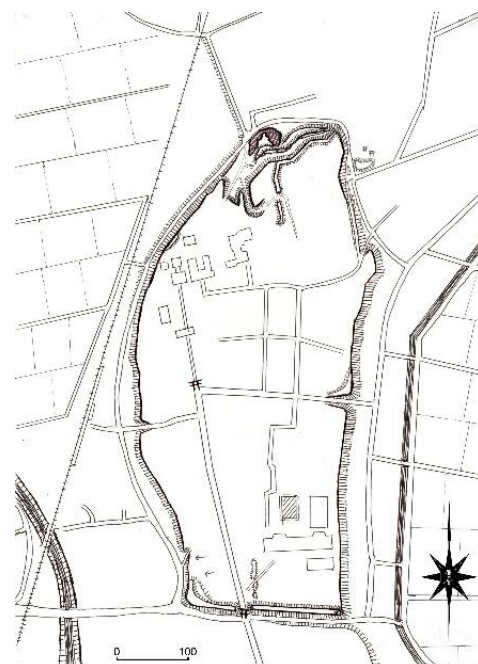
各地区を代表する城跡の中には、発掘調査を経て整備された公園として地域の憩いの場を提供するものや、早くから街中の公園として活用されてきたものがある。さらには、集落と一体となり生活の中に取り込まれた城跡もある。

中でも早くから都市公園的に地域住民との生活の中に溶け込んできたのが結城城跡、下妻城跡である。宅地化される中においても城郭の主要部（曲輪、堀、土塁など）を残している。また、大宝城跡や下館城跡などは寺社用地、学校用地



←下妻城跡縄張図
余湖浩一
2021.10

大宝城跡縄張図⇒
余湖浩一
2004.10



として今日に至り、古河城跡に至っては、城の主要部が調査されることなく河川の堤防工事により湮滅の憂いにある。

城跡の発掘調査により文献史料を凌駕する成果を上げているのが真壁城跡や逆井城跡である。文献では語られない歴史的事象をモノ（遺物）が語りかけてくれる、あるいは大地に刻まれた痕跡（遺構）により建物の存在・規模を目の当たりにすることが出来る。調査の進展にともない調査成果を現地説明会という形で開催し、地域住民と遺跡を結びつけてくれる。さらには、調査に基づいて史跡整備が試みられるなど中長期的な活用が図られる城館跡もある。昭和 57 年（1982）から 8 次にあたる調査が行われた逆井城跡は、平成 2 年（1990）から史跡整備が行われ、堀や土塁が整備され復元建物が配置されるなどして市民の憩いの場ともなっている。しかし、積年の経過により樹木の立ち枯れや剪定作業、



落ち葉や草刈りなどの維持管理作業、建物の老朽化などの問題も現実的に起こり始めているのが現状である。

逆井城跡縄張図 余湖浩一 2020.10

【忘れ去られる城跡】

城館跡の多くは、歴史の舞台から離れると同時に記録もなく人々の記憶から忘れ去られてしまう運命にある。重要な城は江戸時代に幕藩体制のもとに組み込まれて存続するも、中世城館の多くは廃城となり草木に埋れ山野と化している。文化財の指定を受けるでもなく、包蔵地として登録されればまだ救われるものの、多くは伝承地として地域の歴史舞台からも埋れてしまっている。

また、初期徳川政権の信頼あつく関ヶ原の戦い以後も常陸国内では唯一、城も所領も安堵された水谷氏に係わる久下田城跡に至っては、平成 25 年（2013）5 月、本丸にあたる曲輪 I に所在する稲荷神社が放火され周囲の樹々ともども焼損して現在も立ち枯れのままの状況にある。さらには令和 2 年（2020）7 月に



は、曲輪 II・IIIをはじめとする曲輪 I を除く城跡のほぼ全域が伐開され、堀底・土塁・腰曲輪に至るまであらわとなった。現在、文化財指定区域の曲輪 I を囲むかのように曲輪 II と腰曲輪、曲輪 III に至るまで太陽光パネルの波に覆われてしまい、景観を大きく損ねてしまっ

久下田城跡縄張り図 遠山成一（稲葉修氏図を参考に作成）

2022.1.26、12.27

いる。またそれ以前に真岡市側の区域ではあるが、城の南西部、かつては外堀の低地部にも広範囲にわたり太陽光パネルの設置がなされている。もはや遺跡であることが忘れ去られようとしているかのようである。

【おわりに】

さて、地域のシンボルたる遺跡として城館跡を取り上げる場合、ただ単に遺跡を指定の運びに供するだけでなく地域からの育成を図らねばならない。地域の歴史への関心を地元から呼び起こすこと、さらには長く遺跡にかかわりを持ってもらうことが大事である。こうした場合、「〇〇を守る会」などと保存会が立ちあげられる場合が多い。しかし、文化財の指定が無ければ、行政からの積極的な支援はなく、やがて保存会も解散の憂いを見るという事例が多くある。

守る会の活動だけではやがて来る後継者の不足、構成年齢の高齢化からくる活動の弱体化を招きやすく、行政自治体においては是非とも専門職員の配置と文化財の活用策の策定、しいては広域連携による地域文化財の保存活用策のもとで団体の育成と支援を図られたい。このたびの報告書を手掛かりに地域のシンボルの再発見と広域的な保存活用、そして地域に根差した文化財を叢とすることなく活用していただきたい。

主要参考文献

- ・茨城県教育庁総務企画部文化課『茨城県の中世城館』茨城県教育委員会 2023年
- ・茨城城郭研究会『改訂版 図説 茨城の城郭』国書刊行会 2017年
- ・峰岸純夫・齋藤慎一編『関東の名城を歩く 北関東編』吉川弘文館 2011年

県西の城と内宿地名 ―常陸両地域の比較から―

遠山 成一

はじめに

戦国後期、東国に内宿という地名が出現し、市村高男氏によって次のようなまとめがなされている⁽¹⁾。

(1)根小屋の発展形であること、(2)内宿には多様な発展段階があること、(3)内宿は基本的には家臣団居住地としての本質があること、(4)外堀で囲郭され城郭の外郭部としてとらえられていること、(5)商人や職人の住む宿(外宿)を内宿とともに統合し、戦国城下町を形成していったこと。以上である⁽²⁾。

報告者は、この市村氏の論文をもとに、房総における内宿地名について前例を検出し、伊藤毅氏の説く武家地系宿⁽³⁾を念頭に検討を加えたことがあった⁽⁴⁾。結論的には、市村氏・伊藤氏の行論をトレースしたに過ぎないが、あえて言えば、房総における同地名は国衆レベルの本城に多く、また交通の要衝である中小規模の城郭にも少数存在することがわかった。

本報告では、この房総の事例を常陸地域にも敷衍できるかを確認し、築城の来歴がある程度わかっている久下田城跡を主に、常陸国内の内宿を検討してみたい。

1. 常陸国の内宿地名

管見の限りでは、10例。行方市(旧北浦町)内宿の木崎城跡と内宿館跡のある内宿を同一とみるか。

10例中筒戸城跡を除き、ほぼ国衆レベルの領主の本城(本拠地)に形成されている。また、規模の大小の差こそあれ、内宿に対し外宿ともいべき商工業者の住まう宿が隣接して存在する(筒戸城跡は例外)。

[事例報告]

① 久下田城跡→天文13年(1544)に、宇都宮氏の脅威に対抗するため、水谷正村(蟠龍齋)によって築城されたという[別本水谷蟠龍記]

「(前略)故に蟠龍、^{とどまり}頓て天文十三年十月廿日縄張をなされ、霜月三日迄に惣堀を究め、先小屋懸なされ、移り給い(後略)」

⇒現状の縄張構造からみて、あまりにも短時間で構築されており、主郭周辺のみが造られたか。

字「とほり」の存在(☞縄張図参照)

とほり(戸張・外張)とは…城の出入り口で木戸などのある一帯をさす。内宿は、「とほり」より城の中心部に近いところにある。現状では防御施設らしき構築物は見当たらないが、内宿地区と戸張の間を東西に通る茨城県道・栃木県道216号線は堀跡を利用したものか。

② 豊田城跡→豊田氏の本城 小貝川の自然堤防上に築かれる。現状、城本体は河川改

修により壊滅状態とされ⁽⁶⁾、内宿を含む集落が堤防沿いに残る。

字名 ^{うちやど}内宿・^{あらじゆく}上宿・^{だいどう}下宿・北宿・新宿・大道添・大道東・大道西など

「大道」の字名が残り、これに沿って宿地名が展開することから、当城は小貝川の自然堤防上に形成された古道と小貝川の水運という、水陸交通の要衝を占める豊田氏の本拠であったと考えられる。

また、中世まで遡ることができるか不明であるが、戦前までは上宿地区より小貝川を渡り、同川左岸の上郷（つくば市）方面に行くことができた。

③筒戸城跡→守谷城の相馬氏の支城。相馬親胤が天正年間の城主とされる。

内宿地区は、城跡から約 500m離れた所に位置する。また、外宿に該当するような宿は、付近には存在しない。

④玉造城跡→市村高男氏の研究 [市村 1994]

常陸大掾氏の一族行方氏から分かれた玉造氏の本拠。

玉造城跡の麓に根古屋と内宿、霞ヶ浦（常総内海）に沿った街道には上宿・下宿が展開する。さらに霞ヶ浦に面した玉造津には、「浜」とよばれる集落（宿）があった。

表 1 常陸国内の内宿地名一覧

	城名	所在地	外宿に対応する宿	城主および特徴
1	久下田城跡	筑西市樋口	南宿	水谷蟠龍斎築城 とはり地名
2	豊田城跡	常総市本豊田	上宿・新宿・北宿	豊田氏の本拠地（「うちやど」）
3	布川城跡	利根町布川	中宿・浜宿・新宿	府川豊島氏の本拠地
4	石神城跡	東海村石神字内宿	外宿	小野崎氏の本拠地
5	小高城跡	行方市小高	宿	小高氏の本拠地
6	真壁城跡	桜川市真壁	上宿・下宿・新宿	真壁氏の本拠地
7	行方城跡	行方市行方	台宿・神宿・立宿	行方氏の本拠地
8	玉造城跡 *	行方市玉造町甲	上宿・下宿・浜宿	玉造氏の本拠地：根小屋
9	木崎城跡	行方市内宿	上宿・下宿	武田氏の本拠地
9	内宿城跡	行方市内宿	上宿・下宿	木崎城からみて内宿か
10	筒戸城跡	つくばみらい市筒戸	—	相馬氏の支流筒戸氏の本拠地

*印はネゴヤ地名を持つ

2. 千葉県の内宿地名

表2 下総・上総・安房国内の内宿地名一覧

	城名	所在地	外宿に対応する宿	城主および特徴
1	関宿城跡	野田市関宿	台宿	築田氏の本拠地
2	米本城跡 *	八千代市米本	上宿・中宿・下宿	村上氏の本拠地
3	助崎城跡 *	成田市名古屋	中宿・新宿	助崎大須賀氏の本拠地
4	大和田城跡	成田市大和田	宿	不明
5	松子城跡 *	成田市松子	地名としては無	大須賀本宗家の本拠地
6	鎗木城跡	旭市鎗木	宿	鎗木氏の本拠地
7	八幡城跡	山武市埴谷	宿	不明（押尾氏カ）
8	成東城跡	山武市成東	上町・下町	成東千葉氏の本拠地
9	本納城跡	茂原市本納	中宿・（本宿）	土気酒井氏の支配拠点
10	一宮城跡	長生郡一宮町一宮	社宿	一宮正木氏の本拠地
11	勝浦城跡 *	勝浦市勝浦	「志ゆく」	勝浦正木氏の本拠地
12	万喜城跡	いすみ市万木	伊保宿・筑場宿他	土岐氏の本拠地
13	秋元城跡 *	君津市清和市場	上宿・中宿・下宿	秋元氏→里見氏
14	勝山城跡	南房総市富山町		正木氏

千葉県の内宿地名は14例。*印は根小屋地名をもつもの

国衆クラスの本城がほとんどで、支城の場合は支配拠点として重要な位置を占める。また、これ以外に交通の要衝に位置する城跡（表2の4・7）が見られる。

〔事例報告〕

①万喜城跡→万喜土岐氏の本拠

内宿は夷隅川を前面の防御とし、南の堀は山麓まで、北の堀は山の法面から豎堀を落とし、さらに堀切で夷隅川まで伸ばし、完全な防御を図る。おそらく城主の居館があったものと考えられる。

外宿にあたるものは、筑場宿・伊南宿（内宿をはさんだ両隣にあたる）、伊保宿（西山麓）が城域周辺に存在する。

②助崎城跡→助崎大須賀氏の本拠

根古屋がⅡ郭の南麓に位置するのに対し、内宿はⅠ・Ⅱ郭とほぼ同じ標高にあって、土塁・堀等で区画された空間である。街道は北側（滑河方面）から新宿・須賀町・中宿と来て、城域である内宿に入らず、横町から旧大栄町吉岡（現成田市）方面に延びる。

3. 両地域を比較して

両地域とも、国衆レベルの本拠もしくは支城クラスの城にともなう場合がほとんどである。房総の場合、そこまでの規模はないが、交通の要衝を占める城郭にともなう例が少数あった。

また、両地域に共通して多くの場合、堀や土塁、もしくは防御的に適した地形によって守られていた。

ネゴヤ地名をもつものが両地域とも見られたことから、一つの類型としてネゴヤから内宿への発展形が考えられた。

注

- (1) まとめに誤りがあるとするれば、報告者の理解不足によるものである。
- (2) 市村高男「中世東国における宿の風景」（網野善彦・石井進編『中世の風景を読む2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』、新人物往来社、1994年）
- (3) 万一、誤りがあれば、報告者の理解不足によるものである。
- (4) 伊藤毅「「宿」の二類型」（五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民 中世から近世へ』、山川出版社、1993年）
- (5) 遠山成一「戦国後期房総における城下集落の存在形態－内宿地名の検討を中心に－」（佐藤博信編『中世東国の社会構造 中世東国論下』、岩田書院、2007年）ここでは、房総における内宿地名14例をもとに検討したが、その後、稲村城跡はここにいう内宿には該当せず（「うちがやど」と呼称し、該期は戦国前期）、安房勝山城跡の内宿地名が遺漏していたことに気づいた。
- (6) 現地踏査および空中写真（戦後まもなくの）から、「中城」地区は畑地として地下に遺構が残存している可能性が考えられる。

【参考文献】 本文・注であげた他

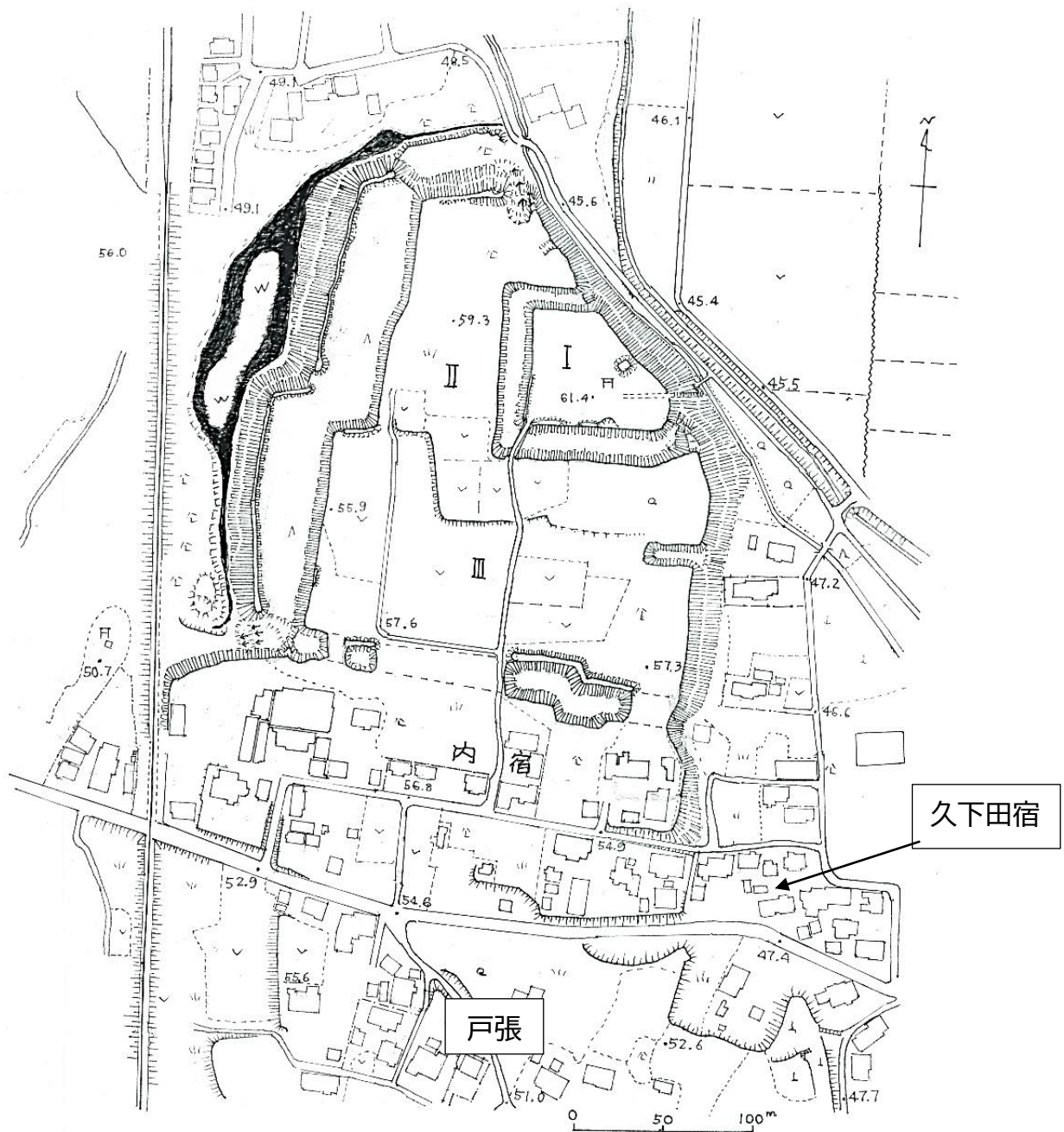
1996年 『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第17集 一助崎城跡測量調査報告一』
千葉県教育委員会

2017年 茨城城郭研究会編『改訂版 図説茨城の城郭』国書刊行会

2023年 『茨城県の中世城館－茨城県中近世城館跡総合調査報告書一』茨城県教育委員会

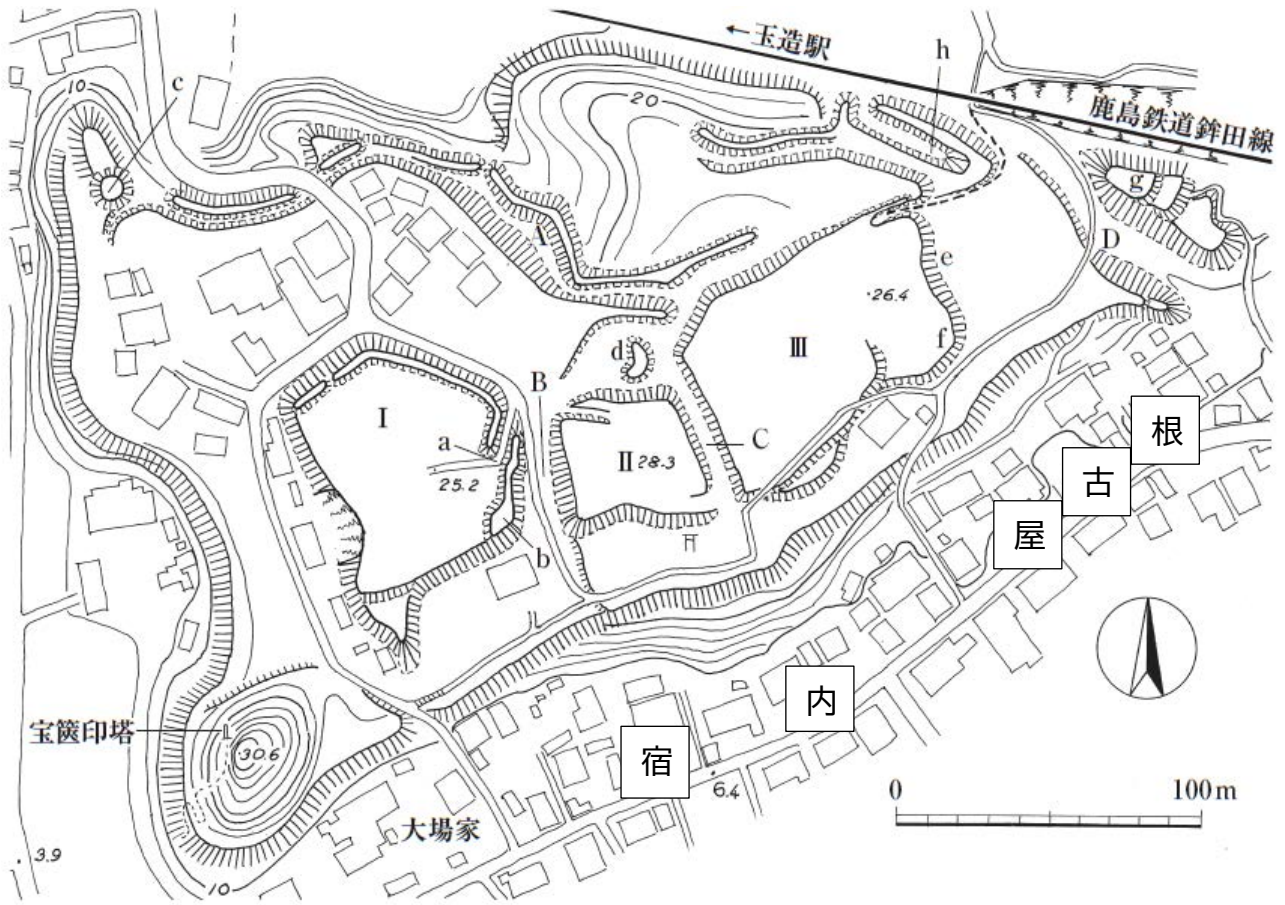
資料編

1. 久下田城跡縄張図



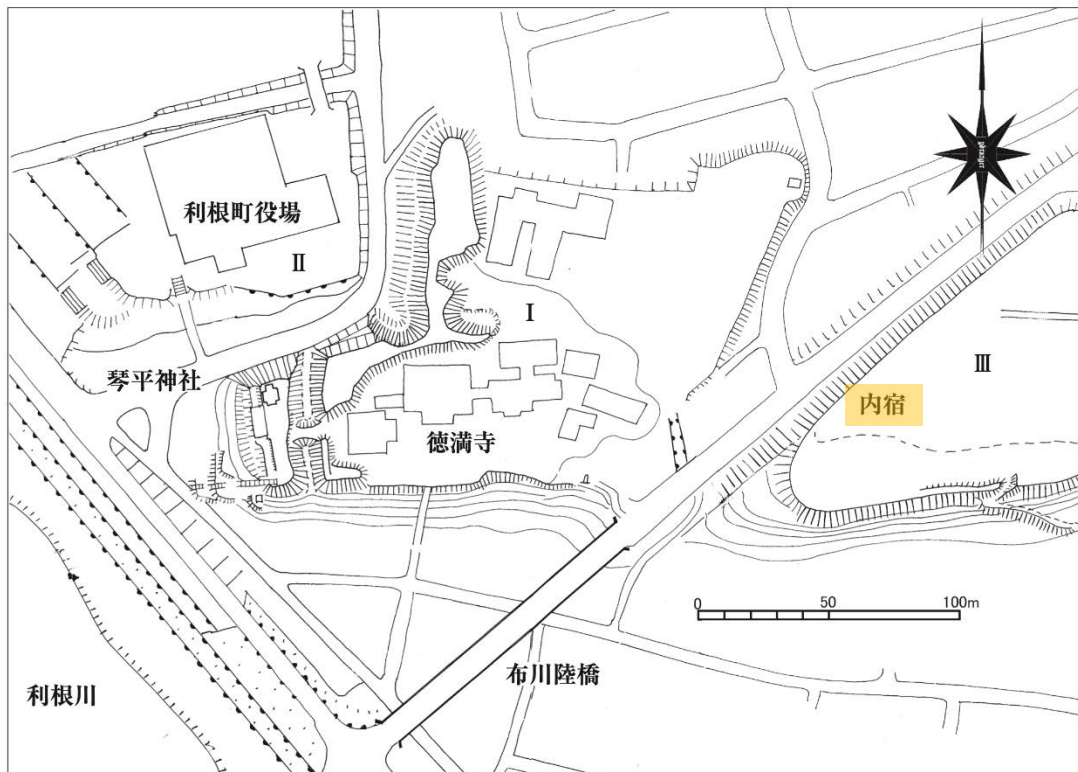
出典 『茨城県の中世城館 - 茨城県中世城館跡総合調査報告書 - 』茨城県教育委員会 2023 年
(遠山成一 作図) 一部加筆

2. 玉造城跡縄張図

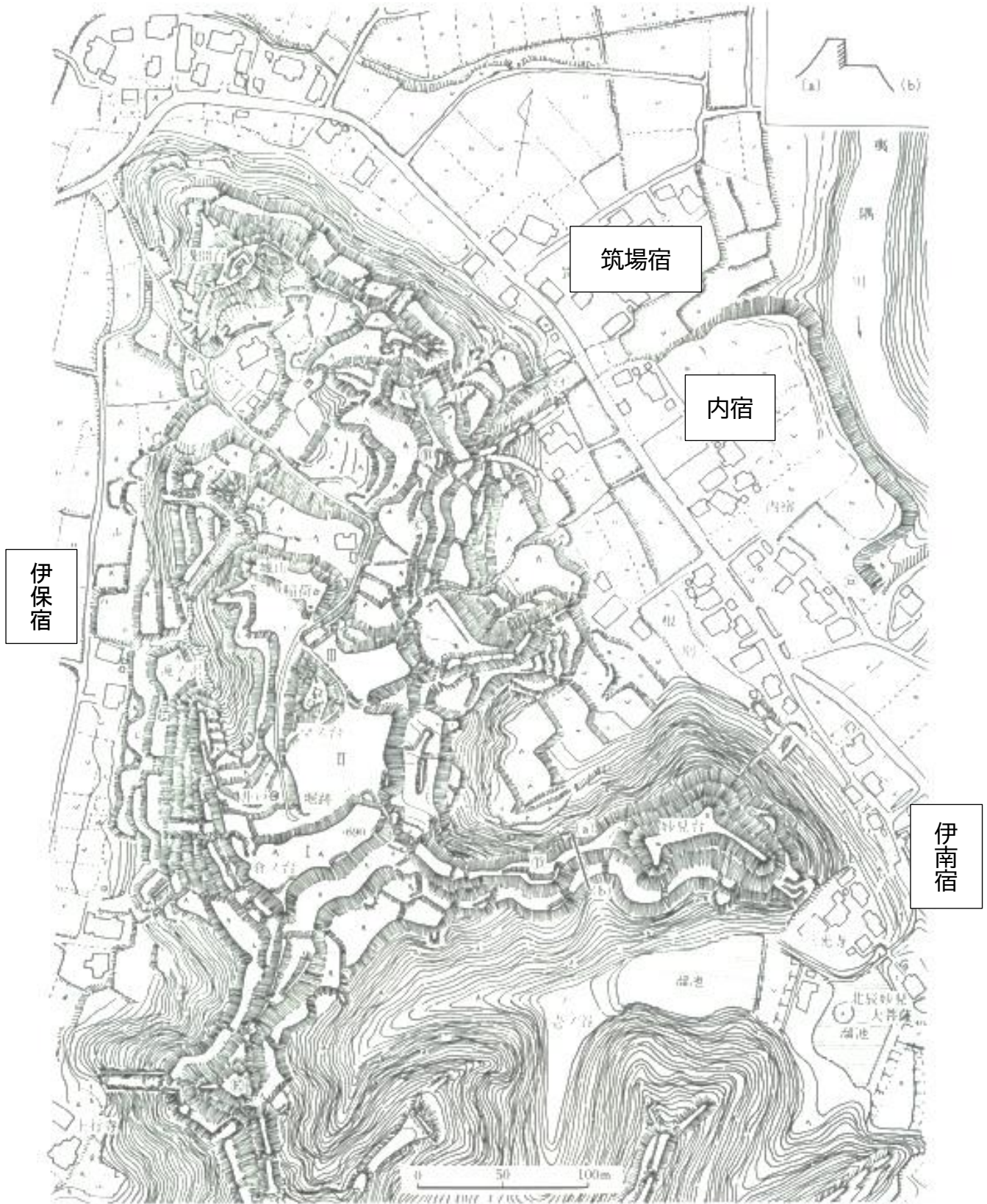


出典 『同前』(西山洋氏 作図) 一部加筆

3. 布川城跡縄張図 本間朋樹氏作図 出典『改訂版 図説茨城の城跡』



4. 万喜城跡縄張図



出典 『図説 中世城郭事典一』(三島正之氏 作図) 一部加筆

5. 助崎城跡縄張図



出典 『千葉県所在中近世城跡研究調査報告書 第17集』(遠山成一 作図) 一部加筆

河川湖沼と中世城館—山川綾戸城を中心に—

桜川市建設部都市整備課

越田 真太郎

はじめに【図1・3】

- ・結城市山川館跡 (0488、P279)
- ・同市山川綾戸城跡 (0487、P280)
- ・下総国結城郡下方（現在の茨城県結城市南部・八千代町北部・古河市東部）に所在する山川氏に関連する城館跡。下総国は河川湖沼の多い地域で、両城ともそれらと深いつながりが見受けられる。近年研究が深化している中世の水上交通に関する研究成果や、『茨城県の中世城館』に付属する文献史料一覧に掲載されている古文書等（掲載されている文献は「県西〇〇」などと表示）を参考に分析を行いたい。

・山川（山河）氏

結城氏初代の結城朝光の子、重光を始祖とする。結城氏の庶流ではあるが、山川氏単独で鎌倉御家人として活動し、本流の結城氏や小山氏と度々養子縁組を行うような有力な一族。結城郡下方（「山河」と呼ばれていた地域）を本拠とする。

1. 山川館跡（結城市上山川）【図4・5】

- ・南北195m、東西147.5mの長方形。鬼怒川に近い平地にあり、四方を堀（幅5～6m）と土塁（幅約12m）で囲む。
現在は東持寺（曹洞宗）の境内。東持寺は寛永3年（1626）に移転してきたもの。
土塁は南と西に開口部があるが、西は寺院になってから開けられたものと想定されており、南側が虎口と考えられる。かつては北側に跳ね橋があったと伝えられている。
地表面観察や地図上では周辺に副郭の存在は見えず、単郭の館と考えられる。
- ・北西約800mには奈良時代初めに建立された結城廃寺（法城寺）があり（室町時代中頃まで当地に所在）、結城郡衙も近隣に存在したであろうことが推定されることから、結城郡の中でも中心的な地区であった。
- ・館跡から南へまっすぐ伸びる道沿いに集落や薬師堂・観音堂（中世の大型五輪塔が残存）などが形成され、馬場（ばんば）・南宿等の地名があり、中世の景観がよく残されている。
- ・上記の南北道と直行する東西道は、古河方面から延びる道（下総国と下野国の国境となっており、古代道の痕跡と考えられている）の延長線上にある。この東西道が鬼怒川に当たる場所の地名は「追立（おったて）」といい、中世文書に渡河点として登場する。

【史料1】県西38 暦応3年（1340）5月日「矢部定藤軍忠状写」

「・・・同（暦応2年）九月八日、馳参武州村岡宿、所々御陣御供仕、十月廿二日、馳向並木渡、同廿三日、越折立渡、追散凶徒、焼払在家、同駒館・野口之合戦之時・・・」

この東西道は『将門記』に見える、平良兼が真壁方面から出発して石井之宿を襲撃した際に通っ

た「結城郡法城寺之当路」と一部関連すると思われ、古代から存在する道であった可能性が高い。

- ・鬼怒川の渡河点（折立渡）付近には上山川河岸も所在していた。上山川河岸は慶長3年（1598）の成立とする江戸期の文書もあり、それ以前より船着き場として存在していたと考えられる。山川氏初代山川重光は母方の縁により常陸平氏族行方氏や千葉氏の所領を継承している。また、3代貞重の弟光義（4代景重父）は潮来長勝寺所在の元徳2年（1330）銘梵鐘に見える「大施主下総五郎禅門道暁」に比定されており、霞ヶ浦（香取海）周辺に権益を持つのみならず、青森県弘前市長勝寺所在の嘉元4年（1306）銘梵鐘にも「沙弥道暁」として名がみえることから、遠く津軽にも影響力（地頭代？）を持っていた（市村 1996a・b）。

➡館跡は地域の主要な道に近接し、渡河点を抑えるとともに、鬼怒川を介した水上交通を重視した選地をしている。発掘調査はされていないので確定はできないが、こうした立地や結城廃寺の存在をみると、伝承通り鎌倉～室町時代の山川氏の館であると推測できる。

2. 山川綾戸城跡（結城市山川新宿）【図6～8】

- ・山川館から南西へ約3.5km離れた、東西南の三方を山川沼に囲まれた半島状の土地に所在する。半島の先端から曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと並び、その北側に城下町が築かれている。現在は田畑や宅地となっており原形はほとんど残っておらず、発掘調査も行われていないため、古城図や航空写真をもとに現地踏査をして推定復元図を作成。
- ・山川氏が、山川館から山川綾戸城へ本拠を移転したと考えられるが、時期は不明。結城合戦（1440～1441年）あるいは享徳の乱（1455～1483年、関東地方における戦国時代の始まりと位置付けられている）が契機か？

【史料2】 県西 239 享徳4年（1455）閏4月「鎌倉大草子」

「・・・山川の城、真壁の城も責おとされて、いずれも成氏へ降参す・・・」

【史料3】 県西 251 （康正2年（1456））4月4日「足利成氏書状写」

「・・・（前年のこととして）一、山河兵部少・真壁兵部大輔構要害成敵讎間、可加討裁処、各退城内帰降候了・・・」

15世紀の中ごろに、武士がそれまでの館とは別に恒常的な城郭（要害）を築城し、本拠を移転する事例が全国的にみられるという（齋藤 2006）。山川氏の事例もその一つとして考えられる。

- ・慶長6年（1601）に山川氏は結城秀康とともに越前国へ移る。山川領は幕府直轄領などを経て元和元年（1615）に水野忠元の領地（最大3万5千石）となる。忠元は曲輪Ⅲを新たな本丸として城郭と城下の整備を進めたとされ、寛永12年（1635）忠元の子の忠善が駿河へ移封された後は陣屋として利用された（古城図が残存）。

➡山川綾戸城は三方を沼に囲まれ、山川館に比べて守りやすい城郭といえる。山のない地域において、いかに守りの堅い場所に城を築くか、という考えがうかがえる選地。

- ・北条氏による結城・山川領侵攻

天正6年（1578）4月下旬、佐竹義重や結城晴朝による下野国壬生城攻めに対し、北条氏は壬生氏支援のため後詰の兵を出し山川綾戸城を攻める。

→関連する古文書から山川綾戸城の構造が見えてくる。

※【史料4・5】は年未詳文書で、元龜2年(1571)・天正5年(1577)とする説もあるが、『小川岱状』との関連から天正6年と判断した。

【史料4】 県西 399 (天正6年) 5月22日「北条氏政書状写」

「・・・抑至于山河近陣ニ、今日廿二、宿城悉仕払、凶徒五十余討捕候・・・」

【史料5】 県西 400 (天正6年) 5月24日「壬生周長書状写」

「・・・南陣(北条氏政)者、去廿日、山川戸張・宿城無貽被破、生城計候、彼地三方沼ニ候間、海船数多被入被取扱候、於落居ハ不可有程候・・・」

【史料6】 県西 418 「小川岱状」

「・・・天正六年卯月下旬ニ、佐竹殿催多勢向壬生御出馬(中略)(北条氏政が) 引卒五千余騎取越利根川、已為山川近陣、サレハ糟連井・今宿トテ城外ニ構アリ・・・」

①山川綾戸城の周囲には「戸張(とぼり)」「宿城」がある。「糟連井(粕礼)・今宿トテ城外ニ構アリ」とも関連。

→この「戸張」は城下町もしくはその周辺の防御線を指すか。

「糟連井(粕礼)」「今宿」は城跡の東側に現在も地名が残っており、この宿(集落)を臨時に城郭化したものを「宿城」と呼んだと思われる。

②戸張・宿城とは別に「生城(はだかじろ)」がある。

→戸張・宿城を破られると「生城」だけになる。曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのみ(もしくは曲輪Ⅰのみ)の状態を呼んだものか。

③城は3方が沼に囲まれており、城攻めには船が使用されている。

→河川湖沼との関わりが大きいのが山川綾戸城の特徴

・「綾戸」地名からは川津の可能性も推定できる。

【史料7】 県西 490 天正18年(1590)9月20日「豊臣秀吉宛行状」

綾戸城を「あやつ(綾津)」と記している。

【史料8】 県西 2-214 (江戸後期)「山川小四郎朝頭覚書」

「・・・あやどか船渡し之所なれハ・・・」

【図7】(江戸前半作成)「山川古城図」

「鮒太郎(鮒之太郎明神)」の記載。

→船による城攻めについて

【史料9】 県南 208 慶長8年(1603)6月20日「野口豊前守戦功覚書写」

「天正十六」一、谷田部坊地と申所へ、てきふねにて川ヲ取こし申候所ニ・・・」

野口豊前守は下妻城主多賀谷氏の家臣。谷田部城付近の戦闘か。

【史料10】 県西 343 永禄11年(1568)8月28日「築田持助感状写」

「今度敵以兵船、塚崎之郷(現境町塚崎)へ相動候処、從城内より以船懸合、正面之奥数刻相戦、敵致合討事・・・」

【史料11】 県西 383 天正2年(1574)閏11月3日「北条氏政感状」

「今日、於水海表(現古河市水海)敵船討留砌走廻候、武勇感悦候・・・」

➡常陸国・下総国の内陸部でも船による兵員輸送や船戦は行われており、山川綾戸城攻めにも大きな役割を果たしたと考えられる(海船は・・・?)。

一方、陸上交通は城下町から北へ伸びる道が結城城へ繋がるものの、周辺の主要な道と城下町は

直結していない。築城にあたって既存の主要道を付け替えた様子は見受けられず、城下町である山川新宿を新たに設置したとはいえ、周囲の宿を大規模に移転させた様子も見受けられない。ただし、水上交通のみを重視して陸上交通を軽視しているということではなく、既存の交通網や宿をそのまま生かし、防御線としても活用している様子がうかがえる。

→国衆レベルの城の特徴？

おわりに

天正6年の北条氏による攻勢に山川綾戸城が（生城になりつつも）耐えるなか、佐竹氏を旗頭とした反北条氏連合（東方之衆）は壬生城攻撃を中断し小川台（現筑西市）に陣を敷く。これにより北条氏は山川陣を引き、4kmほど離れた武井・但馬（現結城市）という場所に陣城を構える。戦況は膠着状態となり、やがて北条氏が撤退していく。

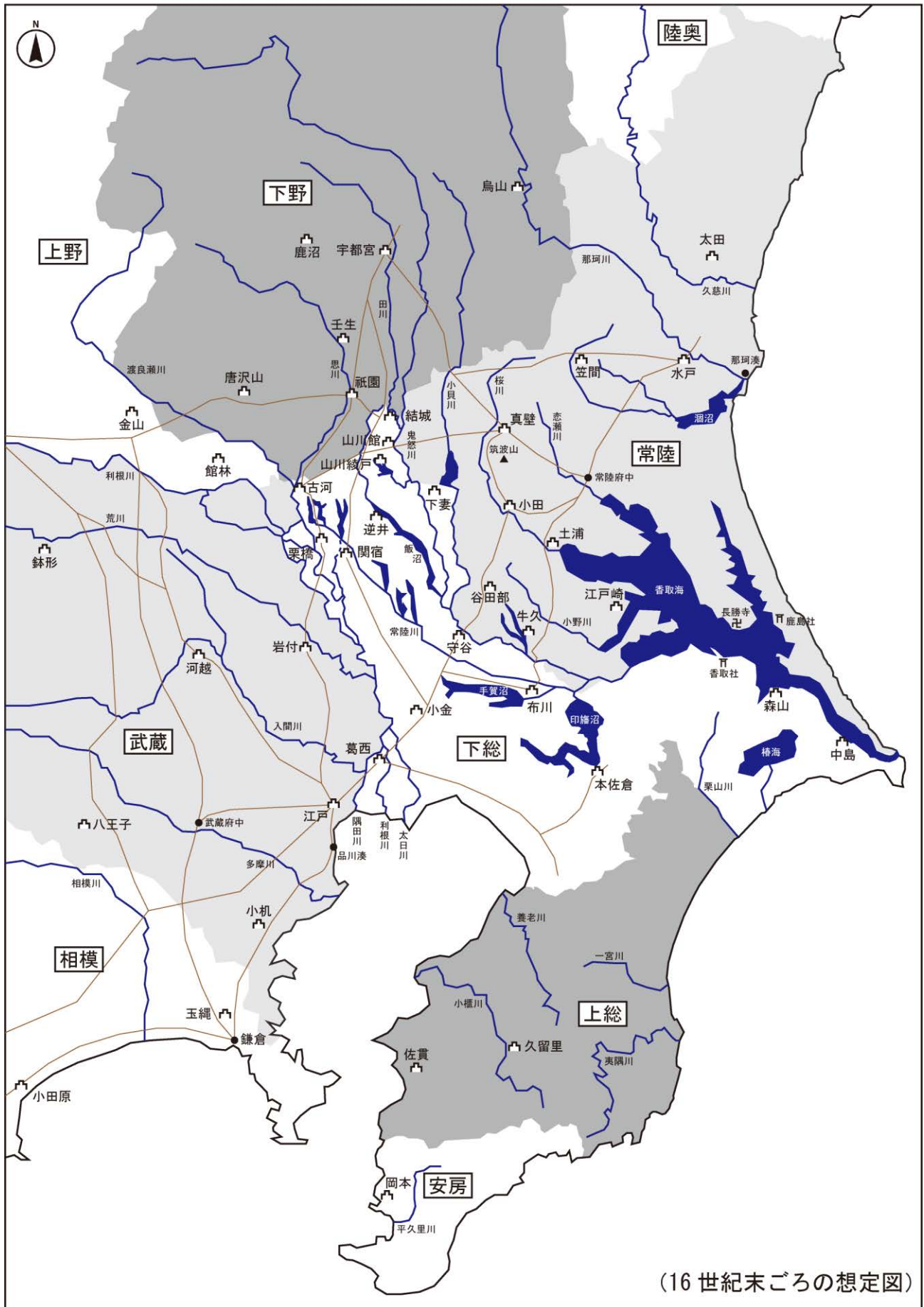
この一連の戦は「小川台合戦」「常陸小河合戦」などと呼ばれ、近年では北関東の領主層が越後の上杉謙信（天正6年3月死去）に頼ることなく主体的に自力で北条氏と対抗し進出を阻止したものと評価されている（市村2009、荒川2013）。

また、「小川台合戦」と同時期に謙信の甥の景勝と、北条氏から養子に入った景虎の間で行われた上杉氏の後継者争いである御館の乱（おたてのらん）が起こっている。この争いに際し、北条氏が景虎に対して有効な支援をすることができず、結果として景虎は自害、景勝が上杉家を継ぐこととなった最大の要因として、結城・山川の戦に釘づけにされてしまったことを挙げる分析もある（黒田2011）。

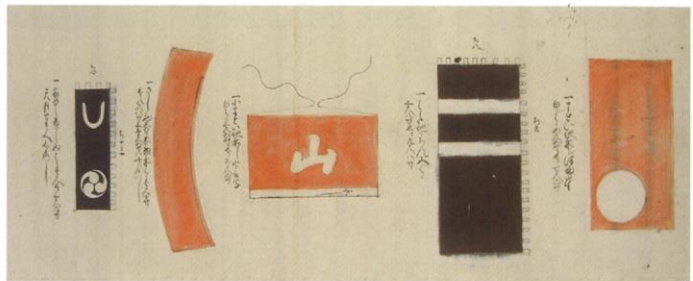
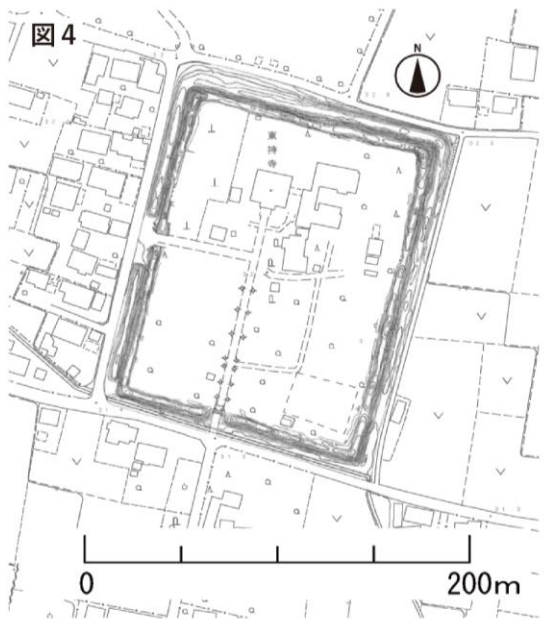
山川綾戸城が攻防戦に耐えきったことは、一局地戦の結果にとどまらず、その後の関東の戦国史にとって大きな意味を持っていたと考えられる。

主要参考文献

- ・荒川善夫「古文書で見る常陸小河合戦」『北関東の戦国時代』高志書院 2013年
- ・市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版 1994年
- ・市村高男「下総山河氏の成立とその背景—中世常総地域史の再検討—」
『中世東国の地域権力と社会』岩田書院 1996年 a
- ・市村高男「鎌倉末期の下総山川氏と得宗権力—二つの長勝寺梵鐘が結ぶ関東と津軽の歴史—」
『弘前大学国史研究』100号 1996年 b
- ・市村高男『東国の戦国合戦』吉川弘文館 2009年
- ・黒田基樹『戦国関東の覇権戦争 北条氏 VS 関東管領・上杉氏 55年の戦い』洋泉社 2011年
- ・黒田基樹『図説戦国北条氏と合戦』戎光祥出版 2018年
- ・齋藤慎一『中世武士の城』吉川弘文館 2006年
- ・佐々木倫朗「11 謙信の南征、小田原北条氏との抗争」『佐竹一族の中世』高志書院 2017年
- ・三和町史編さん委員会『三和町史 資料編 原始・古代・中世』三和町 1992年
- ・三和町立資料館『第3回企画展展示図録 中世の豪族・山川氏』2002年
- ・千野原靖方『中世房総の船』崙書房 1999年
- ・結城市史編さん委員会『結城市史 第四巻 古代中世通史編』結城市 1980年
- ・結城市史編さん委員会『結城市史 第五巻 近世通史編』結城市 1983年



(16世紀末ごろの想定図)



参考：山川氏旗指物図（『中世の豪族・山川氏』）

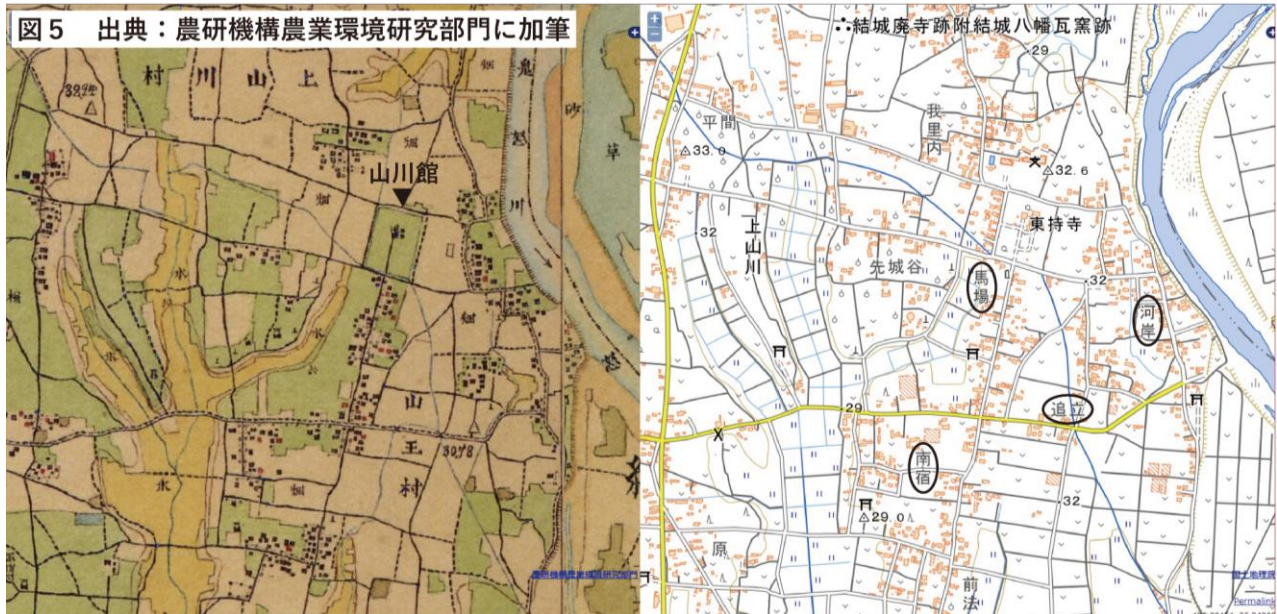
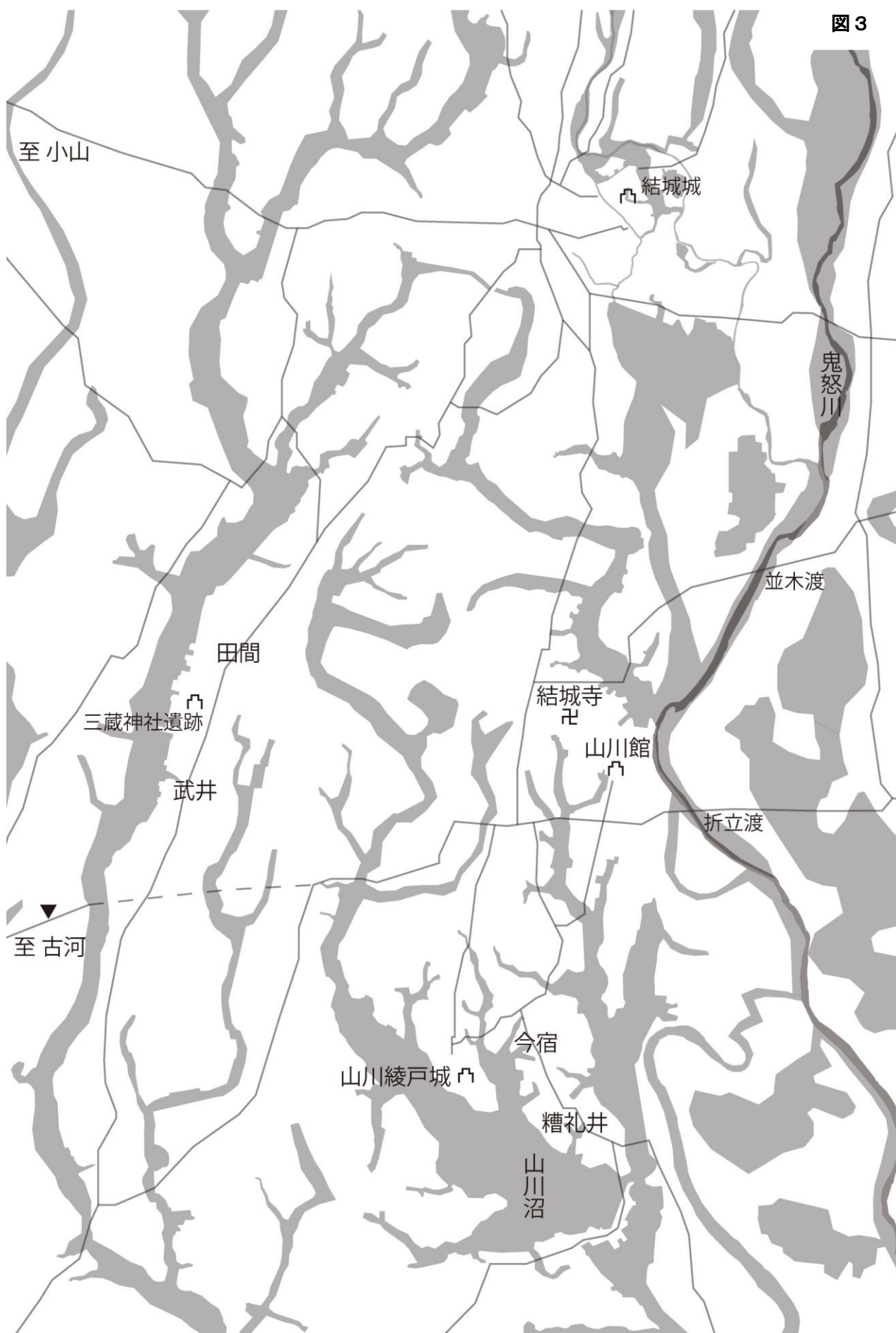


図3



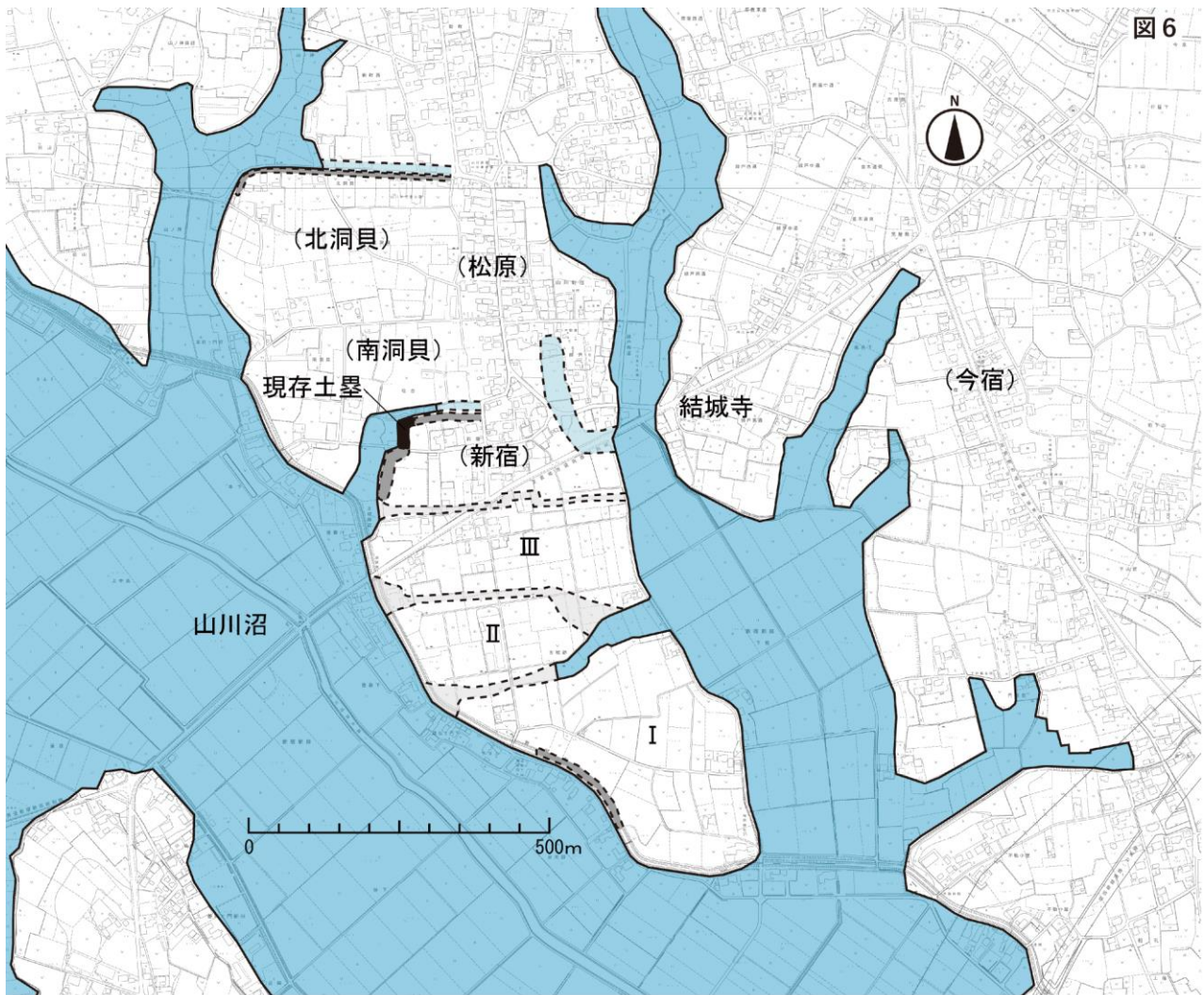


図6

図7 山川古城図（部分、近世前半）

『三和町史資料編 原始・古代・中世』

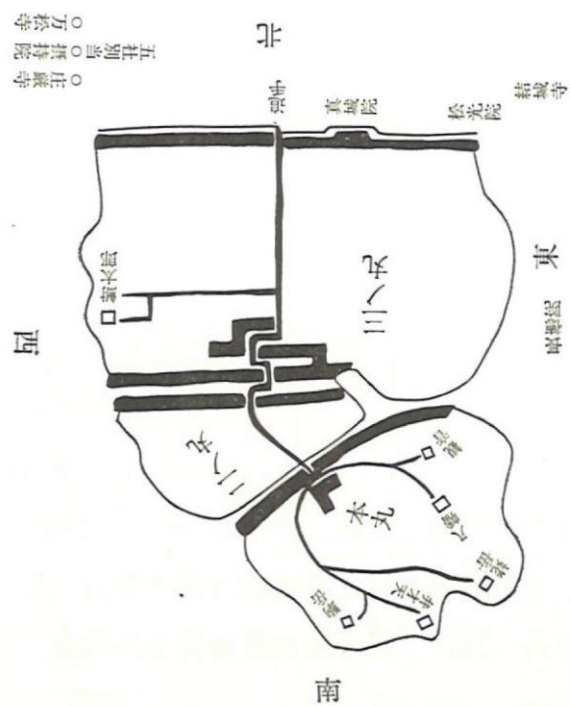
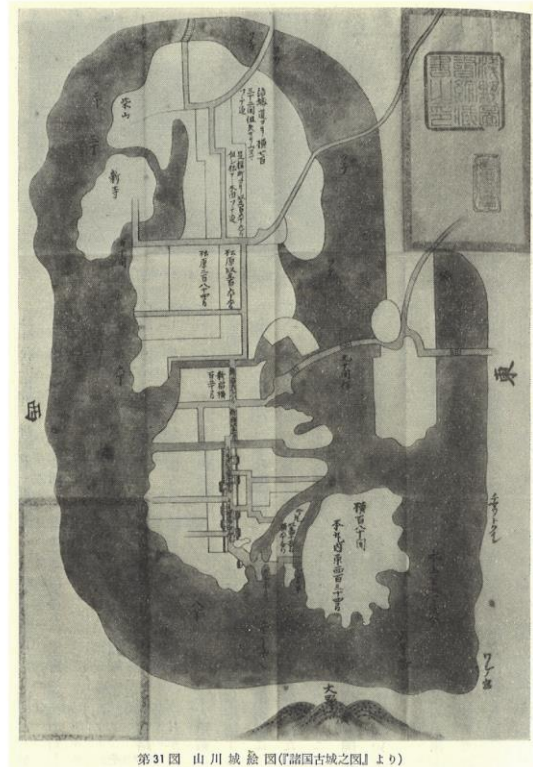


図8 山川城絵図（近世中期）『結城市史5』



第31圖 山川城絵図（『諸國古城之図』より）

錫高野城(東茨城郡城里町錫高野字太光房他)



○立地

鶏足山から北へ伸びる山塊が桂川とその支流の川によって削られてできた先端部にある。標高 93m を中心に遺構が残っている。

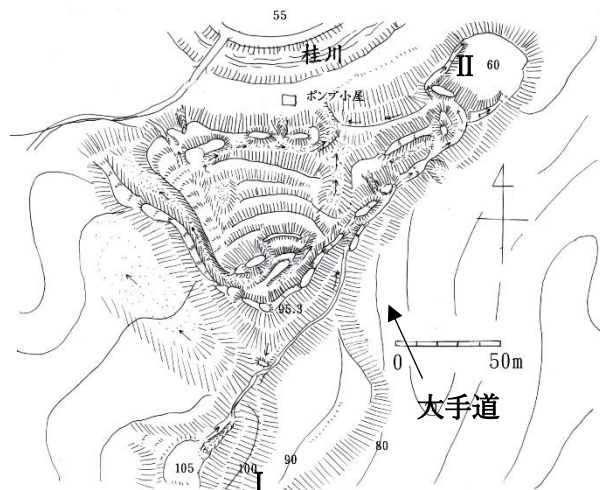
○構造

遺構は本城部と東砦にそれぞれ残っている。

本城部の主郭は、逆 L 字型土塁に囲まれた所が曲輪 I である。この場所を竪堀・横堀でひたすら横矢を掛けて防衛している。一方、I の北東側に曲輪 II があり、この間に道路遺構が残っている。この道路遺構は、主郭背後の二重堀切に接続していて、大手遺構と見られる。二曲輪の先端には遺構がない。しかし、1974 年航空写真 (CKT7412-C1-16) を見ると、かつては尾根続きに台地が北側に張り出していて遺構が残っていた可能性がある。一方、東砦は平場と二重堀切が残り、その背後に特段遺構はみられない。

○歴史・関連情報

歴史等は不明である。伝承もないことから錫高野(中世は、那珂西郡高野村)の「村の城」ではないかと考える。城より北東の台地上には、字城の内(ジョウノウチ)があり、大きな谷津が伸びている。これが、城域の範囲を示しているのかもしれない。城の北西には、三枝祇神社が鎮座している。この神社はかつて高野鹿島神社と呼ばれ、天正 9 年(1581) 9 月 23 日に佐竹義久・田代綱久が大旦那になって棟札を奉納していたことが確認できる。伝承によると、坂上田村麻呂が下野国の悪路王を討伐するのに、祈願したといわれている。貞治 2 年には佐竹氏と茂木氏が合戦をしたという記録も残っている。高久の鹿島神社には、町指定文化財の悪路王の首がある。錫高野村から北西に向かうと下野国東茂木保檜山村に接続することから、那珂川を使用しなくても常陸へ接続するルートの一つとして重視され、その結果城郭遺構が築かれたのかもしれない。(五十嵐)



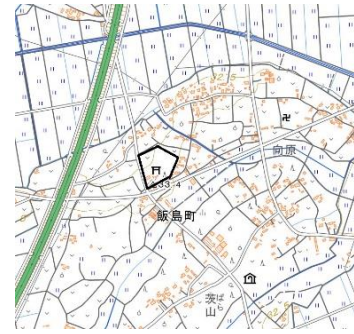
【参考文献】 「水府志料 12」国立国会図書館デジタルコレクション

錫高野城縄張図 調査 2023 年 12 月 18 日
青木義一・五十嵐雄大・岡本博志
作成者：青木義一

飯島城 (水戸市飯島町塚前 734)

○立地

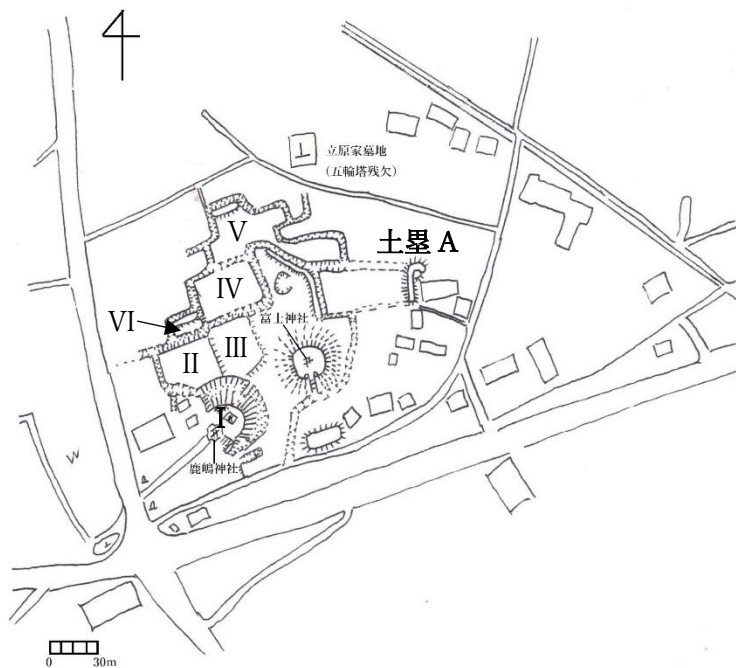
桜川右岸の標高 35mの台地上にある。南北を塩街道という下野と鹿島を結ぶ古道が通り、東西は河和田城・赤尾関城・鯉淵城など江戸氏に関連する城館を結ぶ道に面している。遺跡自体は、飯島町古墳群の包蔵地にもなっていて、複合遺跡である。



○構造

曲輪 I は鹿島神社の本殿が鎮座している場所であり、西側は参道となって煙滅している。それ以外は幅最大 6 m の堀跡が明確に残存している。

曲輪 I から北側・東側にかけて遺構が見られ、確認できるだけで 6 の曲輪がある。空堀が曲輪すべてめぐるようになっていて、堀底道を兼ねていたと思われる。一番東端に高さ 3m の土塁 A が残る。ここが城端を示しているのかもしれない。



○歴史・関連情報

明德 2 年(1391)極月二日の熊野参詣願文に那珂西郡の飯嶋七郎光忠・子息七郎三郎光忠が確認される。このことから南北朝から室町時代には飯嶋氏の館が先行してあったと思われる。今残る姿は、戦国時代に江戸氏の改修を受けた姿と考える。城主は悉知氏(七字氏)ともいわれているが、定かではない。現在城の北東にある立原家墓地には、五輪塔の一部がある。(五十嵐)

【参考文献】

水戸市史編さん委員会『水戸市史上巻』1963

松田要害城(桜川市松田)



○立地

筑波山から北へ伸びる山塊が、桜川の支流によって削られてできた台地先端部にある。標高 229m を中心とする一帯に遺構が見られる。

○構造

遺構は、麓部分と山城部分に分けられる。

麓部分は、標高 120m 付近に二重堀切・帯曲輪・武者走りなどの遺構が見られる。城内の A に五輪塔と宝篋印塔の残欠が残っている。

山城部分は南北 8 m 東西 20m の平地を取り囲むように逆さコの字型の土壇がある。南には幅 7 m 深さ 6 m の大堀切が見られ、この城最大の見所である。

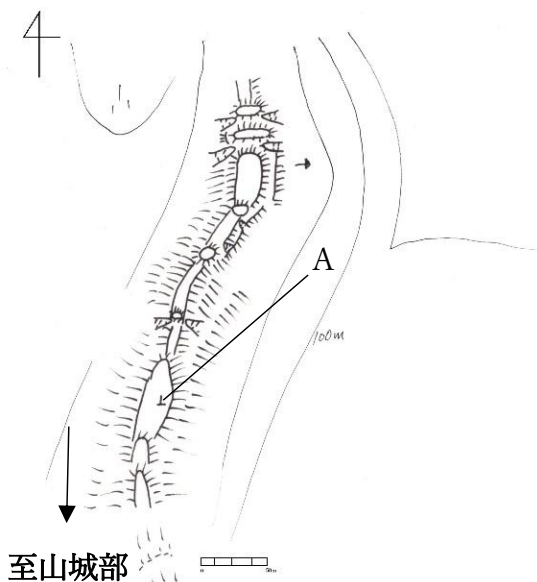
広範囲に遺構が残るものの所々に普請が甘く陣城のような印象を持つ。一方、松田から城内を通過して雨引観音へ抜ける古道が通っていることから、関所城の可能性もある。

○歴史・関連事項

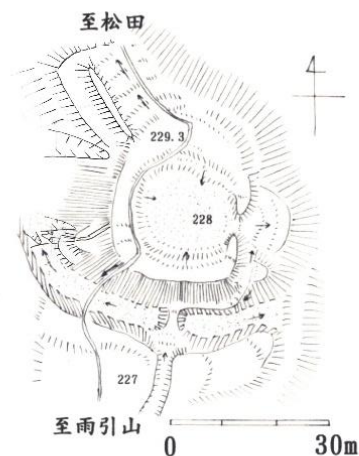
松田は小田氏の領地で、永禄年間に結城氏家臣の水谷正村が攻めたとされる。その際、小田氏は一族の茂木氏に援軍を頼んだ。茂木氏は松田に駐屯し水谷軍を迎撃した。このことから、攻め手側の水谷氏の陣城もしくは迎撃側の茂木氏の陣城の可能性もある。(五十嵐)

【参考文献】

茂木文書研究会編『茂木文書の世界』図録 茂木町まちなか文化交流館ふみの森もてぎ 2019



松田要害城麓部分
調査作成 2024 年 1 月 23 日
五十嵐雄大



松田要害城山城部
原図：青木義一を基に
五十嵐加筆

※本原稿の内容を転載及び図面変更を行って掲載した場合には、必ずその旨を明記すること。

笠間城跡表採の瓦について

齋藤 徳之・比毛 君男

はじめに

茨城県笠間市の笠間城は、慶長3(1598)年に入部した蒲生氏以降近世城郭に改修されたといわれている。山城でありながら幕末まで機能した全国的にも希少な近世城郭として市指定史跡であり、織豊系城郭の三要素と定義されている「石垣、礎石建物、瓦」は現在も遺存している(図1~3)。



図1 天守曲輪石垣



図2 本丸穴ヶ崎櫓跡礎石



図3 移築現存(八幡台)櫓【県指定】

平成25(2013)年より笠間城跡保存整備調査事業が進められる一方、平成23(2011)年の震災以降、図1の天守曲輪の石垣は崩落の危険があり、笠間城の廃材を利用したとされる天守曲輪内の現佐志能神社や周囲の瓦塀も現状維持が困難な状態となっている。

この状況を憂慮した筆者は、貴重な史料の散逸を防ぎ今後の調査研究に資することを目的として、城域に散乱する古瓦のうち、特に資料性が高いと判断したものを表採し、ここに報告することとした。

今回報告する資料は、近世瓦に共通する様相や、水戸城や土浦城など近隣の近世城郭でも見られる瓦当文様や刻印瓦など瓦の生産・流通をも考察できる可能性があり、今後の笠間城研究の一助となれば幸いである。執筆は、「はじめに」と1を齋藤、2と「おわりに」を比毛及び齋藤で分担した。

1. 瓦の表採地点について

図4に笠間城跡の縄張図を示す。古瓦の表採は近世城郭エリアである天守曲輪跡や本丸跡周辺で行った。各遺物の表採位置の詳細を図5に示す。先述の通り、天守曲輪内の現佐志能神社や周囲の瓦塀に笠間城の廃材が利用されたとされ、確かに天守曲輪周囲の傾斜地で多く表採された。また、その後の調査では本丸跡西端の穴ヶ崎櫓跡周囲の傾斜地でも表採される例が多く、城内に散乱した瓦礫が近現代の城跡公園整備の際にこの周囲に集積された可能性も考えられる。

つまり、今次報告の表採位置と当時の城内の瓦葺き建物配置を関連付けて議論するには、発掘調査等による検証が必要なため、現状では慎重に判断すべきと考えている。尚、遺跡の現状変更が発生しないよう掘削などは全く行っていない。採取対象は地表面から視認できて資料の状態が良いものに限定した。採取は草木が枯れ、表出した瓦が視認しやすい冬期に行った(採取日2022年1月23日)。

※本稿は茨城城郭サミット(県央・県西編、2024.2.10)にて紙上報告した原稿に写真図(1,2,3,9,10)を加え編集したものです(2024.2.11, 齋藤徳之)

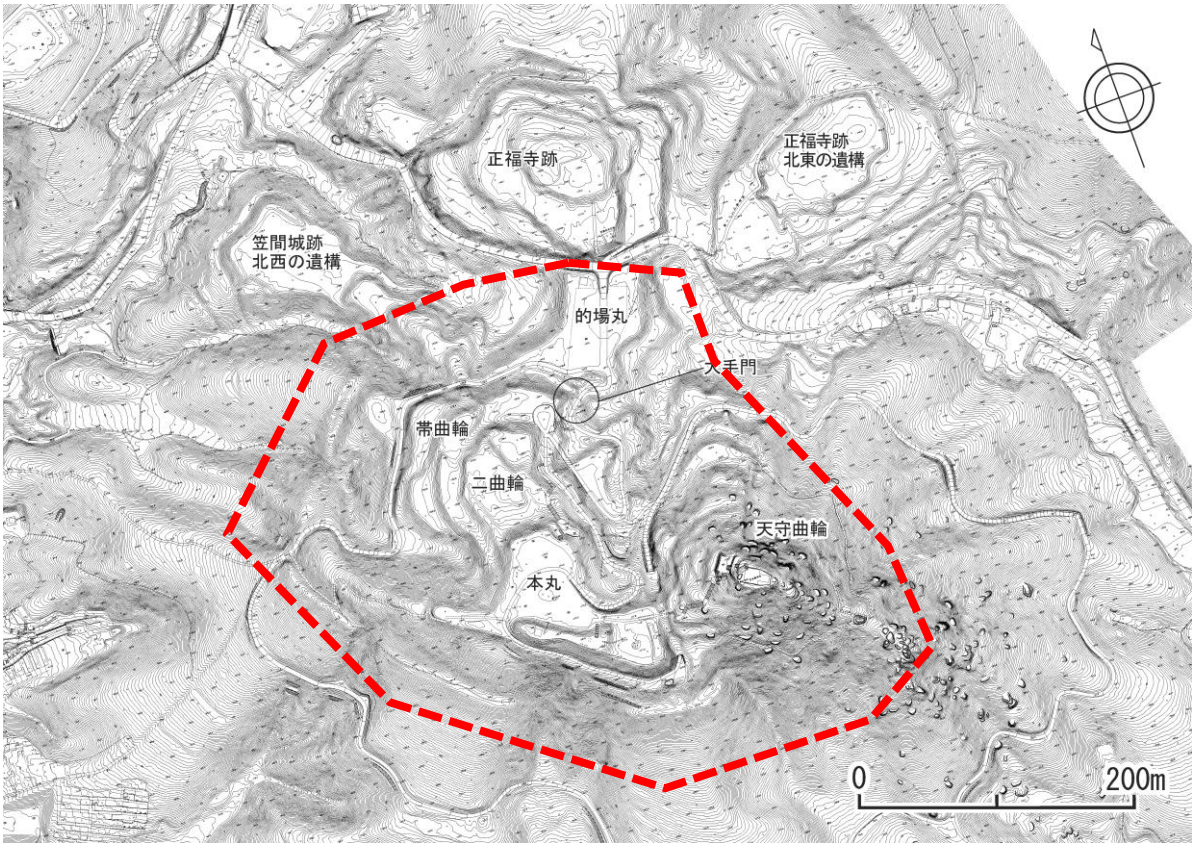


図4 笠間城跡 航空測量図(破線内が近世城郭エリア)

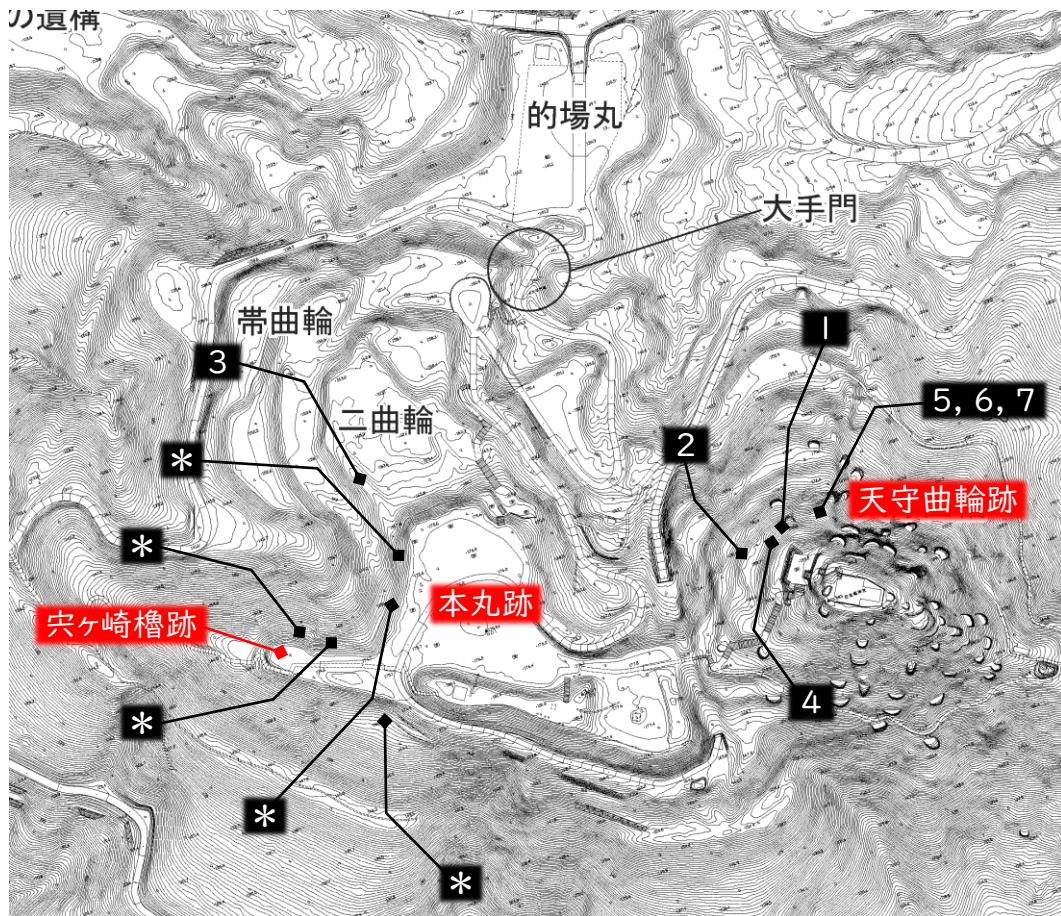


図5 古瓦表採位置

図中の番号は図6,7,8の資料番号に対応。*印はその他の表採瓦採取位置。

2. 笠間城跡表採瓦について

当章では前章を踏まえ、以下に笠間城跡表採瓦を図と表により報告する。図化は比毛が行い、観察表は齋藤と比毛が共同で作成した。

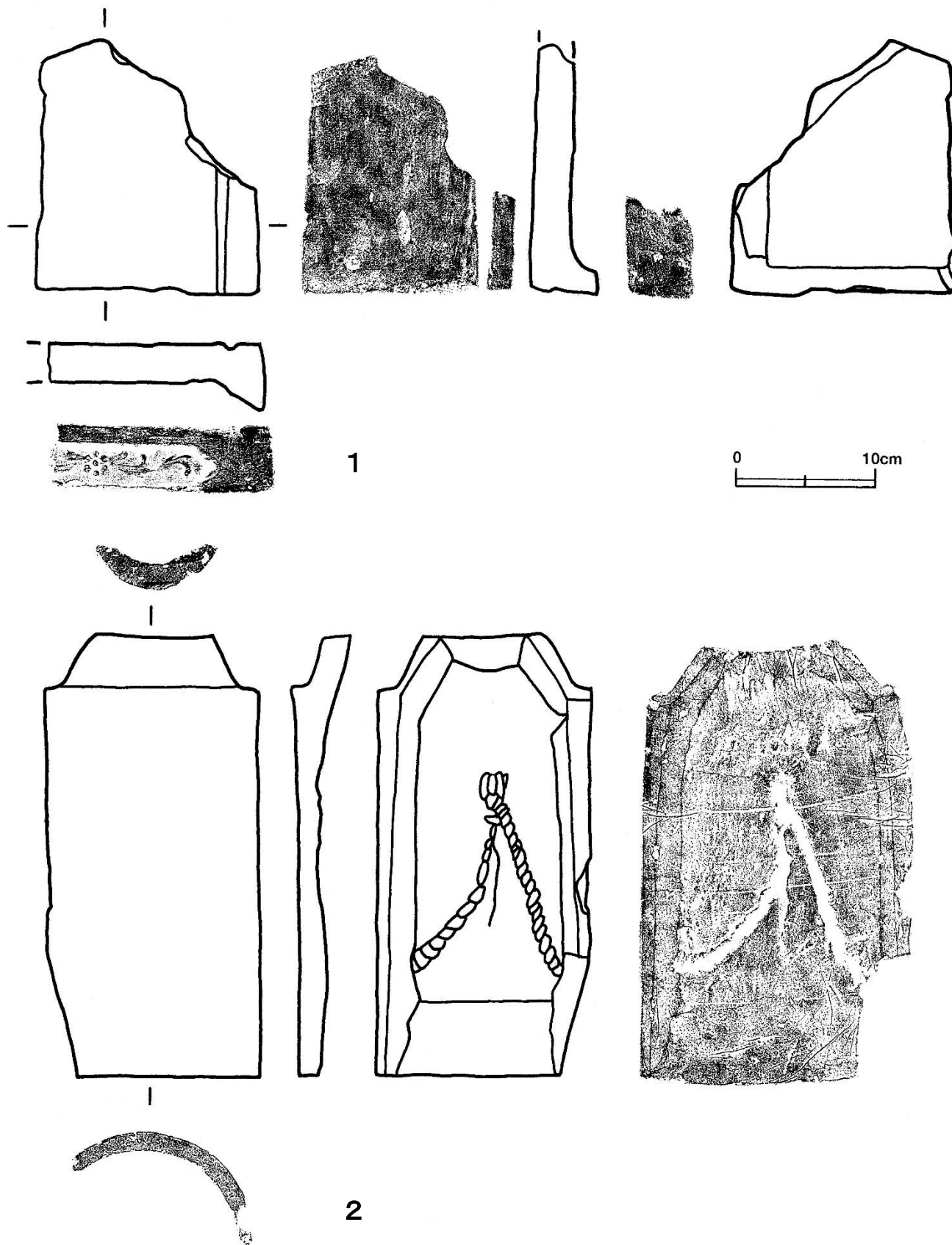
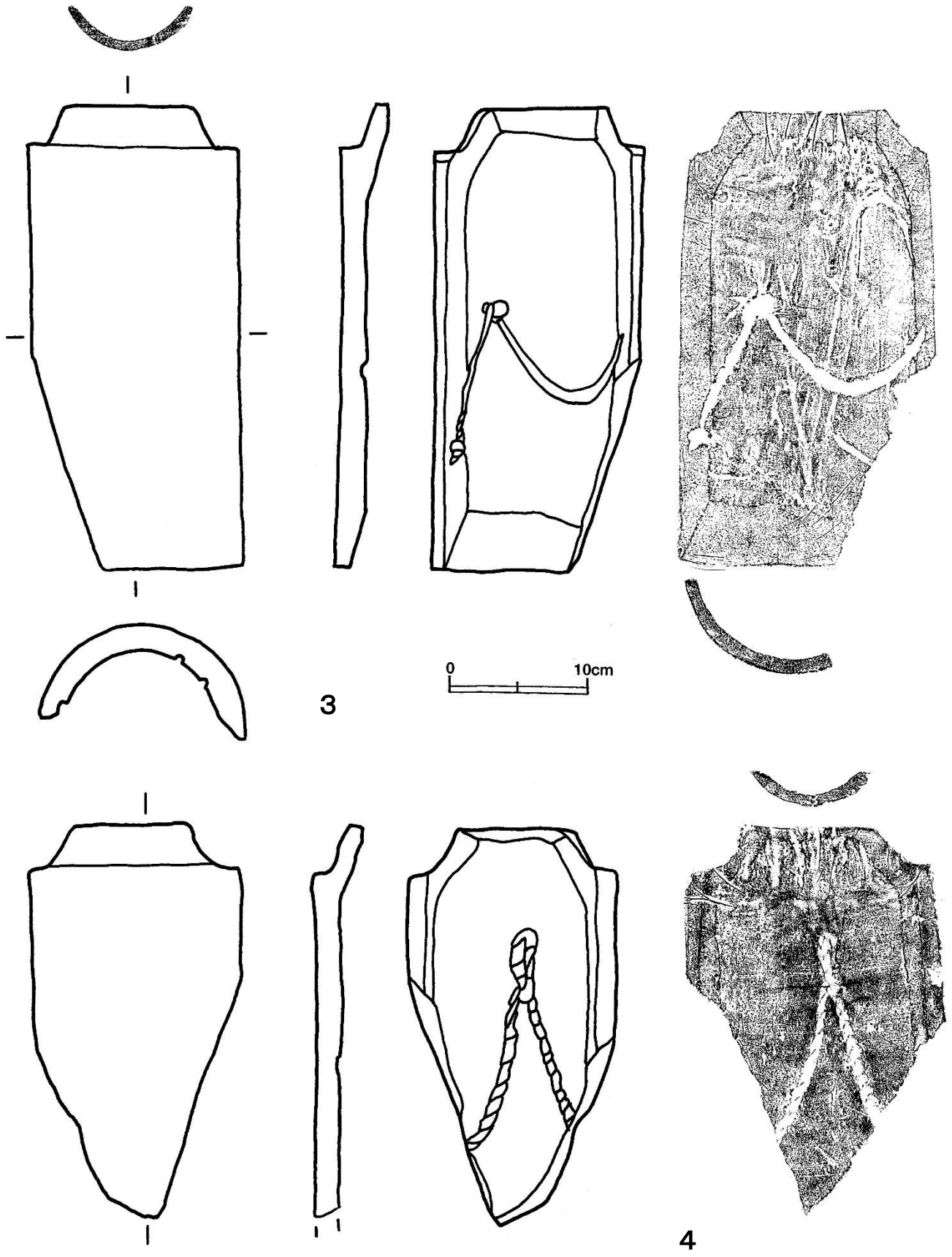


図 6 笠間城跡表採瓦(1)



3

4

図7 笠間城跡表採瓦(2)

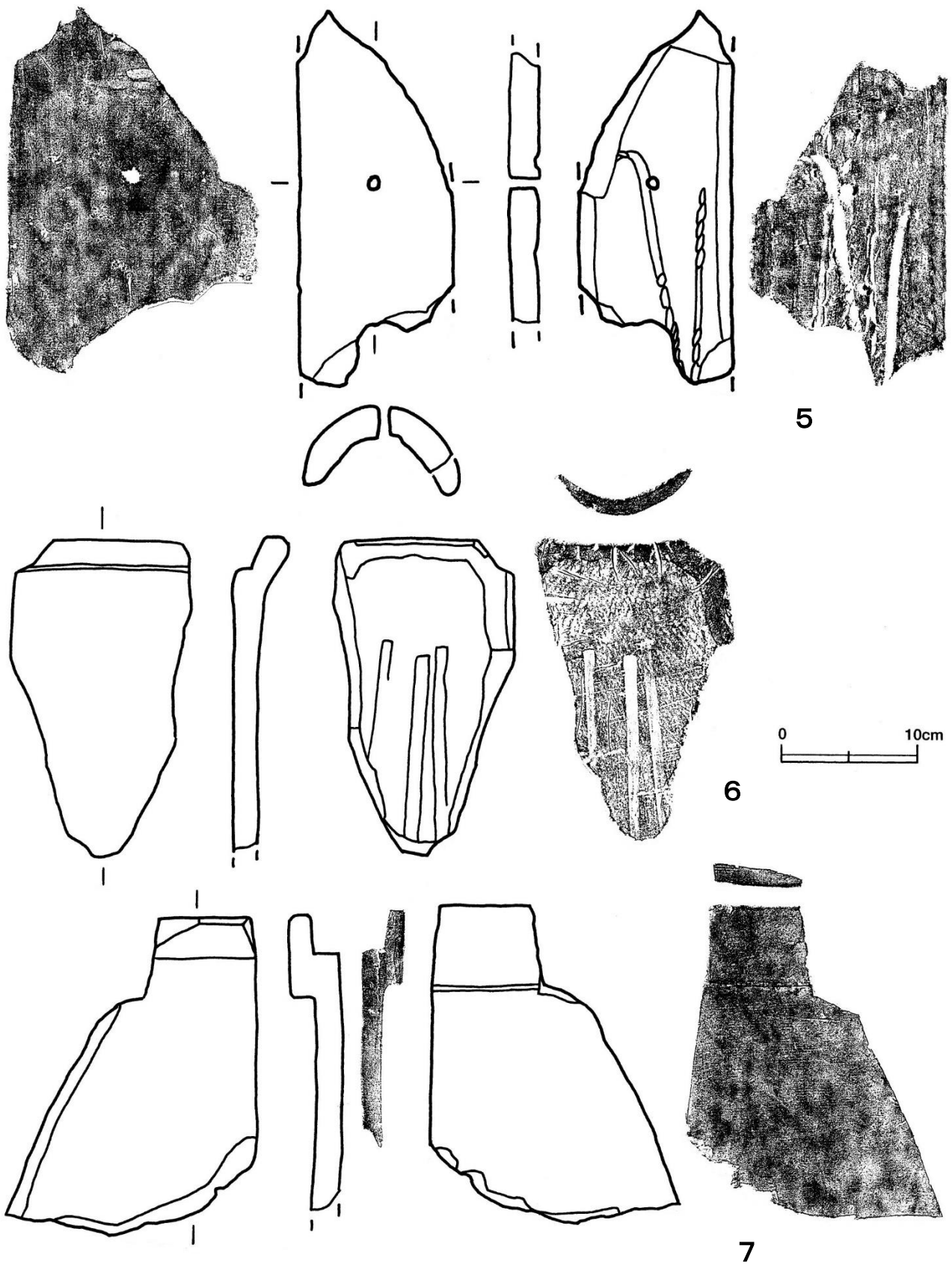


図 8 笠間城跡表採瓦(3)

表 1 笠間城跡表採瓦

資料番号	種別	資料の特徴	表採地点
図 6-1	板塀瓦	瓦当文様は七曜文の中心飾りから左右に二葉一組の唐草文が二転する。凸面に水切り溝。表面は丁寧なナデ。	天守曲輪 北西側斜面
図 6-2	丸瓦	筒部右端を欠く他はほぼ完形。凹面は布目痕を僅かに残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側縁の面取りは二面。凸面縦方向のヘラ削り。	天守曲輪 西側腰曲輪
図 7-3	丸瓦	筒部右側を欠く他はほぼ完形。凹面は布目痕を残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側面面取り。	二の丸 西側土塁上
図 7-4	丸瓦	玉縁から筒部中央の破片。凹面は布目痕を僅かに残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側面の面取りは二面。	天守曲輪 西側腰曲輪
図 8-5	丸瓦	小ぶりの筒部片。中央に釘穴。凹面に布目痕・コビキ痕、吊紐痕あり。	天守曲輪 北西側斜面
図 8-6	丸瓦	玉縁から筒部中央にかけての破片。凹面はコビキ痕の上に、浅い内叩き痕が3条残る。玉縁寄りには蕨状の圧痕あり。	天守曲輪 北西側斜面
図 8-7	板棧瓦	全面を丁寧にナデ、側面は僅かに屈曲する。	天守曲輪 北西側斜面



図 9 表採時の状況 [上は資料 1、
下図は資料 5~7 に対応]



図 10 丸瓦内面の痕跡 [資料 2 を拡大]

おわりに

関東地方における幕藩体制下で、笠間城のような山城が近世を通じて維持された類例は下野国烏山城のみである。烏山城は、八溝山地鷲子山塊内の那珂川と荒川に挟まれた喜連川丘陵に位置し、丘陵頂部に古本丸(中世の主郭)と本丸を配し、石垣遺構を有している。17世紀後半に丘陵東側山麓に三の丸を造営して以後は、三の丸が藩政の中心となった。烏山城本丸・古本丸の確認調査では、平瓦を中心とする瓦の出土が報告されているが、詳細は不詳である。

平地に囲まれた独立丘陵上に営まれた佐野城は、近世初期に時期が限定できる好例である。築城が慶長7年(1602)、佐野氏の改易が同19年(1614)である。筆者のうち齋藤は、佐野城跡出土瓦を実見し、丸瓦にコビキ痕と吊紐痕が残るのを確認している。

上野国沼田城は、天文元年(1532)年沼田氏の居城として整備され、後に真田氏が城主となる。天和元年(1681)に沼田藩は改易され、翌年に城は破却されている。沼田城跡出土の丸瓦は、凹面に布目痕はあるものの吊紐痕は確認されていない(2022年5月の調査成果報告会にて齋藤が確認)。

常陸国では、土浦城本丸土塁整備に伴う調査で板塀瓦が出土している。瓦には、19世紀に土浦藩の瓦師となる「前澤」の印が押されている。水戸城では、県立水戸三高内(旧二の丸御殿)の発掘調査で17世紀中葉から18世紀の板塀瓦などが出土している。また笠間市内では、宍戸城跡の数次の発掘調査で慶長7年(1602)から正保2年(1645)までの秋田氏藩政下における城下町遺構が調査され、概期の近世瓦が出土している。

奈良斑鳩の法隆寺昭和資材帳作成に伴う瓦調査によると、丸瓦凹面の吊紐痕は17世紀まで確認され、それ以後は消失する。棒状の内叩き痕は18世紀までは確認されている。

上記を踏まえて当報告の瓦群を比較すると、笠間城跡天守曲輪出土丸瓦の多くに布目痕・コビキ痕・吊紐痕を有しているものが見られる。これらの特徴は概ね17世紀代のものと考えられる。瓦は天守曲輪の建造物に使用されていた可能性が高いが、近代以後の佐志能神社建築時にも建築資材の移動があると想定されるため、現段階で詳細を明らかにすることはできない。今後も関東地方における近世城郭の出土瓦の類例を更に調べ、笠間城跡出土瓦の検討を加えてゆきたい。

なお当報告で掲載された資料は、今後笠間市教育委員会に託す予定である。

主要参考文献【敬称略、50音順】

笠間市教育委員会『笠間城跡保存整備基礎調査報告書』2014年

小林謙一・佐川正敏「調査報告1 法隆寺出土古瓦の調査速報(2) 平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我 法隆寺昭和資材帳調査概報10』

公益財団法人茨城県教育財団『文化財調査報告396集 水戸城跡』2015年

財団法人茨城県教育財団『文化財調査報告362集 水戸城跡』2012年

佐野市教育委員会『佐野城跡(春日岡城)V』2009年

土浦市教育委員会『土浦城址発掘調査報告書』1989年

土浦市教育委員会『史跡 土浦城跡』2002年

土浦市教育委員会『史跡 土浦城跡II』2004年

那須烏山市教育委員会『烏山城跡確認調査概報』2014年

沼田市教育委員会『沼田城跡 発掘調査報告書』2001年

沼田市教育委員会『沼田城跡2 発掘調査報告書』2019年

有吉重蔵編集『考古調査ハンドブック18 古瓦の考古学』2018年 ニューサイエンス社